とある雪旗は転生者

三十面相

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様も『失敗』する。

これは、とある少年が、神様の失敗によって、新たな場所へと『転生』する物語。

目次

失敗？　転生で許して。 1
初めての、学校。勘弁してくれ……　3
電撃姫。やはり、上条は上条だった。　7
七月二十日。ついに、物語は動き出す？　9
ステイル＝マグヌス戦。　12
魔法のアイテム＝携帯電話　15
本当の意味での英雄　18
英雄達は動き出す　22
上条当麻という名の英雄　26
いつもの病室。　28
忘れられた男　31
平穏な日常　33
『八月十九日』　やるべきこと。　35
『アイテム』　変化をもたらす。　37
『絶対能力者計画』　40
一方通行ｖｓ上条当麻　43
病室での出来事　45
再び訪れる平穏　47
八月二十八日　50
御使堕し　53
終わらせるための行動　57
『八月三十一日』　夏休み最終日　60
久々の学校　64
近づいてく恐怖　67

始まる絶望 71
シェリー＝クロムウェル 75
風斬氷華という名の友達 80
九月八日　アニェーゼ部隊 84
それは当たり前のこと 88
様式美というヤツだろうか？ 92
大覇聖祭。燃え盛る炎 95
サボり魔だったりしたのだ 98
『刺突杭剣』 101
運び屋　オリアナ＝トムソン 103
『速記原典』 107
玉投げ 110
オリアナｖｓ上条当麻 113
雪旗は本気で戦うのだ 116
束の間の休息 120
終わらせたい状況 122
時間は迫る一方 124
第二十三学区 127
雪旗硬地＆上条当麻ｖｓオリアナ＝トムソン 129
あと少しで終わりを告げる 131
偉大な両親 135
北イタリア　五泊七日の旅 138
アドリア海の女王 143
雪旗とルチアとアンジェレネ 149
女王艦隊 153

力を合わせて、全員で　161
ゆるい一日　169
襲撃者　174
雪旗硬地ＶＳ垣根帝督　179
雪旗硬地ＶＳ垣根帝督　続　183
戦いの後の休息　187
日常から一転　191
黒い翼ｖｓ竜王の息吹　196
完全敗北　201
後方のアックア　209
イギリス直行　217
テロリスト　223

失敗？　転生で許して。

彼、雪旗硬地（せつきこうじ）は、適当に道草を食っていた。その日は普通ではなかった。彼にとっては、『特別』と言っても過言ではない程の、とてつもない出来事が、起きてしまった。

「……ん？」

彼は突然暗くなった空を見上げた。すると何か『落ちてきた』。

ドゴォォーンッッ!!!　何かが自分の脳天に当たり、自分の意識はそこで完全に遮断された。

「……ここは、どこだ？」

世界は白に染まった、と言っても過言ではない程の白さ。圧倒的白さ。どこまでも続く真っ白な世界。そこにポツンと一人残された。そのことを頭で理解した瞬間。目の前に何かが現れた。真っ白な世界にたった二人の存在。

「……アンタ……一体誰だ？」

「……私は、『神』とでも呼んでください」

神と名乗るその『存在』はとても神々しい光に包まれており、神と名乗るのに相応しいというのがなんとなく理解できた。

「そ、そうかよ……神か」

「あら、理解が及んだのですか？　私を初めて見て、そこまで冷静でいられた人間は生まれて初めてです……」

少し微笑みながら言う。

「そ、それより、なんで俺はここにいるんだ？　死んだっていうのは、なんとなくわかった、ってことは、もしかして、天国か地獄に行く。審判の場所とでも言うのか？」

「ええ、アナタがちゃんとした死に方をしていれば、そうした場所へと誘えたのですが……今回の場合は例外です」

「は？」

「あなたには、『転生』というモノをしていただきます」

「て、転生？　ってことは何か？　俺はどこかの世界へと誘われるってことか？」

「まぁ、そうですね」
　理解に及ばないというよりは、バカバカしいお話だと思った。それでももう既に話は進んでいたの、そのまま勝手に話が進んで行く。
「……とりあえず、行き先を選んでください」
「あ……あのさ、『二次元』っていう世界にもいけるのか？」
　頭を掻きながら言う。
「えぇ、どんな世界だろうが、行けますよ」
「だったら『とある魔術の禁書目録』って言う世界に行かせてくれよ」
　とある魔術の禁書目録。自分がもし行けるとしたら、ここがいいな。と最近思っていた場所だった。ちなみに前だったら、シティーハンターが良かった。その前なら、確か、ハンターハンターだった気がする。
「……わかりました。それでは、『特典』をおつけしますので、何か言ってください」
「特典？」
「たとえば、こんな能力が欲しいとか、絶対に死なない体が良いとか、まぁ、二つだけですが」
　そのまま、唸りながら、考える雪旗。そしてこんなことを言った。
「不死身の体と神並みの英知」
「まぁ、この世界ならその二つがあれば、ほぼ無敵でしょうね」
「そりゃ、それなら死ぬ心配はないしな、つか、俺の死に方異様すぎるし」
「あぁ、あれは、私の……ゲッフンゲッフン」
　誤魔化すように、咳払いをする。このことだけで、彼はなんとなく察しがついた。ついでに『神』をぶち殺してやりたくなったが、そのための、『転生』なんだろうと諦める雪旗。
「それでは、ご武運を」
　優しく微笑みながら、手を振る。
「腹立つわぁ……」

初めての、学校。勘弁してくれ……

目の当たりにした、世界は『とある魔術の禁書目録』だった。彼が目を覚ますと目の前に広がっているのは、普通の寮みたいな感じの部屋でかなり簡素だった。

「……」

とりあえず、洗面所の前まで行くと、そこに映ってる顔は自分だった。そして体を見る限り。どうやら年齢は15歳ぐらいで、多分、前世と同じぐらいの年齢だと思う。

「……これも、特典か？」

ぶっちゃけ、もし自分が0歳から初めていたら、いろんな恥辱が待っていた気がする。だからこれはこれは、いろんな意味ですごく感謝してます神様と心の中で言うと、直後に死んだ理由を思い出し、やっぱり殺したくなる雪旗。雪旗の心の中は大忙しだった。

カレンダーを見て、今日の日付を確認すると今日はなんと、七月十九日だった。

（せめて……!!!　せめて、あと一日過ぎていれば、学校へ行かずに済んだのに!!!!）

と本気で思っている雪旗はまた神をぶち殺したくなった。というか、もう上条当麻に奇跡ぶち殺されて、慌てふためいてくれないかなと切実に願う雪旗。

「……はぁ、学校行くか」

とりあえず、制服に着替え、学校へと行く。

（さすが、学園都市製、若干軽く感じるぜ!!　たぶん気の所為だろうけど!!）

そして、彼は学校へ行く最中一人で適当に何か考えながら歩いていると、直後にとんでもないことに気付く。

（おいおいおいおい、俺、よく考えたら、ほとんど初対面じゃん。みんなと、つか初対面だよ。どうしよう!!!!!　接し方が一切わからない！）

神の馬鹿野郎オオオオオオオオオ!!!!!　という声が学園都市の第七学区に響いた。

学校へ、ビクビクしながら行くと、みんなは気さくな感じで声を掛けてきてくれた。ちなみに学校までの地図は第七学区にあったのでここまで来れた。
「よぉ、雪旗！」
「お、おう」
（誰⁉）
「雪旗ぁ!!　頼む。宿題見せてくれぇ!!」
「つたく、またかぁ？」
（反応的に）
「悪い、サンキュッ!!」
（合ってたのか……超絶奇跡じゃね？　神の力？）
「あれ、雪旗。今日は早いんだな？」
そこに居たのは上条当麻その人だった。不幸に愛されてる。不幸者。
「……よ、よぉ、上条さん」
「上条さん？」
（し、し、しまったぁぁぁぁぁぁ!!!!　いつもの癖でつい、そう呼んじまったぁぁ!!!）
ちなみに、さん付けしろよデコ野郎!!　と言った人に対しては、なぜかさん付けしたくなくなる。不思議である。余談だが、さん付けしているのは上条当麻と佐天涙子のみである。禁書キャラならの話である。佐天さんが禁書キャラかはわからないけど。
「ば、ばかだなぁ、悪ふざけだよ。上条」
ポンッと背中を叩きつつ、誤魔化した。
「別に気にしてないけど、なんで突然？」
「それは、いっつも、カミやんが自分のこと上条さんとか言うからだにゃー」
「そういや、いっつも言ってはりますなぁ、カミやんは」
あの二人が現れた。
（やっべぇよ。土御門だよ。バレるよ。多分、俺のことバレるよ。つか俺ってどう喋れば、普通なのか、いまだに理解できてねぇよ。青髪

の方も青髪でなんとなく、鋭い所あるから危険なんだよなぁ……）
　などと、いろいろ悪戦苦闘しつつも、とりあえず二人とも会話する。
「ったく、雪っちは、本当におかしな感じだにゃー」
「本当それやで、なぜ、こんなヤツが好かれるのか!!　わいには一切理解できひん!!」
　割と、情報を手に入れれるかもしれないから、この三人とは仲良くしておこう、ていうか、これも特典か？　最初から仲良いぞ？　まぁ、どうでもいいがなどと考える。
　時間が経ち、とりあえず、なんとか、今日を乗り切る、雪旗は欠伸をしながら、眠そうに目を擦る。
（ガチで疲れた。帰りたい……早く。俺は……）
　体の疲れを感じながら、学園都市をウロウロしていると、あることに気付く。それはもう気付いた時には、遅いモノだった。
（迷子になっちまったぁぁぁぁ!!!）
　心の中で悲痛な叫びを迸らせる、雪旗は自分の人生を恨む。そのまま、悪の権化へと変化……する訳もなく、仕方ないので、掲示板まで行く。途中で、ファミレスを見かける。丁度、小腹も空いたと思っていた頃だったので、何かそこで食べようかと、何の気なしに行く。それが、失敗だったと、彼はすぐに気付く。
　それは、ファミレスに入った直後の話だった。そこに居たのは。どう考えても顔見知りだった。それはツンツン頭だった。それは上条当麻だった。
　そして気付く。気付いてしまった。ここは、彼がスキルアウトに追われるファミレスだったのだとッッ!!!
「……嘘だろ」
　トイレの方から数人の男達が現れ。上条の目の前に立ちはだかる。
「ふ、不幸だぁーッ!!」
　そのまま上条は外へと飛び出そうと、一気に駆け抜けようとする。勿論、ファミレスの自動ドアの目の前に居た。雪旗に気付かず。
　ドォーンッ！　と自分にぶつかり、上条はファミレス側へ、雪旗は外へと吹っ飛ぶ。

「わ、悪い！　大丈夫か？　って……雪旗か……」
「雪旗か……はないだろ。ぶっ飛ばすぞ。この野郎」
「あっ！　そうだ!!　お前の力で追っ払ってくれよ!!　アイツら!!
頼む！　上条さんの一生のお願い!!」
　彼の言った言葉を即座に理解した。自分には何か能力が備わってるらしい。しかも、あの程度の連中なら一掃できるようなそんな能力。しかし自分のことをまだしっかりわかっている訳ではないので、能力を発動することすらできない。必死に何か言い訳を考えようと思ったのだが、そんな必要はなかった。
「さぁ!!　いいのか!!　お前ら、コイツは、肉体強化のレベル４だぞ!!」
（ナイス。上条!!　セリフは小物っぽいが、ナイスアシストだ!!）
　心の中で上条を褒め讃え、雪旗はそれを発動させる。どうやらわかれば、発動することは訳なかったようだ。そのまま少し、ジャンプをしてみた、すると思った以上に高く飛ぶ。大体十メートルぐらいだろうか。それを見るとスキルアウトの連中は、一気に顔が真っ青になる。どう考えても、身体能力に差があるとわかったのだろう。あんまりファミレスの前で騒ぐのは良くないが。
「……案外、あっさり引きやがったな」
　少し拍子抜けした雪旗だったが、とりあえず難は過ぎたようだったので安堵した。

電撃姫。やはり、上条は上条だった。

「……ちょっとアンタ」

髪を掻あげつつ、電気をバチッッ！　と鳴らしながら、こちらへと歩み寄る人影。彼女は御坂美琴。この『学園都市』の超能力者の第三位という序列に位置する。電撃使い（エレクトロマスター）だ。

雪旗は本当にここに来なければよかったと後悔するが、もう時すでに遅しということで、絡まれるしか運命が無いということだ。

（いや、待てよ？　コイツは、電撃をうち消せる上条に用事があるんだ……だったら、俺は別に要らないだろ……いや、しかし、上条に付いて行かないと、寮の場所が……）

自分の中で考えを纏められず、かなり考え込んでいる間。二人はそんな雪旗は無視して、いつの間にかどこかへ消えていた。

（ちょっと待てよぉ!!!）

心の中でキレながら、二人を探すために走り出す。すると、店員に止められ、なぜか二人の食事代を払うはめになった。これはもうぶっ飛ばす。確定事項と心の中で、ふつふつと燃えたぎる。闘志を上条にぶつけようと心に誓った。

ちなみに、女子相手に本気で殴るのは、少し気が引けるので、できることならしたくないと思っている雪旗。

「見つからない……。確か、どこかの橋みたいな場所だった気がするんだけどなぁー？」

そこら辺をどんなに見回っても、そんな場所を見つけることすらできない。しかし、さすが外とは二、三十年の開きがあると言われるだけあって、中にある物の大抵は高度なモノばかりで、見ててもなかなか楽しめた雪旗。目的を一瞬忘れそうになるのを首を横に振り、忘れないようにする。二人を探すために走り出す。そして絶対に食事代を出させると誓う。

「ゼェ……ゼェ……ゼェ……」

やっとのこと見つけた。二人はまだ戦っている最中だった。しかし見た感じ、やはり上条の方に分がある。さすがに『幻想殺し』とい

う異能に対して最強の力があるのとの違いなのかもしれない。が、御坂も御坂でタダでやられるつもりもないようだ。砂鉄で作ったブレードを鞭のように飛ばし、上条を倒そうとする。しかし、それも上条は無効化する。

「……終わったな」

そのまま、戦いが一通り終わると雪旗が、二人の下へと行く。そして二人が雪旗に気付くと御坂の方は不機嫌そうな、上条の方は安堵したような表情だった。そして、その二人に雪旗は言う。

「金を寄越せ。貴様らのおかげで、俺はファミレス代を二人分払わされたぞ」

二人はハッと気付き、謝りつつ払ってくれた。

「……ったく、御坂さんよぉ。上条を好きなのは勝手だが、無銭飲食はいけないなぁ……」

と少し小馬鹿にした感じで言うと、御坂が顔を真っ赤にして、こちらに電撃を放つ。それを上空に一気に飛び、その攻撃を避ける。こんな使い方もあるんだな、と自分にちょっぴり感心したりしてる。

そのまま綺麗に着地して、御坂の方を見て、ため息を吐きながら肩を竦める。それが逆鱗に触れたのだろう。さらに激しい電撃が迸ることになった。

七月二十日。ついに、物語は動き出す？

今日は七月二〇日。簡単に説明すると、今日がインデックスと初めて出会う日でもある。雪旗硬地（せつきこうじ）の寮の部屋が上条のすぐ隣というのを昨日知ったばかりで、いろいろと面倒なことに巻き込まれるんじゃないだろうか。と心配しているが、絶対に巻き込まれるだろう。というか多分自分から行きそうな気がする。それだったら、『イレギュラー』が混じるんだったら……悲劇を回避してやろうじゃないかと雪旗は思った。

今回の犠牲は上条当麻だ。彼は記憶のエピソードを司る部分が綺麗さっぱりと無くなるのだ。それを考えると、やはりそんな悲劇を避けることができれば、今回に限っては誰一人として、傷つかず、事が済むのではないのだろうかと、雪旗は楽観的に考えていた。

それからしばらく経ち。インデックスがどうやら外へと出て行ったようだ。彼女がこちらに来るのは、大体夕方ぐらい。さすがにここら辺に改変をいれてしまうと、後々、面倒なことが起きてしまう危険性が出てくるので、ここは原作通りにインデックスには悪いが斬られてもらおう。

（なんか、考えている内に自分が外道に感じるぜ……）

これぱかりは仕方ない。犠牲なのだと、無理やり自分を納得させる雪旗。彼にとってはそこまで気持ちの良いモノではない。しかし今回に限り、こんなチャンスが回ってきたのだ。決して、今の自分以外にはできないと考えるのは傲慢かもしれないが、それでも自分以外にできないのならば、自分は傲慢と言われようが偽善と言われようが、立ち上がると心に誓った。

（随分、格好つけてるけど、所詮、目立ちたがりって訳だよな……）

頭を掻きつつ、自分を卑下する。とりあえず夕方までは暇なので、

適当に遊びにでも出かけようかと思い、寮の外へと出て行くのだった。
（そういや、いろいろと忘れてたな……ここら辺のことを覚えておかないと、後々大変なことになるわ……）
神の英知もそこまで優れているわけではないようだ。
「……暇だ」
何か面白い出来事は落ちていないか……そんなことを考えながら、適当に辺りをうろうろして回る。結局見つけたのは女子に絡んでるスキルアウトぐらいだった。ちなみにそのスキルアウト達には、丁重にやめるように言い。彼らも快く引き受けてくれた。なんと言う。自らのカリスマ性に畏れいるぜ……。（実際はほとんど武力行使）などと、バカみたいなことを考えていると、黒い修道服を着た男が目に入る。

多分、自分に用事がある訳ではないと思う。本当に偶然、目に入ったのだ。すると黒い修道服の男もこちらを見る。修道服なのに黒いというギャップに少し笑いを堪えつつも、その黒い修道服の男に近づいて行く。

「……おい、お前。なんか変な感じだな。何かここで問題でも起こそうとしてんじゃねぇか？」
「……貴様には関係のないことだ。勝手に口出ししてくるな……私は、一刻も早く。ある少女を見つけねばならんのだ」
「ある、少女？　一体誰のことだ？　まさか『学園都市』の超能力者の中の誰かか？」
「そんなモノではない」
当然、雪旗は彼が誰を探しているのかは検討はついている。おそらく、これに察知してステイルと神裂も動き出している頃だと思う。

だったら、自分にできることなどないだろう。
そう考え、特に用事もないが、話を続ける。

「……もしかしたら、俺は知ってるかもしれないぞ。お前のが探してる人……お前の格好から見るに、おそらく探してる少女ってのも同じよう
な服装をしてるんじゃないか？　だったら、きっと目立つと思うぜ？」
「ならば、私でも見つけることは容易いだろう」
そのまま、彼は面倒事はごめんだと思ったのだろう。そろそろ、引き上げようとこんなことを言った。
「……私は、そろそろ、行く。いい加減、そこを退いてくれないか」
「最後に一つだけ聞く。お前は何を考えてる。もし、学園都市に何かしようとしたら、俺はお前をぶっ飛ばすぞ」
「それは、お互いの為にするべきではないな。後々に面倒なことになるぞ」
そのまま黒い修道服の男は雪旗を無視してどこかへ行く。
（魔術の一つも見れなかったな……若干楽しみにしてたのに……。アイツもイレギュラーなのか？　それとも語られてないだけで存在はしていたのか？）
考えはどこまで行っても堂々巡りになるだけで答えなど出るはずもなかった。

ステイル＝マグヌス戦。

彼は別の場所へと行く。しばらく経つと辺りに人が一切居なくなる。それは何を意味するか。

人払いルーン。おそらく、それなのだろう。

（なんだ？　さっきのヤツではないよな？　だったら、ステイルか神裂のどちらか？）

すると向こうから、出てきたのは、ステイル＝マグヌスだった。タバコを吸いつつ、彼は、呟く。

「君、さっきの黒い修道服の男と話してたよね。君……まさか、あちら側か？」

そのあちら側は、おそらく『魔術側』かということだろう。やはりヤツは『イレギュラー』なのだろう。

「……さぁね。アンタが言ってることの意味がこっちにはさっぱりだ」

あえて、挑発する。こう言えばきっと彼は、魔術を使うだろうと彼は思う。

「そうか……だったら」

ステイルは懐から、ルーンを取り出す。そして。

「巨人の苦痛に贈り物を!!」

そう、詠唱すると炎の剣が飛び出す。それを使い、こちらに攻撃を仕掛けてくる。それを避ける、避ける。そもそもこの程度じゃやられないのは、自分でもわかっていた。自分は避けることだけなら、聖人クラスの身体能力でも来ない限り、負けることはまずないだろう。

「チッ……仕方ないね。Ｆｏｒｔｉｓ（フォルティス）９３１『わが名が『最強』である理由をここに証明する』」

そう言うとさらにルーンの数を増やす。

「……世界を構成する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ　それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。　それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。　具現せよ、我が身を喰いて力と為せ。

顕現せよ!!　魔女狩りの王(イノケンティウス)!!」
　そう言うと、そこには巨大な炎の人が現れた。その炎の巨人はこちらを容赦なく攻撃する。近づくだけで燃え尽きてしまいそうな程の火力でこちらを攻撃する。
（っとと、さすがにこれは、まずいな。俺には『肉体強化(インフォースボディ)』しかねぇぞ？　さて、どうする……）
　すると自分の異変に気付いた。それはあの魔術についてだ。なぜか、なぜだかわからないが、彼にはその魔術がどういう術式を組んでるのかが、理解できた。
　よって、それの弱点も理解できる。たとえば……あのルーンを破壊してしまえば、どうとでもなるなど……。その上、どうやら理解できた、ということは実行することもできる訳だ。この戦いが終わったら、後で試してみようかと思いつつ、原因を探る。そして気付く。この『原因』に。
（神の英知か？）
　そもそも神の英知は、理解する力に特化したモノで、それ以外には役が立たないので、これぐらいにしか使用できない。
（理解できるけど、実際に使えるのか、わからんねぇな）
　そんなことを考えながら、とりあえず向こうの攻撃を避け続ける。そして考え、下に貼ってるルーンに目を向ける。
（まだ、あの弱点は克服してない……っと。だったら、簡単だな）
　そのまま攻撃を避けつつ、即座にそのルーンを破りに行こうと思ったが、ステイルはそこまで近づけるはずもなく、すぐに魔女狩りの王をルーンの目の前まで来る。
（ま、そうなるよなッ!!）
　それから、一気に方向を転換させ、無防備のステイルの所まで一気に駆け抜ける。しかし、それはステイル自身も予期していたことだったのだ、彼はルーンで作り出した、炎をこちらに擲つ。その炎が体を直撃し、全身が燃えたぎる。
　死を直感した。おそらく自分はここで死ぬだろう。そう思った直後だった。

（あ、俺、不死身だった……）
　忘れていた。というより実際に感覚として、『不死身』を体験するのは、今回が初めてだった。体が燃え盛り、焼死体と化す。が、死んでいない。この体もすぐに修復されていくのが、感覚として実感できた。相手もプロだ。こちらを完全に殺す気で攻撃をしたはずだ。相手は踵を返し、そのまま懐から、タバコを取り出す。そして、火を点け、吹かす。
　しかし、不死身もそこまで便利な代物ではなかったのだ。体の修復をしているが、それでも時間がそれなりに掛かるようで、このままだと彼はどこかへ行ってしまうだろう。
（ま、仕方ないか……今回は、俺の完全な負けって訳だな）
　自分の敗北を噛み締めながら、我ながら情けないと思いつつも、とりあえず自分は体を修復することに専念しようとする。ちなみに燃えた部分は上半身だけと言う、すごく器用な燃え方をしていた。

魔法のアイテム＝携帯電話

体の修復を終え、雪旗は起き上がる。そして、今の時間を確認する。どうやら、もう既に時間が過ぎているようだ。辺りを見回してみても、わかる通り、既に夜になっていた。このまま寮に戻るか、小萌先生の所に行くか。どちらにしろ、今日はもう既に、問題と呼べるモノに出くわせない。

今から、行く方法も存在しない。もう手詰まりだと思った。その後だった。自分の手をポケットに入れて、気付く。携帯電話の存在に。

「……」

今までの問題をすべて解消させれる。アイテム。携帯電話。これに掛ければ、一発で場所が特定できるのだ。

しかし、ここで問題が浮上する。果たして上条は雪旗の質問にまともに取り合ってくれるだろうか。上条は問題事を抱えることはするが、相手に対して、手伝ってなどとは言わない男だ。というか自分ですべて解決しようと、努力する。

ようはここで掛けたところで、下手にはぐらかされるだけだった。だったら別の場所から責めよう。

（ステイル……と名前は聞いてないや。適当に、世間話の内に入れて、それで、いや、そもそも、知らないか……？　いや、知ってる方に俺は賭けるぜ!!!）

意を決して、電話を掛ける。そこには、自分が今まで悩んでいたことをバカにするかのような、素っ頓狂な声が聞こえてきた。

『どうした？　雪旗？』

『いやさ、お前、最近なんか、トラブルに巻き込まれてない？』

『へっ？　いや、なんで？』

急に焦りだす上条。

『お前の部屋から、白い修道服の少女が出て行くのが見えてよ。そしたら、なんか、それに関係あるような、黒い修道服に赤髪の男が俺を殺そうとしてよ。お前、何か知ってるなら、教えてくれないか？』

『わかった。とりあえず、今、小萌先生の所にいるから、来てくれない

か？　話はそこでする』
『わかった』
　電話を切り、とりあえず小萌先生の所へ行く用事ができた。しかし、また別の問題が浮上した。
「……小萌先生の家。どこだ……」
　上条当麻の説明不足の所為で結局、また電話を掛けるはめになった。ちなみにすぐに教えてもらい、行くことができた。その前に一度寮へ戻り、Ｙシャツを換え、小萌先生のアパートへ向かった。
「よ、上条」
「お、雪旗か」
「そんな所で何してるんだ？」
　と知っているが、あえて言う雪旗。というか言わなきゃいけない気がした。上条は答える。
「今、小萌先生の家で、回復魔術で治療してるんだ。お前も、もう知ってるんだろ。魔術を」
「まあ、見ただけなんだけど、とりあえず、わかってるよ」
　一回殺されてるし、と心の中で呟く雪旗。
「それで、インデックスっつーのが、白い修道服の少女なんだ。んで、お前が言ってたヤツは多分、ステイルで、さっき寮の所で闘ってたんだ。アイツ、あんな小さな子を追い掛け回して……!!」
　上条は怒りを露にしていた。事情を知らなければ、ステイル＝マグヌスは悪者にしか見えない。実際はそんなことないのだが、しかし自分にとっては悪者かもしれない。自分が悪くないのに一度殺されてるし　などと考える雪旗。それからしばらく経ち。回復魔術が終了したようだ。
「インデックス!!」
　上条がインデックスの傍まで行き。様子を確かめる。
「大丈夫なのですよ。ただ寝てるだけです」
「お邪魔しまーす」
　と一応、礼儀として言う雪旗。
「ええ!!?　雪旗ちゃんがどうしてこんな所にいるのですかーっ!?」

「それは、まぁ、偶々居合わせただけで……ハハハハ」
誤魔化すように笑う。それから、結局、小萌先生の部屋は狭いということで。
（そもそも、アパートだし）
雪旗は自分の寮へ、上条は心配だから、この部屋で泊まることになった。
（さすが、上条当麻だ）
と、思いつつ、そのまま雪旗は寮へと戻るのだった。

本当の意味での英雄

後日、朝になり雪旗は目を擦りながら、小萌先生の下へ、行こうと、着替える。何だかんだ言って制服が一番動きやすいので、制服で向かうことにした。しかし途中で、まさかな出来事に遭遇してしまった。

「まさか、貴様が、『ヤツラ』と関係があるとはな……」

黒い修道服の魔術師だ。

「……アンタか。一体何の用事だ？　言っとくが、俺はアンタと用事がある人物とは、一切関係ないと思うぞ？」

「嘘を吐くつもりか。貴様は昨日、ステイルと会っていたではないか!!」

「……アンタ。まさか、インデックスに用事があるのか？」

驚愕の表情をする。フリであるが、しかし毎回、見事に勘違いされる。自分はそういう星の下に生まれてしまっているのだろうか。

「インデックス……ヤツらとは、また違った方法を私は……!!」

そのまま、彼は本を取り出す。

「簡単に手に入れられなかった！　『抱朴子（ほうぼくし）』。あらゆる病や呪いを解く薬が作れるというらしい。これさえ、あれば……!!　彼女は絶対に助かるんだ!!　彼女の居る場所を言え!!」

「そうか、お前もインデックスの……」

インデックスには沢山の人達が一緒に居てくれた。しかし彼女は一年に一回。記憶を消さなければ生きられない。呪いのような魔術が施されていたのだ。それの所為で彼女は未だに、恐怖におびえ続けているのだ。彼もインデックスの為に、ここまで頑張った。

彼もまた、英雄なんだろう。自分とはまったく違う。本物の英雄。だったら、それを止める権利は自分にはあるのだろうか。ここは譲るべきなんだじゃないのだろうか。彼は『原典』に支配されている。凄まじい程の激痛が伴っているだろう。

（俺は……アイツを止める？　本当に？　なぜ？　彼は本当に救えるかもしれないだろ？　今回は上条じゃなくて、彼が救えば？　記憶が消えなくてすむかもしれない。……俺はどうすればいいんだ？）

思考がまとまらない。雪旗はどうすればいいか、しかし、彼は気付く。
「……ダメだ。お前じゃ、彼女は救えない」
「何？」
「……その原典じゃ、アイツは救えないんだよ。絶対に、それはわかってる」
「そ、そんなのやってみなくては……!!」
「無理だ。断言できる。お前の苦労はわかるさ、激痛が体を巡ってることもな」
「……ッ！」
彼は小さく呟く。
「彼女を助けるには、絶対に『アイツ』じゃなきゃ、ダメなんだ。アイツ以外、今の時点では無理なんだよ……」
そのまま黒い修道服の男はひざを突く。
「だったら、俺の今までの苦労はいったい!!?!!」
「……」
下手な慰めは逆に失礼だろう。だから簡潔に告げる。
「お前にしか、できないことを探せ、それが、現時点でお前がすべき、最良のことだろ？　それぐらいしか道はないよ」
「……最良の答え」
彼はフラフラと、どこかへ向かう。
「……俺は諦めない。また別の……いつか、絶対!!」
そのまま彼はどこかへ向かっていく。おそらく『学園都市』から、出て行くつもりだろう。
「……いや、アイツはどこか勘違いしている。あと少しでインデックスは助かるしな……まぁ、知らない方が良い現実ってヤツが存在するのだろう」
そのまま、彼は髪を掻きあげ、ため息を吐く。
「結局。誰一人救えないじゃねぇか……俺ってやつは」
そのまま、彼は小萌先生の所へとようやく着く。
チャイムを鳴らし、出てくる上条当麻。とそれに齧り付いてる、イ

ンデックス。
「……はあ、何してんだ。お前ら」
　体が一気に脱力するのを感じる。そのまま軽く笑う。ここの状況はさっきまでとは、全然違う。良い感じだ。先程はピリピリした、嫌な空気を感じたが、ここは楽しい空間のようだ。何かほんわかさせられる。
「はい、はじめましてー。俺は雪旗硬地って言いまーす」
「…私は、インデックスって言うんだよ」
「インデックスねぇ」
　白い修道服に安全ピンを付ける少女と自己紹介を終えると、そのままいろいろと話したり、小萌先生が買い物から帰ってきてから、さらに盛り上がり、最終的に銭湯に行くことになった。
「……上条。どうしてこうなった？」
「さぁ？　まぁ、インデックスもテンションだいぶ高いし、いろいろ楽しみなんだろ」
「おっふろーおっふろー♪」
　傍から見てもわかる通り、かなりテンションが上がっている。イギリスはユニットバスが主流らしいし、おそらく大きい風呂場には、驚きを隠せないのではないだろうかなどと、その状況を思い浮かべ、少し噴き出しそうになる。
「こうじ？　どうしたの？」
「いや、なんでもないよ。ただ面白くてね……」
　そのまま、少し笑う。
「???」
　意味がわからないという感じで、頭に疑問を浮かべていた。
「そういや、イギリスはユニットバスが主流だしな、驚くぞー。きっと」
「私はそういうのは、よくわからないんだ」
「は？　なんでわからないんだよ」
「私って気付いたら、日本に居たの。だから、イギリスのこととか、よくわからないんだ。記憶が無いから、なのに、魔術師とか、インデッ

クスとか、必要悪とか、そんなのばかり、ぐるぐる回って……すごく怖かった」
　インデックスは少し、悲しそうな顔をして、言う。それに上条が、少し、上条にとって、歯痒いモノだった。
「……ん？　どうしたのかな？」
「いいや、なんでもねぇよ」
　つい、口調が強くなる。
「むっ。何を怒ってるのかな？」
「別に、怒っちゃいねぇよ」
「何？　怒ってるフリして、私を困らせようとしてるの？　私、とうまのそういう所、嫌いかも」
「……別に、好きでも無いのに、んなこと言ってるじゃねーよ。それに、お前にそんな、ラブコメ展開を望んでもいねぇっつの」
　その言葉が仇となった。
「とうまなんか……」
　涙目の上目遣いで、勢い良くインデックスは上条に齧り付いた。
「大ッ嫌い!!!」
　ギャーッッ!!!　という上条当麻の断末魔が鳴り響いた。
「あ、インデックス!!」
　黙って見ていた雪旗がやっと口を開く。
「はぁ、お前ってやつは……反省してろよ。バカ野郎」
　あきれ気味に、雪旗はインデックスを追いかける。上条は呆然としていたので、しばらくその場から動けなかった。
「……はっ！」
　上条もさっさと付いて行こうと思ったが、直後、異変が起こった。人の気配が一切、消える。
「……？　あれ？　なんだ……人通りが急に……？」
　そこに現れたのは、奇抜な服装の人物だった。それは身の丈と同じぐらいの刀を所持していた。
「神裂火織です。もう一つの名は語らせないでください」
　彼女、神裂火織が現れた。

英雄達は動き出す

一方その頃、彼、雪旗硬地はインデックスと共に居た。
「ま、まぁ、アイツも悪気があったわけじゃねぇと思うんだよ」
上条のフォローを行っているがインデックスはいつまでも機嫌が治らない。どうやら余程ショックだったようだ。
「……いくらなんでも、あれはないかも」
そう呟く。
「……ま、まぁさ、アイツだって、本心で言ったわけじゃねぇしな？ ほら、照れくさかったんだよ！ アイツ。すぐに照れるからさ」
笑いつつ言うと、それを聞き、少し機嫌が治る。
「……」
（ふぅ、少し機嫌を治してくれたか……そういや、いつまで経っても、上条、来ないな？ 何してんだ？）
すっかり、この後の出来事を忘れている雪旗だった。
上条はボロボロだった。神裂にボコボコにされたのだ。上条は神裂から事情を聞く。一年きっかりに、記憶を消さなければ、彼女が死んでしまうと、上条はそんな事実知らなかった。知る由もなかったのかもしれないが。上条はそのまま気絶してしまった。
「はっ!?」
上条は目を覚ます。近くに居たのはインデックスと雪旗だった。
「……朝？ ってことは、俺は……丸一日寝てたのか？」
「違う。お前は丸三日寝てたんだ」
「!!?」
バッ！ と勢いよく起き上がる。
「……大丈夫？ とうま」
インデックスが、こちらを、心配そうに見る。どうやら、まだ記憶消去はされてないようだ。
「……私……知らなかった。何も……とうまが路上で倒れてることも、そこにこもえがここまで担ぎ込んできてくれたことも……」
今にも泣き出しそうな顔をして言う。それを見て、上条は話を逸ら

そうとするが、それより先に雪旗が言う。
「大丈夫だっつの、インデックス。上条は不幸なんだよ。そこら辺で寝てることぐらい、日常茶飯事だ」
「……ぐっ。確かに……」
上条当麻はどうやら否定はできなかったようだ。というか、どれだけ不幸なんですか、本当に。
それから、しばらく経ち。ステイル＝マグヌスと神裂火織が小萌先生に連れてこられて、アパートまで来たのだ。
最初にステイルが驚く。
「!?　どういうことだ!?　君は……!?!」
「あ、ステイル君？　僕は生きてましたよ？」
小馬鹿にする感じで言う。雪旗。上条には言っていたので、特に気にする様子もなかった。というよりは今ここに彼らが来たということに気を取られているのだろう。ステイルは続ける。
「……あの時!?　君はあんな状態で生きていたのか!?」
「まぁ、能力を舐めるなって訳だよ。ステイル君？」
「ふざけ……」
ステイルは懐から、ルーンを取り出そうとするが、それを制止する神裂。
「……チッ」
そのまま小さく舌打ちをする。するとインデックスが上条の盾になるように、ステイルと神裂達の目の前に立ちはだかる。
「……これ以上。とうまを傷つけないで!!」
それは悲痛な叫びだった。彼らはそれをどんな気持ちで聞いているのだろう。どんな感情が渦巻いているのだろう。そんなモノは自身か、それを体験しているモノにしか伝わらないだろう。
「……んで、結局何の用なんだ？」
「……リミットまで、あと十二時間。それまでに逃げないよう足枷を見に来たのだけれど……どうやら、予想以上の効果だったようだね。これなら、大丈夫だろう」
二人は帰る。

それから、しばらく経ち。時間が迫ってくる。小萌先生は今日は用事があるようで出かけており、今はインデックスと上条と雪旗しか居ない。
インデックスの調子が悪くなり始める。床に布団を敷き、そこへ横にする。そのまま眠り込むインデックス。それから上条は雪旗に聞く。
「なぁ、雪旗。完全記憶能力をインデックスは持ってるだろ」
「あぁ、そうだな。本当に調子が悪くなってきやがったな。信じられねぇが……さてと、そろそろ、原因を探りますか？」
「はぁ？　原因は『完全記憶能力（かんぜんきおくのうりょく）』で頭に十万三千冊があるからだろ？」
上条は何を言ってるんだという顔をして、こちらを見る。それに雪旗はイラッとした。
「お前な……いくら、完全記憶能力を持ってたとしても、実際にそれで死ぬことなんて、あり得ないんだよ!!」
「……は!?」
今までの前提が覆る台詞だった。
「何、言ってんだ!?　現に、今インデックスがこうやって苦しんでるじゃねぇか!?」
タイムリミットまで後、数時間といった所だった。それを気にしつつも、上条が声を荒げる。
「だから!!　苦しんでる理由を今、探そうとしてるんだろ!?　完全記憶能力以外の!!」
実際、理由は知ってる。しかし、それを大っぴらに言った所で、不審がられるだけだ。ここは知らぬ存ぜぬで、こちらの話に付いてくしかないのだ。もどかしさを感じつつも、とりあえずここまで来た。ようやく。
「つまり、あれか？　アイツらは騙されてるって訳なのか」
「おそらくな。俺は大能力者だぞ？　その程度の知識がなくて、どうする。さてと電話を掛けろ。アイツらによ。さてと、始まるぞ。ここからが本当の意味での救いだ!!」

始まる。ここから未来を変えさせる。上条が記憶を失わなくても済む。そんな最高のハッピーエンドってヤツを彼は今、実現させようとしてるのだ。

上条当麻という名の英雄

すぐにステイルと神裂がこちらに来る。
「……どういうことですか？　私達が騙されてる？」
「あり得ないことばかり言ってるんじゃないよ」
二人は未だに信じ切れてないという感じだ。それに対して雪旗が懇切丁寧に説明した。そこまで説明され、やっと理解に及ぶ二人、それでも信じたくないという気持ちは捨てきれないようだ。自分達が今までしてみたことを考えれば、それは当たり前なのかもしれない。自分達は今まで、ずっと意味なく、彼女を傷つけていたのだから。
「……さてと、はじめようぜ。上条。お前が英雄になる。その時だぜ!!」
上条がインデックスの体に触れる。さすがに一発とまではいかず、モタモタしている。それに雪旗が若干苛立ちを覚えたが、我慢することにした。そして口に手を突っ込む。始まる。雪旗は少し身構えた。
『警告。第三章第二節。第一から第三までの全結界の貫通を確認。再生準備失敗。自動再生は不可能。現状、十万三千冊の書庫の保護のため、侵入者の迎撃を優先します』
それはあまりに無感情な声だった。そのまま迎撃準備と言わんばかりに、彼女の体に結界が張られる。それを見て、雪旗はその『経験値』をゲットした。その結界を作ることができるようになったのだ。
そして、彼女は何か呟いた。と思ったら、次の瞬間、光線が発射される。雪旗はそれも見る。経験値として入手する。
（やべぇ、どんどん知識として、中に入ってくるぜ）
上条はそれを右手で受け止める。
二人は呆然としつつ、どうすることもできていなかった。そして、雪旗は上条を退かす。直後、雪旗はインデックスが行ってる魔術とまったく同じ攻撃を繰り出す。
「!!!?」
これには全員が目を剥く。魔術を使えるはずがない、雪旗がなぜ使っているのか。それにインデックスと同じ魔術を、禁書に記されて

いる超高度な魔術をなぜ発動させることができるのか。三人が一斉に呆然としつつ、雪旗は言う。
「早くしねぇか!!　上条ー!!　さっさとしねぇと、お前が救うんだろ!!?　インデックスを!!　だったら、早く、お前のその『右手』を使って、アイツに触れてやれ!!　それで、すべてまるっと解決だ!!」
　そのまま、白く迸る閃光の激突が行われる。徐々に強くなっていくが、それに伴い雪旗も威力をあげていく。見れば見るほど、しかし彼にとっても、これは諸刃の剣だった。体から、血が流れ出る。そのまま吐血する。意識も失いつつある。
「……早く……しろ」
　そのまま上条がインデックスの頭に触れた。直後。すべてが終わった。インデックスが何か呟いていたが、意識が朦朧としていた雪旗にとっては聞き取ることすらできなかった。そしてインデックスを救ったという達成感が雪旗を油断させてしまった。雪旗は直後、気付く。自分の周りにある、上条達の周りにある。羽根を。
「しまっ……!!」
　明らかに自分は間違いを起こしてしまった。この魔術を使用すべきではなかった。血が足りず、上条の近くに行くことすらできない。インデックスを救うことに夢中になりすぎて気付いていなかった。本来の目的。上条当麻の記憶を失わせない。
　それは……結局。為すことができなかった。
『上条当麻は死を迎えた』

いつもの病室。

すべてが終わり、上条がいる病院に顔を出す。雪旗とインデックス。雪旗は先にインデックスに行かせ、自分は近くの待合室で待機していた。というより、どうしても顔を合わせることができなかった。

「……くそっ、俺ってやつは……結局、誰一人救うことができないのか？」

そんなことを小さく呟きつつ、苛立っていた。結局自分が誰かを救おうだなんて傲慢すぎたのか、元々、絶対に不可能だったのか、自分は結局は脇役で誰かを助けようだなんて、おこがましいのか……。何を考えても、結局は辿り着く一つの答え。自分は所詮『異物』だったのだ。

「……ちくしょう」

そのまま彼は決意を固めた。彼は2度とこんな過ちを犯さない。自分の力を過信しない。やはり、『異物』は『異物』らしく生きていくことにした。彼は決意する。力を誰かの為に使うべきだと。決して、2度とこんな悲劇を生まないように。

「……よしっ!!」

そのまま顔を両手でパンッ！　と叩き、意を決して、彼は、雪旗硬地は上条の病室に向かうのだった。

「おいーっす……」

ガラガラと行くと、インデックスに齧りつかれ、ボロボロになった上条当麻が悲惨な姿で居た。

インデックスも何も言わず。そのまま出て行く。それを少し冷や汗を流しつつ、見ていた。そのまま上条の近くまで行き。いつもの調子で話しかける。

「ったく、お前は何したんだよ」

少し笑いつつ、自然体で上条に話しかける。

「いてて、いや、ちょっとな……」

悲惨な痕を見つつ、うわぁ、となってる雪旗。ガラガラともう一度、戸が開く音がする。そちらに目をやると、そこに居たのはカエル顔の

先生だった。
「……あれ、君、まだ残ってたの？」
「さっき来たばかりなんですが」
「あぁ、てっきりさっきの修道服の子と一緒に居たのかと思ってたよ」
「俺、席外したほうがいいですかね？」
「そうだね」
　そのまま言われるがまま、席を外し待合室へと行く。近くの自販機でコーヒーを買い、それを飲みつつ、適当に時間を潰していた。そのままカエル顔の先生が来るのを見ると、雪旗はとりあえず、上条の病室へまた行くことにした。
「よぉ、上条」
「あ、あぁ」
「……アレだな。悪かった……」
　上条は頭を下げた、雪旗を見て、驚いた。それ以上になぜ、謝ってるのかが理解できなかった。
「な、お前の所為じゃないだろ。俺が勝手にやったんだからよ！」
　雪旗は上条なら、そういうだろうと思っていた。予想通りだった。確かに上条の情報からすると、自分は悪くないのだろう。勝手にやって、勝手に傷ついた。しかし、違う。
　雪旗は知っていた。あの時、どうなる運命を辿るのかを、雪旗は知っていた。あの時、上条の頭にあの羽根が当たることを。雪旗はあの場にいた。全員が知ることができなかった情報を持っていた。
　ならば、それを言っていたら？　例えば、本当の意味で違う結末でここは終わっていたのではないか？　だったら、自分は……。と、どうしても、いくら考えても自分は何もできなかったと、悔いるしかなかった。
「それにさ」
　上条が言う。
「お前だって、頑張ったじゃねぇか……あの時、居た全員が、きっと英雄（ヒーロー）だったんだよ。だからよ、お前だって胸を張って良いと思うぜ？」

ああ、上条当麻という人間はやはり、こういう人間なのか……。どうしようもなく。英雄（ヒーロー）だったのだ

忘れられた男

後日、雪旗硬地は覚悟していた。それは、あの時、インデックスを助けようとしたあの時だ。雪旗は魔術を使い、あの状態のインデックスと張り合える程の力を使ったのだ。もちろん、その後ボロボロになったが、その後のお咎めは特に無しで、逆に不気味だった。

（あれぇ？　結構、覚悟してたんだけどな……）

しかし実際、何もないなら、いいやと思い、そのまま、自室で勉強でも、なんていうことにはならず、外へと飛び出るのだった。

「ハハハハ!!」

すると何かとぶつかった。向こうへ居たのは、神裂火織だった。ぶつかり倒れている状態だったので、即座に起こし、とりあえず謝るのだった。そして、心の中ではこんな事を思っていた。

（やはり何かあるのかぁぁぁぁぁぁぁぁーッ!!?）

呆然としつつも、とりあえず手を差しのべる。

「……す、すみません。あの、いや……ちょっとテンション上がっちゃって……ハハ」

「……まぁ、いいです」

そのまま寮の部屋に男女が二人でラブコメ展開ーっ!!　になるはずもなく、重苦しい空気が続く。

（なんだ？　必要悪に入れとか？　あり得る……つか、この人ってそこまで凄い人だったけ？　あれ？　聖人だから凄いのか？　どうなんだ!!?）

「……とりあえず、あなたの処置を教えにきました」

ビクッ！　と体が一気に冷え上がるのを感じた。そのまま神裂は言う。

「あなたは、彼と一緒に、インデックスの保護に当たってください」

「ちなみに拒否権は！」

「ありません」

「ですよねー」

流されるままインデックスの保護の任務を貰った。ちなみに自身

へと処罰は特にないようだった。あの時のことは本当にお咎めなしだった。しかし、ここまで流れるまま魔術の世界にどっぷりと浸かってしまった。

神裂は用事を終えると、帰っていった。今日は疲れたので、そのまま眠ることにした。

（結局。何もなかったんだな）

そう思い、今日は過ぎて行った。ちなみに彼は今日、アウレオルス＝イザードと戦うことになるということをすっかり忘れており、結局、彼はアウレオルス＝イザードと出会うことすらなかったという。

それは翌日になって知るというのを今の彼は知ることすらできないのだった。

「……何か、忘れてる気がするけど、いいや……。明日から、上条に支援しないとな……アイツ。いっつも自分ばっかり抱え込むから、少しは人を頼るってことを……知るべきだな……」

そして、彼は今日という一日を結局、寝て過ごす訳ではなかった。勢い良く起き上がり、そのまま、着替えていた学生服のまま出て行く。

「ゲーセン行くぜぇぇぇ!!!」

よく考えたら、学園都市のゲーセンには行ったことがなかった。寮の部屋にもいくつか、ゲーム機とソフトがあったので、あとでやろうと思っていた。そして、そのまま走り出す。ゲーセンと言う名の遊び場へ行くために。

ゲームセンターに着き、最初に目に付いたのは、やはり治安だろうか。なんだか目に見えて悪そうな連中が多く居た。予想通りだなと心の中で呟く雪旗。絡まれるんじゃないだろうか、とビクビクしつつ、その場でいろいろいていた。

結局、完全下校時間になるまでずっとそこに居たのだった。柄の悪い連中もいつの間にかいなくなっており、結局残っているのは、どちらかというと目立たない系の人達ばかりになっていた。

「……ふぅ、帰るか」

そのまま帰路した。雪旗だった。ちなみに結局、本当にアウレオルス＝イザードとの対面はなかった。

平穏な日常

時間は刻一刻と過ぎ去る。それはまさしく、最悪と言っても過言ではない程の末路を辿る。前段階に過ぎなかった。

「……つまんねぇ」

コントローラーを無造作に投げ、プロローグの所で断念したのは、雪旗だった。

「……んだぁ？　このくそつまらねぇ、前ぶりは、知らんがな。最悪？　ふざけてんのか!!?」

なんてことを言っていたらチャイムが鳴った。それは何を意味をするか余裕で理解できた。

「頼む……雪旗……恵みを……インデックスと俺に……」

そこには大分、弱っている上条が居た。ちなみにおそらく、恵みとはご飯のことだろう。うん。まぁ、暴飲暴食シスターだしね。わかるよ最初はそうなるよ。お前。ただでさえ貧乏学生だしね。

「……はぁ」

とため息を吐きながら、札を取り出す。なんと諭吉だ。前世の自分だったらあり得ない行動だったが、今はレベルのせいか、お金が余って余って仕方ない。貧乏根性は来世に行っても治らないようだと思いつつ、上条に渡す。

「返さなくていいから」

「雪旗……」

「？」

怪訝な顔をした雪旗だったが上条は真剣な顔で言った。

「……足りない」

「……」

額を押さえつつ、さらに深いため息を吐くはめになるとは思わなかった。

「……ほら、諭吉さんが、二人だ。これで大丈夫だろ？」

「さ、サンキュー!!　本当に返さなくて良いのか!?」

「あぁ、好きに使ってくれ。俺も護衛を任されてる身だしな。金は惜

しまないよ」
親からの仕送り＋学園都市の奨学金。この二つで大分、金を余らせている雪旗。特に好きな物を買ったりしないし自炊もしている。ちなみにしっかりとタイムセールの時間も把握し、圧倒的に貧乏根性が自分をそういう風に生活させていると落胆していた。
「……ま、いいや。無駄使い。好きじゃないし」
そして学生服に着替え、そのまま外へと出ていく。なぜか自分はいつも学生服を着ている気がする。なぜだろう。
「……ま、いいか」
そのまま、部屋を出て、来た場所は、隣の上条の部屋だった。
「あれ？　どうした？」
「いや、買い物行くなら、インデックスは俺が預かっててやろうかと」
「マジか。じゃぁ、頼む」
「ムムッ!!　とうま!!　あんまり私を子ども扱いして欲しくないかも！」
そんなインデックスの言葉は無視して、上条はさっさと行ってしまう。それに腹を立てたインデックス。勢いよく齧り付く。
（ま、そうなるわな……）
それからインデックスと先程のゲームをやろうとしていたが、それより格闘ゲームに興味を示し、それをやることになった。
最初は雪旗が圧倒的に上だったが、経験を積むにつれて徐々に上達していくインデックス。それに負けないようにいろんな技を使ったが、結局、最終的にインデックスに手も足も出なくなっていた。
「……」
「フフーン!!」
上条が帰ってきて一緒に食事を取る。今日は平和な一日だった。

『八月十九日』　やるべきこと。

『八月十九日』。彼は『魔術』が欲しかった。見るだけで良い。それだけで使うことができる。今、使うことができるのは、ステイルの魔術と自動書記の魔術ぐらいだ。圧倒的に足りない。どっちにしろ、今から出てくる。『ヤツ』には、勝てない気がする。炎？　簡単に反射されるわ。

竜王の息吹（ドラゴンブレス）？　ぶっ殺してしまうわ。どちらにしても、今の状態じゃ、彼とは戦えないのだ。

「……はぁ、どうすりゃ」

寮の自室で考え込んでいると、チャイムが鳴る。少し苛立った雪旗だったが、とりあえず扉を開くと、そこに居たのは予想通りというべき人物だった。

「……なんだよ。上条」

「実はですね……」

彼はすっからかんの財布をこちらに見せてくる。そして苦笑いをしていた。それを見て、察したというか、見ればわかる通り、金がないということだ。

「あんまり、使いすぎるなよ？」

そのまま二万円を渡す。これはあまり良くない気がする。でも、まぁいいか。

「……サンキュ……」

そのまま、とぼとぼと自室へ戻っていく。

「……？」

罪悪感でもあるのか、元気がなかった。いや、それ以前に、なぜ、彼はあんな感じになっていたのだろう。

（……あれ？　そういや、今日か？　アイツが、『アイテム』と戦うのって？）

もやもやした。一方通行。変えちゃいけない。もし変えてしまったら、もしかしたら、自分の知らない所で何かが犠牲になるかもしれない。だから、どうしたって、変なことをしちゃ、いけないという感

じになってしまう。しかしそれでも、これ以上の犠牲を……増やさない為には、こうするしか……道はない。
「……行くか」
おそらく実験は毎日やってるはずなので、今日もやっていると思う。そのまま、彼は新たな道へと進むことになる。
「……っつても、無理があるよな……場所も一切不明だし、結局、情報がないんじゃ、助けるもくそも……」
そんなことを言いつつ、制服に着替え、いつの間にか街へと出ていた。
「……」
結局、学区をまたいで、いろんな場所を探してみたが、一方通行どころか、御坂すら見つけられなかった。
「……無理か……」
諦めかけたが、結局、夜中になるまで、ずっと彷徨い続けた。そして、遂に見つけた。研究施設に入る瞬間だった。
（奇跡だ。よしっ！）
そのまま研究施設に入る。御坂を少し、離れた場所からつける。研究施設に入ると、そこで交戦が始まることになる。
そして一通り、研究施設を破壊し終えると、御坂とフレンダの戦いがついに始まった。
（ここか……お、やってるやってる。さてと、行くか……）
思惑を潰す。それが今、始まろうとしていた。

『アイテム』 変化をもたらす。

『肉体強化(インフォースボディ)』。これには、いろんな場面で助けてもらってる気がする。ちなみに今も御坂を追いかけることができてるのも、これのおかげでもあったりする。大能力者(レベル4)。まだ、超能力者(レベル5)には、届いていないが、それでも、魔術と併用すれば、かなりの強さになる。

そんなことを考えながら行く。

そしてフレンダとの戦いが終え、遂に現れる。超能力者の麦野沈利(むぎのしずり)と大能力者の絹旗最愛(きぬはたさいあい)と滝壺理后(たきつぼりこう)が戦おうとしていた。そこに割って入ってきた。雪旗。

「ア、アンタ!!?」

「……ったく、アンタ、アンタと、俺は一応、目上だぞ」

「……何? アンタ。まぁ、邪魔するなら……ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

「無・理・だ・よ」

バカにするように相手の真似をした。それが逆鱗に触れたのだろう。光線が放たれる。

「っと?」

それを避けつつ、御坂に向かって言う。

「さっさと、逃げろ。やることやったんだろ?」

「え……」

「早くしろ!」

「あ、うん」

そのまま御坂を逃がし、麦野と対峙する。さすが超能力者と言うべきか、こんな時でも冷静だった。

「おい! フレンダ! 絹旗!! テメェラはヤツを追え!!」

「はぁ? お前、一対一で勝てるとか、思ってるのか? オイオイ、バカにするなよ。一人なら、あっという間だぞ?」

さらにバカにする。御坂を追わせるわけにはいかない。しかしこんなあからさまな挑発に果たして乗るか……。

「アァ!? おい!! 先にコイツを跡形もなく打ち殺すぞォ!!」

乗ってくれた。アホの子か……と思いつつも、やはり能力自体は強大だ。麦野が原子崩しを使いつつ、絹旗の窒素装甲。この二人が組んだら大体の敵はやられてしまうのではないだろうか。と思わせる程の洗練された動きだった。

そして、実際、この『肉体強化』がなければ、あっという間にやられていた危険性の方が明らかに高い。

「……ったく、今回はコイツがかなり役立ってるっての!!」

魔術。それを使う必要は今回はないかもしれない。と思いつつ、原子崩しと絹旗の窒素パンチを避けつつ、徐々に近づいていく。ちなみに絹旗を殴った所で意味がないので、あまり攻撃を仕掛けない。仕掛けるとしたら、麦野だ。

「チッ!! さっきから、超当たらないんですけど!!」

「クソクソクソ!!! 舐めんじゃねぇぞ!!」

徐々に動きが単調になりはじめる。ただ光線を放つだけ、ただ殴りかかるだけ。

「……舐めてんだな」

光線を紙一重で避け、麦野の腹部を軽く殴る。

「グッ……アァァァ!?」

そのまま倒れこむ。気絶し、そのまま絹旗の方を見る。

「う、っそぉ……」

さすがに、一撃でやられたので、絹旗も驚きを隠せないようだ。

「……さてと、絹旗っつたか? というか、いつの間にか、フレンダって子いなくなってんだけど。超どうなってんの?」

「私の口調を超真似しないでください。それに多分、逃げたんだと思います。フレンダって超そういう所ありますから」

「あっそ……? まあ、いい」

そのまま懐から、ルーンを取り出す。そして、魔術を使うため、詠唱する。

「これが一番楽なんだよな。炎よ、巨人の苦痛に贈り物を!!」

炎剣を投げ打つ。しかし、それは窒素でうち消してしまう。

「超バカですか? 窒素を近づけたら炎は消えるに決まって!?」

「超バカじゃないっすよ？　一応こちらも大能力者だからさ……」
いつの間にか近くにいた。そして大きく振りかぶる。しかし窒素によって、阻害され、体まで届かない。
「超意味ないですよ？」
「ほぉ？」
そのまま全力を使う。全力を使い、そして振りぬいた。
「超……マジですか!?」
窒素を潰した後に、次にもう一度、殴る。腹部を殴り、気絶させた。
「ハッ……ハァァァ……疲れたぁ」
滝壺はボーッとこちらを見ていた。特に何をする訳でもなかった。
「……とりあえず、お前は無事だから、絹旗？　って子を病院まで運ぶの手伝ってくれない？　俺、こっちの人運ぶから」
「殺さないの？」
あり得ないという顔をしていた。しかし雪旗は何でもない顔でこう答える。
「殺すわけないだろ。つか、犯罪者になりたくないし」
雪旗にとっては極々当たり前の常識という感じだった。だから殺すということをするハズがなかった。
「あなたは『表』の住人なんだね。だったら、こっちに来ちゃダメだよ」
滝壺は優しさで言ったのだろう。彼女はきっとそういう人間なのだろう。しかし雪旗が言う。
「アンタ達も居るべきじゃないと思うけどね……よっと」
そのまま抱え上げ、病院まで直行する。第七学区のカエル顔の医者だ。あの先生なら、死なない限り、治してくれるだろ。
（さすがに、やりすぎちまった気がする。内蔵とか大丈夫だろうな……）
心配しつつも、二人は病院まで直行することになった。

『絶対能力者計画』

今日が『八月二十日』。一方通行（アクセラレータ）と上条当麻が交戦する日だ。ちなみに時間帯的にそろそろ上条と御坂一〇〇三一号が出会う時間帯だろう。ということは始まろうとしていたのだ。

一方的な残虐が。

「……やれることは、やるか」

そのまま制服へと着替る。場所は大体特定している。上条が本を買いに入った場所の路地裏だ。

「確か、場所はあっち側だったか……」

あの付近ならば、雪旗も知っている。ならば、一方通行（アクセラレータ）が殺そうとしている、上条当麻が間に合わなかった。一〇〇三一号を助けることができるかもしれない。が、しかし殺してはいけないのだ。彼は英雄の一人として物語を紡ぐ。だから、『異物』である、自分が手を掛けていい相手ではない。

（ま、今は敵だがな）

「……さぁ、行くか」

そのまま、扉を開け放ち、一方的な残虐へ終止符を打つ。そのまま実験開始場所まで向かう。途中で上条と一〇〇三一号が居る場所に辿り着く。二人に気付かれないように後ろからこっそりつけていく。そして上条が本屋に入ると、そこで一〇〇三一号に動きがあった。

「……あそこか」

そのままついてく。そして実験が開始された。

「……よぉ、バカ野郎が」

そこから割って入ってきた。雪旗。

「……あァ？　何者だァ？　つゥかよォ？　実験場に勝手に入り込んでンじゃねェよ」

「まぁ、何者かと言われたら、『異物』ってやつかな？」

「あァ？　何言ってンだァ？」

別に何かしようと思ってる訳じゃない。英雄になるつもりもない。ただ許せなかった。それだけだ。

「……別になんでもないさ。それより、お前を止めるぞ、俺は」
そのまま構える。おそらく自分は負けるだろう。しかしそれでもいい。それでもしも、一〇〇三一号が助かるならと考えたいた。しかし甘かった。甘すぎた。愚かだった。よく考えればわかることだろう。自分の常識など通用しない。彼女達の生きる理由は実験を為すことだ。だからここで、邪魔する不確定因子は、どう考えたって、こうなることは目に見えていただろう。
「ガハッ!?」
一〇〇三一号が欠陥電気で自分を気絶させようとした。しかし、その程度で気絶する程、雪旗は弱くなかった。そのまま少し体の痺れを感じながらも、一〇〇三一号をなんとか引かせようとする。
「あァ？　やっぱり、コイツらは人形だな。自分達を助けるヤツを攻撃するなんてなァ！」
笑いながら言う。そして、一方通行は無造作に一〇〇三一号を反射させ、ぶっ飛ばす。
「でも、面白ェぜ、お前……第一位に喧嘩を売ったんだ。さっさとかかってこいよ。アイツの相手はいつでもいいんだァ。それよりお前をぶっ飛ばす方が面白そォだ。わざわざ喧嘩売ったんだ。殺されても……文句言うなよォ？」
そのまま彼は足にベクトルを向け、こちらに猛スピードで向かってくる。おそらく触れたら、一瞬で吹っ飛ばされるだろう。しかし雪旗は別に、わざわざやられに来たわけじゃない。勝算があった訳ではない。ただ許せなかった、あの時もし上条当麻がもっと早くこの状況を知っていたら、きっとまったく同じ行動を取るだろう。だったら今回は引き伸ばしさせればいい。間に合わせる、絶対に。
反射。彼は絶対的防御だと思っているだろう。しかし実際にはいろいろと反射が適用されない部分だって存在する。しかし、今の彼にはその適用されないとかその反射を破壊するなどと言った事が一切できない。
「あァ？」
そのまま吹っ飛ばされる。それしか道はなかった。呆気に取られ

てる一方通行を無視し、もう一度立ち上がる雪旗。
「……オマエ、舐めてンのか？」
いくら殺されようが不死身の雪旗には『死』に対する恐怖は無いと言っても過言ではない。ので、いくらでも攻撃を受ける。ただの時間稼ぎの為にさらに立ち上がる雪旗を迎撃する。何度も何度も立ち上がる度に攻撃を繰り返す。次第に一方通行は攻撃をやめる。
「……チィッ、糞つまんねェな」
頭を掻きながらため息を吐く。表情は落胆に満ちていた。それほど期待していたのだろう。
（ちょっと待ってろ……お前の、その落胆を取り除く最強が現れるからよ）
そう思った直後、声が聞こえた。それは聞きなれた声だった、そう間違いようがない『英雄（ヒーロー）』の姿だった。
「何してんだぁ!!!!」
上条当麻その人だ。

一方通行ｖｓ上条当麻

上条当麻は買い物が済み、外へと出ると誰もいなかった。上条はそのまま導かれるように路地裏へと行く。そしてその場で見てしまった友達がボロボロにやられている姿を……。

「何してんだぁ!!!!」

上条当麻が現れた。

（やっとか……遅いっつ……の……）

バタッ！　と地面に倒れこむ雪旗を気にしつつ上条は一方通行に近づいていく、一方通行はまた増えたのかと思いつつ頭を掻く。

「オマエ、なんだ？　そいつの知り合いかァ？　だったらそいつに言っとけ、身の程を弁えるってことを覚えておけってな」

「んなことはどうでもいいんだよ。お前、何してんだよ!!」

「……あァ？　オマエには、関係ねェだろォ？」

そのまま上条は自分の拳が当たる場所まで近づく。一方通行はそこまで近づかれても焦りの色を見せない。当然だろう何故なら彼には絶対の防御が存在するのだから。

上条は顔面目掛け、右手で殴る。思い切り。それが一方通行の顔面に突き刺さった。貫くような一撃。一方通行は困惑した。

（なんだァ……どうなってやがる。俺は、どうしたンだ？　なんで横になってンだ？　ン？　痛ェ……）

鼻に触れると鼻血が出ていた。つまり簡単に言えば一方通行は殴られたのだ、しかしおかしいではないか。反射を適用させていたのに、一方通行は叫ぶ。

「……どうなってンだァァァァァ!!?」

一方通行は困惑する、疑問に思う、相手を疑う。

「何なンだァ……!!　オマエはァ！」

一方通行はそれでも上条に近づく。圧倒的スピードで、しかし上条はそれをカウンターの要領でまた殴る。何度も殴る。

「…ガハッ!?　ガァッ!?」

未来は変わった。『異物』が混入したことにより上条は気付くこと

ができた。これで助かる命が存在するのならばそれは良いことだろうと静かに雪旗は思った。
「グアッ!?」
続けざまに殴られ続ける一方通行は一旦その場を離れる。
「クソッ!!　待て!!」
上条が追いかける、路地裏でも広い場所まで来る。上条もすぐさま追いつき一方通行と対峙する。
「……ヘッ」
一方通行は地面を踏む。すると石の破片が上条にまとめて襲い掛かる。
「なッ!?」
上条は一瞬、それを避けようと移動するが間に合わずダメージを受けてしまう。
「グアァッ!?」
しかし、この程度で上条は引かない。さらに一歩また一歩と近づいて行き。また殴る何度も殴る。
「ガハッ……ガハァ!?」
一方通行はいい加減、攻撃を受けすぎて意識が朦朧としてくる。上条が最後のとどめを指す。そのまま強く一歩を踏み込み、全身全霊を込めた一撃を一方通行の顔面に放つ。
「がああああああああああああッ!?」
一方通行はその一撃を受け、とうとう力が尽き気絶した。
「はぁ……終わった」
上条は尻餅をつき、体の力が抜ける。彼は知らなかった。相手にしていたのが学園都市第一位だと。彼は知らなかった。これである実験を阻止したことを、彼は知らなかった。知らぬ間に助けられなかった命を助けていたことを。

病室での出来事

雪旗は一方通行を撃退した上条の下へと向かう。ボロボロになった一方通行だったがそれでも大した怪我もしていた訳ではないのですぐに回復するだろうと考えていた。

「……よぉ、上条平気かぁ？」

「全然……コイツ強すぎだぞ……」

そのまま笑い合いながら二人は自分の寮へと帰っていった。

後日、一応アイテムの見舞いに行こうと病院まで直行した訳だが、どうやらもう既に退院していたようだ。どこも異常がなかったのだろう。

（あぁ、よかった。後味悪い展開にならず、じゃ、浜面を追い掛け回したりできる訳だな。ハッハッハ）

などと冗談めいた感じに思っていたら、後ろから声を掛けられた。誰であろう奴である。

「よぉ、アンタ。何してんだ」

振り向くとそこに居たのは麦野沈利だったりした。

（……アレ？　これ、死ぬんじゃねぇ？　死なないけど。死ぬわぁこれ……）

よく考えたら自分は二度ほど死んでいたことを思い出した。なんというかあれを味わうのは割と貴重な体験なのだろうなと雪旗は走馬灯のようなモノを思い出していた。

「おーい。どうした？」

雪旗の前で、手を振る。

「む、麦野さんはここで何をしておられますかっ!?」

つい、そんな口調になってしまった。事実、彼女は自分より年上だからこういった口調をしなければおかしいと言えばおかしい。

「なんだぁ？　てめぇはいきなり。つか、丁度よかったわ」

丁度よかった。という言葉を聞いた瞬間背筋を凍らせる雪旗。ヤバイ。このままではガチでもう一度死んでしまう。

「『アイテム』が壊滅しちまったんだよ。テメェの所為でなぁ!!」

「ここは、病院っすよ。静かにしなきゃ」
なぜか、つい言ってしまった一言。病院は静かにという常識だが、今この状況でなぜそれを言ってしまったのか、疑問だった。自分は死にたがりなのだろうか。
「……悪かった」
素直!? 誰これ!? 怖い。なんか超絶怖い。超怖い。と絹旗の口調が若干入ってしまった。
「ま、事実上の壊滅だからなぁ、これからどうすっか」
頭を軽く掻きながら、言う。
(つーかよ、なんで病院なんかにいるんだよ。お前、もう治ったんじゃないの? へ? もしかしてやりすぎた?)
「ま、これからやることなんて、一つしかねぇだろーよ」
「あぁ?」
「学校だよ。学校。『表』で生きていけってこと。どす黒い『裏』よりゃ、絶対に良いんだからよ」
「……私は『アイテム』のリーダーだぞ? 裏じゃいろんなことやってきた。お前が引くようなこともな」
「だからなんだよ? んなもん過去の話だ過去。まぁ、悪いことやったってことは、認めなきゃダメだけどよ。それでも、だからって『表』の世界に入っちゃいけない決まりにはならないよ。まぁ、最初は慣れないかもしれないけどな」
そのまま踵を返して、振り返らず、手を振る。
「……何、カッコつけてんだ。アイツ」
と、言った後。続けて絹旗とフレンダと滝壺が来て、麦野が先程言われたことを実行しようとしていた。

再び訪れる平穏

今日は、『八月二十五日』。何も無い日だ。いや、本来ならそのはずの日だった。なのに、どうして……。

「超C級の映画がありません。なんですか、なんでこんなに超名作ばっかりなんですか!!」

「結局、サバ缶が最高な訳よ!!」

「……」

「おい、シャケ弁買って来いよ。雪旗ー!」

あれ？　おかしいな。どっちだ。どちらのフラグだ……！　死亡？　恋愛？　などと考えていると麦野が急かす。

「早くしろやぁ!!」

「すみません!!」

そのまま走り出し買出ししてくる。ちなみにスーパーの安売りのシャケ弁だ。ぶっ殺されるかもしれないと思いつつ、仕方ないと思い買う。

家に着くと、何故か人が増えていた。上条とインデックスに土御門兄妹まで居る。

「どういうことだぁぁ!!?」

シャケ弁を買っている間にいったい何があったと思ったが、特に気にしないことにした。

「いやぁ、もうご飯無くてさぁ。恵みを貰おうと思ったら、なんかお前がハーレム作ってるからさっ!!」

上条が自分のことを棚に上げて、雪旗に対して羨ましそうにしているので土御門がすかさず、横に入る。

「それは、カミやんも同じだにゃー!!」

と土御門と怒涛の攻めが始まる。それを無視して麦野にシャケ弁を渡す雪旗。そして注意を促す。

「おい、お前ら、いいか。もし家具とかぶっ壊したら承知しない……」

と言う前にさっそく家具をぶっ壊した。ちなみにコップだ。

「おい……そこに直れ……」

スタスタと近づく。怒気を含んだ声で言う。
「ま、待て！　まさか、能力を使うとかそんなこと考えてないよな!?
上条さんは無能力者ですよ!?」
「お、俺もだにゃー。さ、さすがに能力で身体能力上がってるヤツには勝てないにゃー!!」
ニコッと微笑む。それに二人が安心したが、直後……。
「反省しろぉぉぉぉ!!!!」
バキンッ!!　と、二人を殴る。
「ギャッ!?」
「ガハッ!?」
そのまま、二人は倒れる。
「ったく。さてと、増えちまったな。適当に何か買ってくるわ」
そのまま再度買い物に行くはめになってしまう。仕方なく、近くのコンビニで適当に何か買い。再度戻る。寮に着くと、なんと凄まじい程の殺気が溢れていた。
「超私の勝ちですね!!!」
「パリィパリィってかぁ!!　笑わせんじゃねぇぞ!!」
「私にも貸して欲しいって訳よ!!」
アイテムの面々はあまりゲームなどやらないのだろうか、などと思いつつ、とりあえずテーブルにジュースとお菓子を置く。すかさず食べるのはやはり腹ペコシスター。
「おいしいかも!!」
バクバクと物凄い勢いだ。そして土御門兄妹は何故だか、自分達の世界に入っている。上条は家具一式を見て、すこし羨ましがっており、全員が自由にやっていた。
「……はぁ、いくらなんでも自由奔放すぎやしねぇか？」
「大丈夫。私はそんなせつきを応援する」
「あ、ありがとう」
そのまま自由奔放の全員を差し置き、そろそろ飯の支度をする。ちなみに土御門舞夏に料理を教えてもらおうとしたら、案外すんなりと教えて貰えた。隣りで料理を見つつ感心している雪旗をずっと凝視

してくる土御門元春。
（誰も取らないから!!　大丈夫だって!!）
そのまま全員分の料理を作り、今日は雪旗の寮で全員でご飯を食べた。
（たまには、こういう日があってもいいのかもな……）
などと思いつつ、少し微笑む雪旗であった。

八月二十八日

今日は、八月二十八日である。つまり、御使堕しが発動する日でもある。防御する術が特にないので、甘んじてそれを受け入れることにした。

そして、海に着き。一通り、遊んでいるインデックス。ちなみに『アイテム』の面々も一緒である。ちなみにフレンダは一緒には行けず、何か用事があったらしく。行けなかったらしい。

『アイテム』の連中の水着姿を見れば、少しは、上条も元気を取り戻すだろう。まぁ、記憶のこともあるしな。

そう、今日は上条が記憶喪失になって初めて、親と対面する日でもあった。

(そういや、親っつっても、父親以外は全員、姿形が変わってるけどな……俺もその変化に気付けないのか……まあ、多分気付けないだろうな)

どうしようなどと思っていると、水をぶっかけられた。ちなみに絹旗である。ついでに上条もかけられていた。

「超何やってんですか!! 遊びますよ!!」

(おーおー、元気だねぇ……)

そう思いつつも仕方なく、遊びに付き合う

それからしばらく経ち、日も暮れてきて旅館へと行くことにする。ちなみにほぼ貸し切りで、そこら辺は大分ラッキーという感じの雪旗である。

それから上条当麻の両親が準備が遅くなり、来ることが後日という知らせを貰った。インデックスは楽しみにしてた分、少し不満そうにしていたが、これも仕方ないだろう。ちなみに麦野達は特に興味なかったのか、何も言わなかった。

(つか、この部屋の割り振りおかしくね?)

インデックスと上条。雪旗と麦野と絹旗と滝壺。

(どうなってんの!?)

どうも、こちらだけ余程広い部屋に招かれているようだと思いつ

つ、仕方ないので、その部屋の割り振りで我慢した。
「私に超欲情しないでくださいよ。雪旗」
（しねぇよ!!　俺は小学生にしか見えない人は論外だから!!）
「んな租チン野郎はどうでもいいから、さっさと浴場行くぞー」
「大丈夫。私はそんなせつきを応援してる」
「ちょっと待て!!　応援されても困るし!!　麦野!!　てめぇ、言葉遣いどうにかならねぇのか!?」
　と、ツッコミが意外にも大変だった事が、一番の驚きだった。
　雪旗もせっかくなので、温泉に入る。
（はぁ、良い湯だなぁ……）
　顔を真っ赤にしつつ、タオルを浴場の隅に置いておく。露天風呂で、女子風呂とは、しきりがついており、会話ができない訳ではないようだ。ちなみに向こうから、声が聞こえて来る。
「うわ!?　超麦野でかい」
「アンタ。わざと最初に超ってつけたよね？」
「はい、超でかいは言いたくありません」
「絹旗は想像通りの大きさだね」
「ちょっ!!!!　わ、私は総合的に見れば、超スタイルいいですよ!!」
「大丈夫。私はそんなきぬはたを応援する」
「滝壺さぁーん!?」
　などと言ったキャッキャウフフな、会話が聞こえてきたが、雪旗は特に気にすることもなく浴場に浸かっていた。
（アホらしいな……胸なんて、どっちでも良いわ）
「ちょっと!!　雪旗は超どう思います!?　私は、総合的に見れば、超スタイルいいですよね!?」
　としきりの向こうから話しかけて来る絹旗。それを男に答えさせようとは、変態さんと呼ばれても仕方ありませんよ？
「知るかぁ。こっちに振るなぁ。やめろぉ」
　と生返事に返すと、絹旗がキレ気味に返す。
「ちょっと!!　ちゃんと、言ってくださいよ!!」
「……」

頭を掻きつつ、この場で最適な答えを導きだす。
「……ウン。イイトオモウヨ」
かなり棒読みになってしまったが、そんなのを聞き取ることすらせずに、絹旗は自信満々に言う。
「ホラっ!!　やっぱり私は超スタイルいいですよ!!　総合的に!!」
「……うん。わかったわよ」
「うん。大丈夫。きぬはたは良いスタイル」
二人が少し優しいな。と思った雪旗だった。
その後、食事を取り、布団を敷き、あとは眠るだけとなったが、ここで、やはりと言うべきか。雑談が始まる。恋話だ、雪旗は気にも留めず、寝ようとするのを無理やりひっぱられ、話に入れられる。
「……何なんだ」
結局眠ったのは、午前三時のことだった。

御使堕し

今日はついにと言うべきか、上条当麻の両親が来る日でもある。そして、御使堕しも、もう既に発動しているだろう。と予測する。

上条は父親と会い、多少困惑してるようだった。しかし、それ以上に困惑するモノが目の前に現れてしまう。まずは、母親だ。どう見ても、インデックスにしか、見えない。

しかも、従妹と呼ばれる。彼女にいたっては、完全に御坂らしい。このらしいというのは、とどのつまり、自分には、そうは見えないからだ。

だから、上条の行動が不自然に見える。だが、知ってるから仕方ない。

(それにしても、さっきから、インデックスに対して、上条が酷すぎる。多分、上条的には、相手が青髪ピアスに見えてるから仕方ないかもしれないが……)

ちなみに、上条のお母さんの張り切り具合がすごかった。つーか、水着がすげぇ……と、雪旗が見惚れてたら、ビームと窒素パンチを貰った。

あと何故か、こちらを超絶、睨んでいる。

(な、なぜだ……)

とそこで、意識が絶たれてしまった。

「ハッ!?」

見渡すと、もう辺りは夕暮れになっていた。そのまま、勢い良く起き上がり、上条当麻を探す。

(たしか、あそこの階段の辺りだったよな?)

そのまま、行くと。上条が赤い拘束服を来た女の子に刃物を突きつけられていた。

「な、何してんだ!!」

と、何してるか、知ってるが、このままでは不自然になってしまうので、とりあえず合わせる。

しかし、雪旗の方は見向きもせずに、そのまま、ずっと刃物を突きつける。すると、上の方から声がする。一一一とステイル＝マグヌスが来たのだ。
ちなみに、変な組み合わせと思うだろうが、自分にはそう見えてしまう。実際には土御門と神裂なのだが。
「な、んだ？　その組み合わせ？　実は、アイドルの一一一も魔術系の人だった訳？」
そのまま、二人は顔を合わせ、とりあえず容疑から抜けることができた雪旗だった。
その後、二人の正体とその魔術を一通り説明してもらい、全員で旅館へ戻ることになった。その後は、神裂はずっと質問攻めを喰らっていた。
かなり、不服そうな顔だったらしい。
「それにしても。いろいろと大変なことになってるな」
「まったくだ。はぁ、不幸だ」
「あ、カミやん。それは、ねーちんの前じゃあんまり使わないでやってくれにゃ」
「あん？　なんでだよ」
「ねーちんは生まれつき、幸運でね、天草式って言う隠れ十字教の女教皇でね、聖人であり、そんなすげぇ星の下に生まれた。幸運が許せないらしい」
雪旗には理解しがたいことだった。自分はどちらかと言うと、幸運なのかもしれない。
死んだという事実はあるが、それでもこちらの世界に特別な能力持ちでこれたのだから、しかし、それを許せないと思ったことなど一度もない。
つまり、彼女はきっと優しいのだろう。だから、きっと自分が許せないのだ。
そんな会話をしていたら、神裂が部屋の襖を勢い良く開ける。
「もう!!　耐えられません!!!」
汗だくな感じで来たのだ。そして、上条を連れて、浴場まで行った。

「なんだ？」
「多分、見張り役だにゃー」
「これまた、なんで？」
「あのな、雪っち。ステイルに見えてるヤツはねーちんぜよ？　ってことは、男湯に入るしかない。でも男湯に誰かが入ってきたら？」
「あぁ、なるほど。しかし……」
「あぁ、わかるぜよ。言わんとしていることは」
「カミジョー属性の前では、そんなの意味がない」
二人が声を合わせて言った。そのまま、二人は、上条達についていくことにした。ちなみに行った時にはもう既に、『七閃』をしていた。
そして、土御門がキリッとした声で言う。
「裸を見られたくらいで、恩を忘れるのかにゃー？」
「わかってはいるのですが……」
そんなことを言っていた。
（おぉ、結構、言うな……）
そんなことを思いつつ、旅館へと戻ろうと思ったら、なぜか途中で麦野と絹旗に連れて行かれた。なぜか、用事があるとか、言って。
部屋へ閉じ込められた。雪旗。
「お前、さっきから、どこ行ってたんだ？」
「え、いや……その、用事が……」
「私たちが、倒した後、超いつの間にかいなくなってましたよね？」
（それで、夕方まで放置してたんじゃん。アンタらは……）
そんなことを思いつつ、しかし彼女たちの質問は終わらない。
「何してたの？」
「超何してたんですか？」
「べ、別に……何も」
魔術のことは知られるわけにはいかないと口ごもってたが、それを聞き、二人は絶望するような顔で言う。
「やっぱり、アンタは人妻と……」
（ハッ？）
「超欲情した目で見てましたもんね!!」

「誤解だぁぁぁぁ!!!」

『原子崩し』と『窒素装甲』で攻撃を受けた。誤解を解くのに、かなりの時間を要したのは、言うまでもないだろう。

終わらせるための行動

翌日。昨日はわりと酷い目に遭ったが、それでもなんとか誤解を解くことができてよかったと内心ホッとしている。

そして、目覚めが遅かったのか、いつの間にか、上条は居なくなっていた。もう既に上条家に行ったのだろう。

（さてと、やるのは上条が戻ってくる。夕方辺りか。さて、どうする）

本来なら、自分も付いていこうと思っていたのだが、どうやら寝過ごしてしまったようだ。ならば、あの三人を相手にするしかないのか、と落胆する。

「よぉ、おせぇ目覚めだな」

「やっぱり、雪旗は超雪旗だった訳ですか」

「大丈夫、私はそんなせつきを応援してる」

最初に来たのは、麦野だった。絹旗と滝壺も一緒だ。

（ってか、超雪旗って何？　超かっこいいんだけど。なんか、覚醒してるみたい!!）

などとバカバカしいことを考えつつ、とりあえず起きる。今日は、面倒事が一気に押し寄せてくる大波乱の日だ。だったら、この二人にも手伝ってもらおうかな。うん、無理だ。まず魔術のこと話せないし。

つい、ため息を漏らしてしまう。

「あぁ？　私達と居ると不満だってのかぁ!?」

ブチ切れて、ビーム発射する。おそらく癖のようなモノなのだろう。というか癖で殺されては堪らんが。

「バカ野郎!!?」

と言いつつ、全身にビームを受ける。それには、さすがに全員が驚いたようだ。前の戦いでは、余裕で避けていたからな。だがしかし、今回の場合は旅館に損害が掛かるため、受けるしかないのだ。

さすがに、上半身全部が持っていかれたようだ。下半身のみの体になっている雪旗。三人に戦慄が走る。

「う、嘘……だって、私……」

ポロッと涙が零れる。果たして、あり得るのだろうか？　あの、『アイテム』のリーダーが泣いている。
「ば、バカァ!!　麦野の超バカぁぁ!!」
ボコボコと麦野を叩く、絹旗。彼女も泣いている。しかし、この状況で滝壺だけが何故か冷静でいられた。
（そういや、ＡＩＭ拡散力場がわかるんだっけ？　だったら、俺が死んでないってのも、わかってんのか）
そのまま二人が泣いてる中、雪旗は意識だけはあった。ちなみに上半身が消え去ってるから、顔までは見えない。なんか変な感じである。そのまま下半身から上半身が生えてくるという感じで、によきによきと上半身が元に戻った。
「……」
三人は驚いていた。あり得ないモノを見ているような顔だった。いや、実際雪旗以外にこんなことできる連中はなかなかいないだろう。完全にいないとは言い切れないが、とりあえず二度目の死を体験した雪旗だった。
「……いや、アレだよ。能力。ハハ」
能力でなんとか、誤魔化すことができたので、とりあえず、難を逃れたのだ。ちなみに麦野には、謝られた。
「……はぁ」
夕暮れになり、そろそろだと思い始める。そろそろ、大変なことが起きる。あの三人の追跡を逃れようと思ったが、滝壺がいる時点で無理じゃね？　と思ったが、よく考えたら体晶が必要だから無理か。とそのことを思い出し、ダッシュで上条と上条の父親がいる浜辺まで行く。そこではもう既に、ミーシャと神裂が居た。
そして、唐突に世界が真っ青に染まった。
「なっ!?　これは!?」
雪旗は驚いたフリをした。ちなみにわかっていたので、驚くも何もない。しかし驚かなければいけないので驚くこれがまた面倒なのだ。
そのまま、上条が、刀夜と雪旗を連れて、旅館まで走る。
「頼んだぜ!!　神裂!!」

上条が叫ぶ。
そのまま、旅館まで着くとみんなの様子を確かめに行く。どうやら全員が気絶しているようだ。雪旗は麦野達が心配になり、走って、確認しに行く。全員、眠らされているだけで、どうやら、死んではいないようだ。そのまま全員を一箇所にまとめつつ、そのまま土御門が術式を終えるまで待つ。
そして、光が放たれた。向かっている先はおそらく上条の家だろう。そして、青に染まっていた世界は、元に戻った。
病室に居るのは、上条当麻。そこには、落胆の表情があった。土御門が死んだ。
「何なんだよ。ちくしょう！　お前がいねぇんじゃ。しょうがねぇじゃねぇか!!」
上条はそんなことを言ったら。病室の扉が開く。そこに居たのは、土御門だった。
「へっ!?」
続けて、雪旗と上条の両親も来て、いろいろ話した。どうやら両親は土御門なりの、お詫びだったようだ。家はどうやら破壊されたようだが、それも、上条の無事に比べればたいしたことないと、二人が言ってくれて、上条は少し安堵していたのもつかの間だった。
「とうま」
そこには、インデックスの姿があった。
「……とうまにドアに挟まれた。倒れてたのにスルーされたぁ!!」
ガブリッ!!　と上条は全身を隈なく齧られた。これもまた、平穏の証なのかもしれない。
「不幸だぁー!!」
上条の声がどこまでも響いた。

『八月三十一日』　夏休み最終日

「なんで、こんなことに……」
　雪旗は、『アイテム』の四人に捕まっていた。ちなみに場所は雪旗の寮だ。ずっと眠っていたのもつかの間。一瞬にして毛布が剥ぎ取られる。というか、勝手に人の家に入ってる時点でいろいろツッコミ所満載だが、そこはあえて、言及しない。見たら、わかった。扉が何かで破壊されたような跡があったから。
「……あのさ、チャイムぐらい鳴らそうよ」
「何度も鳴らしましたよ。なのに、超出なかったのは雪旗の方です」
　絹旗が悪びれもなく言う。だから壊すのはちょっと飛躍してないだろうか。
「ま、修理代くらい大したことないけど……」
　まさか、自分の所為ではなく他人の所為で弁償しなきゃならなくなるとはと思いつつも、仕方ないので電話で修理してもらう。ちなみに今日は一体何の用事があるかと聞いたら、どうやら転入先が決まったという報告だった。
「ふーん。どこに行くんだ？」
「アンタが通ってる学校」
「へ？」
　そう、麦野と滝壺とフレンダはとある高校。そして絹旗は常盤台中学である。
「……はぁ、お前らな。絹旗とフレンダはまぁ、いいとして、なんでお前らは、俺の高校なんだよ。もっと良い所たくさんあるだろ？　こんな所じゃなくてさ」
「あぁ？　何か文句あるのかよ？」
　と、うっすら後ろから閃光が迸りそうになるのを見て、とっさに口が動く。
「いえ、大歓迎です！」
　と、スッと土下座の姿勢になる。
「大丈夫。私はそんなせつきを応援してる」

と滝壺が励ましか、そうでないか微妙なことを言ってくれた。一応、励ましということで受け取っておこう。
そのまま入学祝いということでどこかに連れて行けと言われたので、適当にそこら辺をウロウロしてると、御坂が上条に激突してる場面を目撃した。
「何してんだぁ？　あの第三位は」
「まぁ、一種の病気みたいなヤツだろ……」
「超ツンデレってやつですね」
「結局素直が一番な訳よ！」
「大丈夫。私はそんな彼女を応援してる」
そんな感じに会話をしていたら、海原が上条を見ていた。
（確か海原の皮をかぶった、エツァリ？　だっけ……。イケメンの皮をかぶるとは、なかなかの策士だ……）
そんなことを思いつつ、御坂と上条はオープンカフェテリアに向かう。おそらくホットドッグを食べるのだろう。それは知っている。御坂が上条に宿題を見てあげてる所を遠くから、覗くように見る雪旗。これから起こることがわかってるいるのなら、尚更目は離せないだろう。しかし彼女達がそれを許してくれない。
「ほらっ!!　第三位ばっかり見てないで、早く行くぞ！」
「超早くしないと、映画、上映してしまいますよ!!」
「そうだね。早く行かないと」
（え？　ちょっと待って、映画って何？　ていうか、もしかしてみんなのを付き合わされる訳？　そしてどうしてみんなは遠ざかるの？　もしかしてアレなの？　一人一人相手にしろってことなの？）
そして、そのまま引きずられていく雪旗はC級映画を見ることになったのだ。
（あ、あまりにも、酷い……）
「あちゃぁ、今回は駄作だったかぁー。ま、でもしょうがないか」
映画のパンフレットを見ながら、そんなことを呟いていた。そして次に来たのは、フレンダだ。
「しょうかいする訳よ！」

と言って、こちらに来たのは、フレメアだった。フレメア＝セイヴェルン。無能力者（レベル０）だ。フレメアはペコリと頭を下げ、そのままフレンダの後ろへと隠れてしまう。
（まあ、この年頃の子はそうだろうな）
なんてことを思いつつ、来た場所は隠れ家みたいな場所だった。アイテムが愛用している場所らしい。そこで三人でゲームして遊んだだけだった。
（一体何をしたかったんだ……というかこんなグロテクスなゲームをやる、この子……恐ろしいと感じてしまう。好きなんだな……知ってたけどさ）
それから、一時間程経っただろうか。そこで次の番だった。次は滝壺理后。はっきり言って、彼女の好きな場所というのが想像できていなかった。そうしたら、来た場所は公園だった。ただボーッとするだけだった。
「楽しいか？」
「楽しいってよりも、なんというか……落ち着く」
「そ、そうか……」
そのまま、時間が過ぎていった。
「さてと、私が最後よ？」
麦野。ぶっちゃけ言うと、アンタが遊ぶ姿が想像できねっす。と思いつつ来た場所はセブンスミスト。服でも買うのだろうかと思いつつ、そこへと行く。かなりの量の荷物を持たされた。
（はぁ、重たい……）
そんなことを思いながら、荷物持ちとしてこき使われる。
そんなこんなで、いつの間にか五時ごろになっていた。つまりもういろいろと終わってる時間帯だ。エツァリはおそらく上条とある約束をしただろう。それはとても大切な約束だ。
（つか、御坂は知ってるのか？　あぁ、知ってるか、そりゃ）
そんなことを思いながら、荷物持ちを終え、寮へと帰る。そのまま疲れたので眠る。ちなみに今日が三十一日とすると、明日から学校が始まるという訳だ。

「面倒臭ぇ……」

そんなことを呟きながら、眠りに入った。

久々の学校

「……ダルい」

寝起きは最悪だった。明日から学校だぜ？　ずっと休みだったんだぜ？　つまりだ。学校なんてものに行きたくないってことだッッ!!!

「……はぁ、仕方ない。行くか」

学校へと向かう。教室に辿り着くと、上条はへこたれていた。おそらく終わってない宿題のことを気にしていたのだろう。

「どうした？　上条？　あ、そういや宿題やったか？」

「粉々にされた」

思わず噴出しそうになるのを押さえ、事情を聞く。知ってはいるのだがここで聞かないのも何か気持ち悪いモノを感じるから。

後、そういえば上条は記憶を失ってるから、今日が初日みたいな感じになってんじゃねぇのかな……。などと思いつつ、上条と会話していた。

「それが、魔術師に襲われて。ソイツの問題は解決したんだけどよ……俺の宿題が……」

忘れたら忘れたで何かあるだろう。ちなみに雪旗はそんなヘマは犯すはずがない。雪旗はここでは最優秀者だ。

大能力者（レベル4）という座に居座る限り自分より上の成績者は現れないだろう。と思っていたのだが、それも今日で終わりを告げた。

超能力者（レベル5）と大能力者（レベル4）。より正確に言うと麦野沈利と滝壺理后の二人が入ってきたのだフレンダは結局能力者かどうか不明だったのだった。あと姫神秋沙。その時、一番騒いでたのは青髪だったな、と雪旗は黄昏ながら思った。

（さて、しまったな……。どうしたもんか。今日は確か風斬氷華が出て来る日じゃねぇか。たしか、あのなんだっけ？　ゴスロリちゃん……。えっと……）

などと考えていると麦野と滝壺の二人が一直線で雪旗の所まで来る。ちなみに雪旗は考えているのに夢中で気付いていない。

（あ、思い出した。シェリー＝クロムウェルか）
　そんなこんなで、昼休み。雪旗が一人で適当に飯を食べてると、麦野と滝壺が前にドカッと座る。ビクッと肩を震わせる雪旗。
「な、なんだよ……？」
「いや、ほら、私達アンタと食べるから、他に食べる相手いないし」
「大丈夫、心配しなくても」
「ちょっと待て、お前らは俺以外の人と仲良くしろ。じゃなきゃ、学校がつらくなるぞ。友達を作っとけ」
　と、割りとマジでブルーになる雪旗は前世のことを思い出していた。
　別に友達が居なかったわけではないが、それでも少ない方だった気がするし、だからこそのアドバイスとでも言うべきか。それを二人は悪びれもなく言う。
「別に、大丈夫だよ。せつきが心配することは無いと思う」
「あぁ、ほら、私達強いから」
「意味がわからん……が、たまにはいいか」
　そんな感慨深いことを思いつつ、昼食を終えた。
（そういや、女の子に囲まれるっつーのも……ここに来てからだな。あっちじゃ完全に変人扱いだった気が……うっ！　頭が……）
　そんなことを考えつつ、残った時間は本を読む。すると、二人が挟んで読んでる本を覗きこむ。
「なんだ、これ？」
「まあ、お前達が見てもわからんだろうな」
　と悪戯っぽく笑う。それにムッとした麦野はそれを無理やり奪い、読み込む。
「んだぁ？　こりゃぁ？　バカみたいな感じの話は」
「ふざけんな！　俺が好きな作品をバカにするんじゃねぇ！」
「あぁ？」
　麦野の後ろから光の玉ができるのを見た瞬間。ゾッとしたが、ここは引く事ができない。

「俺だってなぁ、ハーレムを作りたいんだよ！　上条みたいに！」
教室でそんなことを口走ってしまった。これが前世だったら、あ、終わった。と思い、そして教室で除け者にされることこの上ないだろう。
しかし、今回の場合は違った。あの上条のモテ具合にみんなが賛成したかのように言う。
（どれぐらい、モテればああなるんだ……）
少し、驚きつつも、とりあえず助かったと思う雪旗。一方の上条はこの場にいなかったので、結局本人は知らぬ間に行われていることだったのだ。
「バカバカしい…」
「私はそんなせつきは応援できない」
二人は汚物を見るように雪旗を見て、雪旗は一旦落ち着く。そして席につき本を読む。
「……まぁ、そういうことだ。男なら夢を見るモノなんだよ！」
そんな言い訳っぽく言いつつ、とりあえずは今日という日を終える。

近づいてく恐怖

学校が終わり、適当に街をぶらつくと、いつの間にか『アイテム』の全員がそろっていた。

（それにしても、最近『アイテム』と絡むことが多くなったぁ……浜面って確か十五巻ぐらいだっけか？　アイテムに入って……滝壺と付き合うみたいな感じになって、それに麦野が襲うという形になってたよな。それでフレンダはその途中で死に、絹旗は……まぁ、うん。これはあまり良くない未来って感じか……フレンダを殺させず、滝壺が体晶に犯されないように、使わせず麦野の体を義手とか義眼にせずに綺麗なまま……）

などと考えていたら、いつの間にか浜面の仕事がほとんど無くなっていることに気付く。というか『アイテム』って今、壊滅状態だよね？　だったら、浜面って言う主人公。存在しなくなるんだけど……。え？　もしかして未来変えた!?　などと今更すぎることを考えている雪旗。

「……やべぇ」

つい、口から洩れてしまった。それを聞き逃すはずもなく。

「超どうしました？」

「いや、なんでもねぇ」

「そうですか」

まぁ、こんな軽い感じだが、そこまで深く追求することでもないと踏んだのだろう。

「……んで、今日はどこに行くんだ？　つかどこか行くのか？」

「はい、超地下街です」

地下街。まあ、言葉のままなので、説明はいらないだろう。つまりそういう場所である。地下にはいろんなモノがあるので割りと楽しいらしいのだが、雪旗自身は一度もそこへ行った事が無いので、少し楽しみでもあった。

しかし、雪旗自身危惧していることもある。地下街。これはつまり戦闘の舞台になる場所でもあることを雪旗は知っていた。しかしこ

こで別の提案をしたら、地下街からは遠ざけることもできるだろうが、雪旗はそんなことはしない。つまり自身からわざわざ、面倒事に巻き込まれに行くということだ。理由は簡単だ。今回こそ、解決に導くのだ。絶対に。心にそう強く決意すると、そのまま適当に付いてく。

（極力。こいつらを巻き込まないようにしたいからな、居れば心強いがやっぱり最近は『暗部』からも抜けてだいぶ、良い感じになってるし。まあ本質自体は変わって無いだろうが、それでもあんまりこちら側に連れて行きたくはないしな……でも、ここで

そんなことを思いながらも、地下街へと向かう。一向だった。

眼前に広がる地下街は思った以上に普通であまり、代わり映えのしないモノだったが、それでも楽しいということには変わり無いだろう。つまり、金を使うチャンスが到来したのだ。

「ま、余った金はいくら使ってもいいよな」

そんなことを思いつつ、サイフを見ると、ものの見事にカラッポで驚く。

「ありゃ？　最近使いすぎてたか？　逆に……」

そういや、いろいろと食費がかさんでいた気がした。そういえば、上条に頼られまくって金を使いすぎていた気もする。

「この野郎……仕方ない。下ろすか」

そして、お金を下ろした後に適当に遊ぶことにした。と言ってもやったことと言ったら、ゲームセンターでバトルしたことぐらいだろうか。

ちなみに順位で行くと、雪旗、フレンダ、滝壺、麦野、絹旗。だった。

「俺、最強ーッ!!」

超元気よく言った、雪旗。

「ムムム!!　超ありえません!!」

「フッ……私だって努力したのよ」

「私が雪旗に負ける？　あり得ないって訳よ!!」

「……」

そんなこんなでいろいろと楽しい時間を送り、少しずつ時間が過ぎていく。そして徐々に楽しい時間が終わりを告げようとしてる。
（そろそろか）
ジャッジメントがこちらに来て、テロリストがこちらに来たという情報を教えに来て、ここに出てくださいと言う。
「なんだぁ？　テロリストだぁ？　んなもん私がぶっ飛ばしてやる」
「やめろ！　冗談抜きで死人が出る危険性が！」
などと言いつつとりあえずは、地下街を抜けることにしたアイテムだが、途中で電灯がすべて消える。そしてシャッターが閉まり、閉じ込められてしまった。
（チッ。さっさと行動しときゃ、良かった！）
そのまま白井を探す。アイツならテレポートでどうにでもできた。ここでせめてアイテムを抜け出させたかった。
「おい、どうする？」
「窒素パンチで超壊すことも可能ですが……」
「ここは常識的に動いてくれ。壊すのはまずい。お前達はそこに居てくれ、俺はちょっとあっちの方で様子を見てくる」
そのまま『肉体強化』を使い、走り出す。目指す場所はもちろん、シェリー＝クロムウェルの所だ。そしてついに見つける。ゴスロリ衣装を着用している女性。ボサボサの金髪に褐色肌。ま、ここら辺はどうでもいい。それより問題は警備員が動いてることだ。ここじゃ、絶対に雪旗は追い出されてしまう。ゴーレムが自由に動き回ってる間はおそらく勝てない。ここでも上条頼りになってしまう。
「どうする？　いや……どうするもこうもねえか、よしっ!!」
そのまま、銃を撃ってる警備員達の間を突っ切る。さすがに警備員達が気付き、止めに入ろうとするが、肉体強化（インフォースボディ）を使っているので、追いつくこともできない。
「離れててください!!」
そのまま雪旗はゴーレムに突撃する。制止すら聞かず、ぶん殴ろうとするゴーレムを受け止めようとする。なんとか受け切ることができ、そのまま、拳を右へと受け流す。拳が壁にめり込み、動けなくなっ

た瞬間。シェリーの方へと体を向ける。
「チッ!!　エリス!!」
　シェリーが叫ぶと、その拳を抜こうとするが、雪旗はそんなモノは待たない。そのままシェリーの所まで一直線に行くが、ゴーレムの方が早かった。そのまま左腕を横へ振るい、雪旗が拳に直撃する。
「がァァあああああッッ!?」
　そのまま勢い良く壁へと激突する。
「て、テメェ……。何のためにこんなことをする?　一体どうして?」
「はぁ?　んなモン決まってるだろ。戦争を起こすためだ。その火種の為にお前には死んでもらうぞ!」
「せ、戦争……だと?」
　知ってる。一体なぜそういう風に至ったのかすら知ってる。だがあえてこういう感じに話を進める。
「テメェは……!!　ふざけんなぁ!!」
　これは紛れもなく本音だった。ふざけるな。戦争など起こして自分の関わりのある人達が犠牲になるのは、絶対に嫌だ。これは自分勝手だと思ったが、絶対に嫌だった。
　ここである事実を知る。どうやら上条はまだ来ないようだ。というよりここに来ているのかすら不安になってきた。自分は自分で結構自由に動いてきた。だからもしかしたら、何かの手違いで来られなくなったのかもしれない。という不安感が全身を襲った。しかし、奮い立たせる。ここでもしも、上条が来れなくても、絶対にコイツだけは戦争だけは起こさせない。
「ウラァァッッッ!!!」
　雪旗は声を張り上げながら、絶対に止めようと思った。自分の為にも相手のためにも。

始まる絶望

「エリス!!　コイツをやってしまいな!!」
　ゴーレムがこちらに向かって殴りかかってくる。それを避けようと動くが、先程のダメージが尾を引いてる。動きが鈍くなっていた。それでもなんとか、ぶっ飛ばしてやろうと動く。しかしそんな状態で勝てる程相手は弱くなかった。ゴーレムの一撃がまともに直撃し、体がグチャリッと潰れてしまった。
「…ハハッ!!　ハハハハ!!!」
　笑っていた。狂える程笑う。
（しまった……!!　上半身が丸ごと持ってかれた……!!　クソッ！早く戻れ！）
　ここで、この最悪なタイミングで来てしまった。上条当麻。
「なっ……!?」
　上条が最初に目についたのは一体なんだっただろう？　しかしそんなことよりもさっさと回復を済ましてしまいたかった。それだけに集中する。いい加減何度も死んでいるので、慣れてきた。
「お前が今回の首謀者か！」
「何者だ？　お前？　まぁいい。エリス!!」
　ゴーレムが上条へと襲いかかる。それを上条は右手の幻想殺しでゴーレムの腕ごと消し去る。
「!!　お前……幻想殺しか（イマジンブレイカー）」
「何？　なんでそれを？」
　上条が疑問に思った。するとシェリーの方から話をする。
「私はシェリー＝クロムウェル。まぁここでイギリス清教を名乗ってもね？」
「イギリス清教!?　インデックスと同じ組織がなんで!?」
「……インデックスか。まあいい」
　そのままゴーレムが地面を思い切り殴り、その破片で攻撃してくる。しかしそれはレーザーのようなモノですべて破壊された。
「何!?　今のは……竜王の息吹（ドラゴンブレス）!?」

シェリーが驚いた様子を見せたところで、雪旗が近づいていく。
「ったく、やっと元通りだ……」
後頭部を撫でながら近づいていく雪旗。
「な!?」
シェリーはかなり驚いた様子を見せたが、それを無視して雪旗は次にルーンを取り出す。
「コピーのルーンだ。さ、やろうぜ？　第二ラウンドだ」
そのまま炎剣を飛び出させる。それでゴーレムの腕を落とし、さらにルーンを取り出し、炎剣を連続で擲つ。
「チッ!!」
ゴーレムの方もただではやられず、そのまま周りにある物を吸収して、腕を形作る。
「んな程度でやられると思ったか!!?」
シェリーはそのままゴーレムをさらに強化させて、地面をぶん殴り破片を飛び散らせる。それを全部避けて、どんどん距離を詰める。そうしてゴーレムの腕を思い切り蹴り飛ばし、横へと大きく腕を反らせ、無防備の胸へと竜王の息吹（ドラゴンブレス）を放つ。
「グッ……ッッ!!」
体から重たい衝撃を喰らったが、そんなモノは我慢し頭を大きく振って朦朧とする意識を戻そうとする。
「上条……そっちの女の子と一緒に逃げろ……俺はコイツを倒すから……」
足を引きずりながら徐々にゴーレムへ近づく雪旗。内部が破滅していくのを感じていくが、それを無視する。死ななかっただけ幸運だと思いながら、ゴーレムにまた同じ技を喰らわせる。
「バカ野郎!!　それ以上やったらお前、本当に死ぬぞ!!?」
（死ぬ……か。そんなモン何度も体験してるっつの……いい加減狂いそうなぐらいにな）
「……大丈夫だ。上条。俺は死なないんだ。なんせ、俺は肉体強化（インフォースボディ）っつー力があるからな!!」
徐々に体が修復させていっていたので、全速力でゴーレムに向かっ

ていく。どうやらすぐにゴーレムも元の形に戻ってしまった。
そして、竜王の息吹をもう一度放とうとしたら、そこでゴーレムからの反撃が来て、地面を殴り、破片が飛んでくる。その破片が風斬に当たってしまった。
「しまっ……!!」
上条と雪旗が同時に叫ぶ。そして、破片が直撃した風斬は平気に起き上がる。それを見た上条は驚愕する。それは普通に起き上がったことにではない。破片が当たった頭の中に『何か』あるということにだ。
「か、ざきり?」
上条があり得ないモノを見る目で見て、風斬が近くにある鏡を見ると、そこに映っていたのは自分の中身だった。それだけで自分が人間じゃないということが人目でわかる程の。
「キャァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ!!」
そのまま風斬は逃げ出す。しかしその方向が悪かった。おそらく前など見てる余裕すらもなかったのだろう。そのまま風斬はゴーレムの方へと真っ直ぐ進んで行き、そしてゴーレムが腕を横に振るい、そしてゴーレムの後ろへと飛ばされる。風斬は何かに引っ張られるように、起き上がると、そのまま逃げ去ってしまった。
「!?」
上条は叫んだが、どうやらもう行ってしまったようだ。
「チッ……エリス。先にあの化け物をぶっ殺しに行くよ」
そのままゴーレムが真上を殴り、巨大な石やら何やらで道を塞ぐ。
「チッ。道を塞ぎやがったか……、どうする? 上条」
「な、なんだ? あれ……風斬は……一体?」
どうやら、上条にとっても、意味のわからないことだらけで、少し頭の整理が必要なようだ。確かそろそろ小萌先生から電話があるはずだと雪旗は思っていたので、そのまま、ゴーレムが道を塞いだ方を見て、そこに向かって、竜王の息吹を放出する。
「ガハッ!?」
そのまま膝をつきながら、頭を思い切り振る。

「ゼェ……ゼェ……」
「む、無理するなよ？　雪旗……」
「あぁ、わかってるっつの……」
　そのまま、上条と共に風斬を追おうとしたら、電話が掛かってくる。上条の方からだ。
「なんだ？　こんな時に」
　そのまま携帯電話をポケットから取りだし、出る。相手は小萌先生だ。どうやら、話を聞く限り、風斬のことについて、教えてもらっているようだ。
「何かわかったのか？」
　雪旗が言うと、上条は頷き、説明してくれた。ＡＩＭ拡散力場と深く関わりがあるとか人間じゃないとか物理現象だとか、しかしそんなことはどうでもよかった。
「雪旗。お前はどうする？　はっきり言って、お前はただ巻き込まれただけだ。こんなことに関わる必要性もあんまり無いんじゃないか？」
「いやいや、俺だって用事がなきゃ、逃げてるっての、やらなきゃならないのはお前も同じだろうが？」
「そうだな」
　そして、上条当麻と雪旗硬地の二人は風斬氷華を追うために、走り出した。

シェリー＝クロムウェル

シェリー＝クロムウェルと風斬氷華は今、同じ場所に居る。つまり追い詰められてるということだ。
「虚数学区の鍵ってのは、こんなモンなのか？」
「……ッ！」
「こんなモンを大事そうに抱えるなんて、科学は狂ってるよな」
風斬は座り込みながら言い返す。
「どうして、こんな酷いことを!!」
そしてシェリーの方は思わず、笑いそうになりながら言う。
「おいおい、まさかお前、死ぬのが怖いとか言うのか？　そろそろ気付けよ。お前が人間じゃないってことに」
風斬の顔色が真っ青になる。思わず逃げ出してしまいたくなるほどの絶望だ。
「おいおい、何真っ青になってるんだ？　お前にしてることなんて、こんなモンだろ？」
そう言って、ゴーレムが自ら、壁を思い切り殴り、ゴーレムの腕が取れる。しかし殴った破片が徐々に腕に集まり、そのまま元の形へと戻したのだ。
「あなたはエリスと同じ……化け物なんだから。テメェの居場所なんてどこにもないんだから」
思わず、涙が零れてしまった。しかしそんなのはお構いなしに、シェリーはそのままゴーレムに命令をして、攻撃を仕掛けようとする。風斬は目を思い切り瞑り、覚悟した。しかし……衝撃は何も来なかった。目を開くと、そこには上条と他の誰か知らない人が立っていた。向こうにいたはずのゴーレムは完全に粉々になっていた。
「ガハァ……ッッ！」
突然の吐血に思わず驚いてしまう風斬。
「だ、大丈夫ですか!?」
「……ゼェ……ゼェ。なんだよ？　やっぱり人間じゃないなんて嘘じゃねぇか。化け物？　なんだそりゃ、コイツは立派な人間じゃねぇ

か」
　シェリーに対してか、風斬に対してかそんなのはどうでもよかった。とりあえず言いたい事は言えた。そして雪旗はそのままゴーレムに近づいてく。
「いい加減しつこいな、テメェは……」
「うるせぇ、こんな無駄なことをやめるまでだ。俺はしつこいぞ」
　シェリー＝クロムウェルは持っていたチョークで再び、ゴーレムを造りだす為の魔術的なモノを書き出す。
「へっ……こういう馬鹿が一人や二人程度はいるんだな。よかったじゃねぇか」
「バカが、一人や二人程度じゃねぇよ」
　雪旗が言った瞬間だった。ライトが照らされ、ゴーレムとシェリー＝クロムウェルが一斉に警備員（アンチスキル）に撃たれる。
「……撃てェェえ!!」
　盾で上条と風斬と雪旗を黄泉川がガードする。そのままいつまで銃撃をしようとも、ゴーレムは崩れては戻り崩れては戻りを繰り返す。いつまで経っても、完全に破壊することは難しい。上条が前に出ようとしたが、風斬が止めようとする。
「止めるなよ……風斬。俺は必ず帰ってくる」
「……ァ」
　そのまま上条は言うと、雪旗は上条に言う。
「行くぞ……アイツをぶっ飛ばすためにお前の力が不可欠なんだからな」
　上条と雪旗が走り出す。上条を吹っ飛ばそうとするためにゴーレムが地面を思い切り殴る。その衝撃で上条が吹っ飛ばされそうになったが、雪旗が受け止める。
「大丈夫か。お前はシェリー＝クロムウェルを相手にしろ、俺はゴーレムを相手にするから」
　上条は何も言わず、頷く。
「よしっ……行くぞ！」
　ゴーレムの攻撃を受け止める為に雪旗は肉体強化をほとんど体が

軋む音すら出る程の出力でゴーレムの攻撃を受け流しながら、避け続ける。ようは、シェリー＝クロムウェルの助けに入れない程、追い詰めてやればいい。そのままずっと攻撃を受け流したりしながら、上条がシェリー＝クロムウェルの所まで一直線に進む。そして上条とシェリー＝クロムウェルが対峙する。そして、上条はそのまま思い切りぶん殴る。

「ガハッ!?」

そのまま地面に倒れこむ。

「よし……あとはコイツを……」

上条が右手で破壊しようと思ったら、シェリー＝クロムウェルが地面にチョークで陣を描いていた。

「ま、まさか!?　二体目を造る気なのか!?」

「フフ……これは一度に二体も造れない……でもな、それを上手く利用すりゃ、こんなことだってできるんだよ！」

そのままシェリー＝クロムウェルは地面に大きな穴を開け、逃げ出す。それと同時にゴーレムも形が崩れ去る。

（くそ、逃げられたか……でも、ターゲットがここにいるのに、逃げ出すなんて？　思い出せ……何か？　何か見落としてないか？）

「上条!!」

「!!!」

「アイツ、確かイギリス清教だったよな？　ということは……」

「狙ってるのは、インデックスか！」

二人はとりあえず、封鎖されてる地下街から出ることはできない。つまりインデックスと会うことすらできない。穴を見つつ風斬氷華が近づいてきた。

「あの、さっきはありがとうございました」

「あ、あぁ、それより体大丈夫か？」

上条が言うと、大丈夫みたいです。と体を見回す。

「も、もうあの石像は襲ってこないんですよね？」

風斬が言うと、上条はもう一度穴の方に顔を向けて真顔で言う。

「いや、アイツは逃げたわけじゃない……次のターゲットを追い始め

ただけだ」
　え？　と風斬が言うと、上条が続ける。
「アイツの目的は俺や風斬を殺すことじゃなくて、特定の条件が揃えばどうでもよかったんだ。その内の一人が……」
「インデックスって訳だ」
　雪旗が言うと、上条も頷く。
「え……で、でもそれじゃ警備員に保護してもらえば……」
「それもできないんだ。アイツはこの街の住人じゃないんだ……下手すりゃ、逮捕されるかもしれないんだ……迂闊に頼れない」
　雪旗が説明する。そして穴の方を見て雪旗はそのまま穴から降りようとする。
「俺は、肉体強化があるから、すぐに追いつける……さすがに二人一緒に降ろそうとしたら、負担が掛かって無理だから……俺が一人で行く」
　そう言い残し、そのまま穴へ降りていく。
「あ、雪旗!!」
　上条が叫ぶのを無視し、そのまま下へと降りると。
「やっと見つけた……」
「ったく、手間かけさせやがって」
「超疲れたって訳ですよ」
「結局、私達が必要って訳よ！」
　アイテムの四人がなぜかそこに居た。
「な、何してんだ……お前ら……」
「何してんだって？　お前が勝手にどっか行くから、私達が来たんだろうが……!!」
　後ろから閃光を迸らせる麦野。雪旗は若干怯えながら、自分の行こうとしてる方向と逆の方向を指す。
「そ、そうか……今、上に警備員がいるから……とりあえずそっちに」
「おい……テメェふざけてんのか？」
　ビームを発射させると、それを紙一重で避ける。
「な、なにしやがっ……!!!?」

「お前が今どういう状況か知らねぇが、私達に頼まないってのはどういう事だぁ。あぁ!!?!!」
胸倉を掴まれ揺さぶられる。
「私達がテメェの邪魔になるからか？　思い上がってんじゃやねぇぞ!!　言っとくが、私達は手伝うからな……」
そのままポイッと胸倉を離され、ドサッ！　と地面に尻餅をつく、雪旗。そのまま思わず笑いがこみ上げてきた。
「何、笑ってやがる？」
「いいや、俺は……随分と好かれてるんだなってな……」
「……なっ!!」
顔を真っ赤にして、麦野は原子崩しを放ちまくる。
「ギャァァアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!　死ぬ!!　冗談抜きでェエエえええええええ!!!!」
避けまくりながら、叫びまくる。そして一息吐いて、雪旗が改めて言う。
「わかった……じゃあ、行こうぜ。俺が思い上がってただけみたいだしな……!」
そして、『アイテム』＋『雪旗硬地』がシェリー＝クロムウェルとゴーレムをぶっ飛ばしに行くことになった。

風斬氷華という名の友達

そのまま地下街から上に上がることができた雪旗一行。どうやら、風斬よりも早く着いていたようだ。しかし今、インデックスがゴーレムに襲い掛かっている。

「インデックス――ッッ!!!」

雪旗が叫び、そしてゴーレムに竜王の息吹を喰らわそうとしたら、グイッと腕を掴まれる。

「テメェはそこで大人しくしてろ……。ようはアイツをボコボコにしてやりゃ、いいんだろ?」

「アイツ? いやいやいや。石像の方をお願いします」

「そーか」

なぜか不機嫌な麦野は放っておいて、雪旗はインデックスの方へと行く。

「大丈夫か?」

「こうじ。とうまは?」

「多分、今……別の戦いをしてると思う」

そのままインデックスを保護しながら、とりあえず、安全な場所まで連れて行き、そして雪旗は走り出し、ゴーレムに向かう。

「麦野! 絹旗! お前らはとりあえず、ゴーレムの動きを止めてくれ、後は俺が決める!!」

「えぇ? 超良い所取りですか?」

「じゃあ、逆に聞くが。お前らでなんとかできんのか?」

そのまま膨れっ面のまま、雪旗の腹をボコボコ殴る。結構痛い。いやマジで。

「……さてと……じゃあ、行くぞ!」

絹旗が窒素装甲をまといながら、相手の動きを封じる為に、右腕を動けなくさせる。麦野は原子崩しで左腕を破壊する。

「よし……」

雪旗がゴーレムの目の前まで行くと、竜王の息吹を放つ。そうして、風斬氷華が辿り着くと同時に雪旗が完全にゴーレムを破壊した。

「あ、確か……風斬だっけか？　お前の……友達……確かに……助けたぜ？」
　そのままバタッと倒れこむ。どうやら今日だけで魔術を使いすぎたようだ。それも、『竜王の息吹』。これだけ強力な魔術を使いすぎればこうなるのは目に見えて明らかだった。そのまま雪旗の意識を失った。
　目が覚めると、そこは病室だった。とっさに体を起こすと、『アイテム』の面々が居た。
「な、俺は？」
「やっと起きたか……」
　足を組みながら、イスに座ってる麦野。映画の情報誌を読み耽ってる絹旗とボーッとしてる滝壺とフレンダはサバ缶を食ってた。
「おい、フレンダ。ここで食べていいもんなのか？」
「え？　知らないって訳よ！」
「はぁ」
　そのまま体をベッドに預ける雪旗。そして周りを見渡すといつも通りの日常が広がっていた。どうやら今度は上条ではなく、雪旗が病院に世話になる番のようだ。逆に今日上条は病院にはいないし。窓の外を眺めていると、いろいろ思い耽ることも多かった。今日はやりすぎたなとか思ったり、とにかくいろいろだ。
「……ねえ、俺ってさ……わりと羨ましい日常を送ってるよね？」
「は？　何言ってんだ？　今の状況からそんなことを言うなんて……マゾ気質でもあんのか？」
「いやいや、そうじゃなくてですね？　ほら、あの……そう！　女の子の集団に俺一人とか！」
「……」
「……」
「……」
「わたしはそんなせつきは応援できない」
　そんな腐ったゴミを見るような目で見られて、一部の業界ではご褒美です状態になってる。ちなみに一部の業界の人じゃない雪旗に

とっては、後悔しかないという。
「……ごめん、あの……ほら、つい」
「はぁ、変なこと言ってんなよ」
麦野がため息混じりに言うと続けて、絹旗が言う。
「やっぱり雪旗は超雪旗って訳ですねっ！　気持ち悪さ超世界一ってことですね！」
「はぁ、後悔しかないって訳よ」
「大丈夫。そんなせつきを私は応援しない」
力強く否定されてしまった雪旗はそのままベッドに横になったまま、空を眺めながら物思いに耽っていた。
「また変態的な思想で私達を超襲ってるんですね！　キャー襲われるー！」
「やめぃ!!!　誤解を招く言い方はぁ!!　つか、ガキに興味ねぇよ!!!」
それを聞き、絹旗が本気で切れる。そのまま捲くし立てるように言う。
「超雪旗の癖に生意気なこと言ってンじゃねェぞ!!　あァァ!!?」
ガタガタと体を震わせながら、枕を盾にする雪旗。しかしそんなモノまったく意味を為さず、そのまま追い詰められる雪旗。
「チャンスをあげます。私は超総合的に見れば超スタイル超いいですよね？」
「はい……それはもう超いいです……」
ガタガタ体が震えたまま言う雪旗だったのだ。それからしばらく経ち。次は上条とインデックスと風斬氷華が入ってきた。
「よぉ、上条。お前は随分と侍らせてるね？」
「何言ってんだ？」
上条が意味のわからないと言った感じである。鈍感、朴念仁。さすがである。どうして気付かない？　俺だったら確実に気付くね。いやマジでこれは確定事項。そんなことを考えてたら、上条は自信満々な感じでこんなことを言った。
「俺は今回、入院をしなかった！　これって成長だよな？」
「いいや、そもそも入院しないのが普通だ」

そう言って。雪旗は体を起こして、そのまま地面に立つ。
「おい！　無理するんじゃ」
麦野が言うと雪旗は制止して、そのまま病室を出て行こうとする。
「どこ行くんだ？」
「ん？　カエル顔の先生の所だよ？　俺はもう大丈夫と報告してくるんだぜ。つか、もう平気だしな」
そのまま雪旗が病室を出て行くと、カエル顔の先生と出くわす。
「あれ？　君は絶対安静のはずだったんだけどね？」
「大丈夫っすよ。もう退院して良いですか？」
「まあ、大丈夫なら居る意味もないしね」
「先生の腕が良いからっすねぇ、じゃ、そういうことで」
そのままカエル顔の先生と会話を終え、もう一度病室に戻ると、いつのまにか風斬がいなくなっていた。
「あれ？　風斬は？」
「……あぁ、どこかに行っちまったんだ。でもまた会えるからさ……」
上条が言う。そう彼女は物理現象。今回の件でそれは痛いという程わかった。とりあえず今回はひとまずの別れ、しかし今度、また会える日が絶対に来る。それは誰一人として疑わなかっただろう。『友達』だから。
「よし、んじゃ、帰るか」
着替えを済ませ、全員で寮へと戻った。ちなみに二人の寮へは戻らず、『アイテム』共同で使っている場所があるらしい。羨ましいと思ったりしたが、とりあえず別れた。今日は厳しい一日だったと、改めて思った雪旗はまたいつも通りの日常へと戻るのだった。

九月八日　アニエーゼ部隊

九月八日。今日は法の書関連の話だったはずだ。どうやら今回は一時とは言え、敵対することになりそうだ。面倒だと思いつつ、学校が終わって、雪旗と麦野と滝壺が居る。そして雪旗はツッコミを入れる。

「俺は言ったはずなんだけどな。あぁ言ったはずだ！　なんでお前らは俺としか関わってないッ!?」

「仕方ないだろ？　なんか超能力者（レベル5）とか大能力者（レベル4）ってだけで全員が少し避けてるみたいだしよ？」

「えぇ？　だったら吹寄がいるじゃねぇか。アイツならきっと避けないっつの。というか俺だって大能力者（レベル4）じゃ！」

そんな感じに話しをしていたら、いつの間にか寮へと着いていた。ちなみに夕方辺りだったので時間も大分経っていた。

「それにしても、暇だなぁ……」

「だったら、今からどこかに行くか？」

「それはそれで面倒だな……」

我が儘を言う雪旗。それに対して麦野は特に考えずに口にする。

「だったら、お前の家に集まるとか？」

「そうか、それが無難かもなぁ。あ、ダメだ」

直後思い出す。今日が天草式とローマ正教の戦いがあるということに法の書を巡った戦いだったはずだと思いながら、考えていた。どうしたら最大限に相手を無力化できるかとか。

「……ダメだぁ？　テメェ。我が儘ばっかり言ってんじゃねぇぞ!?」

「いや、そういう意味ではなくてですね」

つい、敬語に口調が移行してしまう。そして寮に鞄を置いて、そのまま外へと出ようとする。

「ちょっと待て、お前どこ行くの？」

「いいや、ちょっと用事思い出した。大した用事じゃないから」

出て行こうとしたら、腕を捕まれた。

「嘘吐いてんじゃないの？」
「……」
「せーつーきーくうううううううんん!!!!!!」
「怖い!!　怖すぎる!!」
　そのままとっさに土下座をする雪旗硬地。そのままチラッと見ると、髪をかきあげながら、ため息を吐いてる。
「雪旗。お前分かりやすすぎるわ……」
　呆れてるというのが人目でわかった。とりあえず今回は巻き込まないでおこうかと思っていたのだが、不可能だったようだ。結局アイテム全員で行くことになってしまった。
（これ、俺怒られるんじゃね？　あれ？　よく考えたら俺誘われてないな……どうしてだ？　役立たずだから？）

　そんなことを思いながら、適当に探していた。すると上条達がいると思われる場所に辿り着いた。コソコソと隠れながら小声で会話する。
「なぁ、何をしてるの？　これ……」
「え？　いや……一応今回の敵はいろいろと面倒だからさ……」
　そんなことを思いながら、アニェーゼ部隊を見る。今回の場合は悪いことをしようとしてるのはアニェーゼ達の方なので、敵情視察と言った方がいいのか。そして上を見ると建宮斎字が眺めていたのだ。そのまま建宮に付いていく為に肉体強化を使う。
「ちょっと待っててくれ……あとで携帯電話で連絡する」
「は？」

　そのまま全速力で走り出し、上まで一気に飛んで、建宮斎字（たてみやさいじ）が驚きながら見る。
「な、なんなのよな？」
「おぉ、俺は雪旗硬地っつーんだ。お前ら、天草式十字教に手を貸す側って訳だ」
「いきなり来て、それをはい、そうですか。って信じれる程お人よし

じゃないのよな」
「まぁ、そうか」
　そのまま少し身構えてる建宮に対して、雪旗はとりあえず言う。
「俺は守りたいんだよ。オルソラを。それはお前たちだって同じなんだろ？　あの神裂火織と対等になりたいんだろ？」
　そのまま手を差し出す。
「俺に手伝わせてくれないか？　なんだったら途中で裏切ったっていい。盾代わりにしてもらったって構わない。それでもダメか？」
「いいや、いいのよな。戦力はあればある程助かるって言うのも事実だしな」
　そのまま二人は握手する。それから天草十字教の面々と会うことになった。一番目に付いたのは五和だったが今回は特に関係は無いだろう。
「……さてと、やろうとしてるのは簡単だよな。アイツらからオルソラを守ればいいんだろ？」
　そのまま地面へと降りる。そのまま先ほどアイテムが居た場所だ。
「よっと……」

　極力音は出さず、降りる事ができた。そしてアイテム全員に説明する。
「いいか。相手はアイツらだけど。絶対に死人は出さないでくれよ？」
「善処しまーす」
　軽い口調で言うのは麦野だったが、即効でツッコミを入れる雪旗。
「おい！　善処じゃなくて、絶対な!!」
　会話を終えると、天草式とローマ正教の戦いが始まる。
「おい！　説明くらい寄越せよ!!」

　そのままアイテム達を引き連れて行くと上条とさっそくかち合ってしまった。
「え？　雪旗。お前……」

「あ、あぁ、上条？　いやぁ……ごめん」
　そのまま勢い良く、腹部に一撃を放とうとしたが、肉体強化は異能の力だ。つまり上条の右手に触れてしまうと一気に効力が消える。運悪くその右手に掴まれてしまった。
「何してんだ。雪旗。お前まさか……！」
「あぁ、そうだな……今回は敵同士って訳だ」
「なっ!!　アイツらが何企んでるかわかってるのか!?　もしお前がそんなことを考えてるなら、まずはその幻想をぶち殺す！」
　ぶん殴られた。ちなみに肉体強化なしの体なら上条に勝てないかもしれない。今まで能力に依存しまくってたんだなと思い、これからは少しだけ、体を鍛えようかと思った。上条のパンチが顔面に向かってきた。
「っと!?」
　とっさに避けることができた。どうやら肉体強化のおかげか、そこそこ体も鍛えられているようだった。
「結構相手できるんだな」
　そんなことを思いながら、アイテムの連中に言う。
「お前達は違うシスターを狙え！　俺はコイツを相手にする！」
「えぇ、超雪旗の命令聞かなきゃならないんですかぁ？」
「お前らが付いてきたんだろ!!　だったら俺のお願いぐらい聞いてもらえません!?」
　そんな風に叫ぶと麦野がため息を吐きながら言う。
「はぁ、仕方ない。行くぞ。滝壺は私と、フレンダと絹旗はそっちだ」
「わかったって訳よ」
「超わかりました」
　あぁ、麦野の命令は聞くのかとか思いながら、上条と対峙する。
「俺はお前を倒すぞ」
「そうだな……今回ばかりは敵対するしかないみたいだし、引く気も無いみたいだしな」
「当たり前だ……」
　二人は凄まじい勢いで激突する。

それは当たり前のこと

「うらぁ!!」
　雪旗は攻撃を仕掛ける。ただのパンチだ。特に肉体強化とかも使わない。逆にこっちの方が戦法としてはあってるかもしれないと思いつつ、上条の顔面に向かって殴ったが、どうやらそれは大した意味はなかった。上条は意図も容易く避けることができた。
「うぉ!?」
　上条が避けると同時に殴りかかってきたので、それを大きく下がって避ける。
「お前……結構喧嘩強いんだな？」
「そりゃな……」
　そんな軽口を叩きながら、さらにもう一度、またさらにと攻防は続く。そして、上条が最後に蹴りを喰らわせようとした、しかしそれが戦法としては悪手だった。
　肉体強化をして、自身の身を守ったのだ。肉体強化。文字通りに体の硬さも変わる。そのまま上条の蹴りは一切通用せずに逆に蹴った本人が痛がる始末だ。
「グァ!?」
　足をとっさに押さえてしまう上条。しかしその隙をみすみす見逃すはずもなく、雪旗はそのまま蹴りを喰らわせ、向こうへ吹っ飛ばす。
「グ……」
「しばらく、動けないだろ……」
　そのまま走り出す。そしてアイテムの面々が思った以上の成果を出していたので、自分の立場がないなと思った。
（命令ってのは強いヤツがやる仕事なんだな……）
　そんなことを思いながら、適当に見守ってると、後ろからシスターさんに攻撃をされる。
「っと……」
　シスターの方が上条よりも弱いのは明らかだった。肉体強化を使えば、すぐに気絶させることができるんだから、即座に体を移動させ、

腹部に強烈な一撃を喰らわせる。
「そっと……そっと……」
そっと寝かせながら、また見守ってた。
すると、いつの間にかシスター達が少なくなっていた。アイテム達も一度集合する。
「おい、相手がいなくなったけど？」
「多分、引いたんだと思うぜ？」
麦野達と話してると上条とインデックスとステイルが来た。
「おい、そろそろ帰るぞ」
「あれ？　どうした？」
そのまま事情を聞くと、もう上条達に出る幕はないらしい。帰ろうとしてる途中だった。上条はコンビニに行くと言って、走り出したのだ。雪旗は小さくため息を吐いて、上条の方へ行く。
「……付いてくぜ？　上条さんよぉ」
「……悪い」
「別に気にすることないぜ？」
そのまま上条達と行くと、場所は上条が思考を巡らせていた。どうやらここかもしれないという場所はわかったらしい。ここでは特に口を挟むつもりはなかった。はっきり言って、そこまでしっかりと覚えてる訳ではなかったから。今頃、オルソラ＝アクィナスはローマ正教に暴行を受けているはずだ。はやく急がねば!!　などと思っている内に教会まで到着する。
「……この教会か？」
「あぁ、多分」
そして、その教会をバンッ!!　と開け。中にいるシスター達が全員こちらを驚きながら見る。そこに居たのは、ボロボロのオルソラとそれをやった張本人のアニェーゼだ。
「いやぁ、上条の右手って本当に反則な」
「ま、こういうことに限れば、だけどな」
シスター達はザワザワと騒ぎ出す。そこでリーダーであるアニェーゼが最初に切り出す。

「ただのド素人がなんで……とは思っていたんですがね？　『何か』があるみたいですね」
「……一度聞くけどよ。もう、誤魔化す気はねぇってわけか？」
　上条が言うと、アニェーゼが若干の冷や汗を掻きつつ言う。
「この状況を見て、まだ、そんなことが言えるんですね？　イギリス清教は逃げ帰っちまったみたいですが、アンタ、この状況を見て何するかわかってますよね？」
　上条が一呼吸おいて、言う
「ああ、わかってるよ」
「だったら」
　と続く言葉は無かった。そのまま上条が走り出し、思い切り殴り飛ばす。とっさに持っていた杖でガードをするが、そのまま後ろのシスター達が受け止める。
「き、さま……何の真似だ！　これはぁ!!」
　アニェーゼが叫ぶように言うが、上条は睨んだまま、言い放つ。
「何をすべきか……だと？　助けるに決まってんだろうが!!」
（こういうの素で言う所がもう、凄いよね。俺は無理だわ）
　そんなことを考えながら、戦いが始まろうとしていたが、直後、炎がこの教会を襲う。
「まったく、勝手に始めないで欲しいね」
「…イギリス清教!?　ア、アンタがやってることがわかってんですかッ!?」
「あぁ、わかってるさ、その前にオルソラの胸を見てみたまえ」
　そうだ、上条はオルソラを見て思い出す。上条はオルソラに十字架をつけてあげた。それが結果として、オルソラをイギリス清教にしたのだ。今の彼女はローマ正教ではなく、イギリス清教。つまりここでステイルが入ってこようが、問題にはならないのだ。
　そして、それをきっかけに続々と人が入ってくる。インデックス。天草式にアイテムの面々。
「なんで、お前達が来てるんだよ？」
「超たまたまですよ!!」

「あぁ、ていうかなんか文句あるのか？」
「ありません！　はい！」
こうして、全員集合ということだ。誰もがオルソラ＝アクィナスを助ける為に動こうとしていた。

様式美というヤツだろうか？

今回することは至って簡単、だと思っていた。しかしやってみるとこれはこれでいろいろ大変、大変、大忙しという感じである。まずはアニェーゼ部隊の数も凄まじく、こちらの方が明らかに不利だ。それでもインデックスが詠唱を使ったり、上条がアニェーゼと戦ったり、天草式やアイテムも強力だった。

そして一つ思ったことが雪旗にはあった。

（アレ？　俺ってもしかして、不必要？）

いや、それならばそれで問題はないのだが、やることが無く手持ち無沙汰なこの状況があまりに彼にとっては、嬉しくない状況だ。まるで邪魔者扱いされているような、そんな状況を面白がる人は居ないだろう。そのまま彼は適当にどこかで手伝いでもしようかと思い、教会に向かった。上条とアニェーゼが応戦している。アニェーゼが杖で地面を突付くと、上条にダメージが加わる。

「ぐっ！」

しかしダメージ自体はアニェーゼの筋力に依存するモノなので、ダメージ自体はそこまで高くないのだろう。上条は即座に右拳を握りこみ、そして、一発を放つ。

「キャァ!?」

そのままバウンドしながら、5メートル程ぶっ飛ばされる。雪旗は素直に思った。

（容赦ねぇ――!!?）

ほとんど、観客状態の彼に対して、麦野が叫ぶ。

「何してんだ!!　役立たず！　さっさと仕事探せやァァ!!!」

恐ろしい声が聞こえてきたので、そのままビーンッ!!　と体が強張る。そして教会に残っていたシスターさん達と戦うハメになった。シスターさん自体はそこまでの強さではないので、軽々と、倒すことが可能だった。数はざっと4人程。

全員を容赦なくぶん殴りながら、彼は思った。

（俺、上条とやってること変わらないじゃん……）

そんなことを思いながら、全員を倒し終わり、上条も傷だらけのまま、戦いが終わった。後始末などはステイル達がなんとかしてくれたそうだ。こういう時の役立ち方があるんだなと思いながら、上条の病室に行く。

すると神裂が居たのだ。

「……あれれ？　お邪魔だったかにゃー？」

これを言ったのは雪旗ではない、後ろに居た土御門だ。

「お前は少し空気を読もうぜ？」

「何言ってるにゃー。雪っち？　俺はいつも空気読みまくりぜよ？」

「……あぁ、そうだな……」

おそらく何を言っても無駄なのだろうと悟った雪旗。そして土御門はさらにぶっこむ。

「それで、ねーちんは一体何をするのかにゃー？　もうここまで来たら、やるとこまでやらなきゃにゃー!!」

「お前、絶対に面白がってるよね？」

「そんなことないぜ……よ」

そんな笑いを堪えながら言う土御門だったが、ねーちんもそこまで言われて、言われっぱなしでもない。

「つ、土御門!!　あなたには関係ないことでしょう!!!」

「ほら、ねーちん怒っちゃったよ」

「何をさらりとねーちん呼びしてるのですか!!　雪旗硬地!!」

「えぇ？　土御門以外には呼ばれたくないの？」

本気で困惑した雪旗だったが、ボンッと顔が赤くなるねーちんこと神裂火織だったが、土御門は真顔で返した。

「いや、俺には義妹がいるから……すまんぜよ。ねーちん」

これにはさすがにブチ切れたのか、ねーちんこと神裂火織が立ち上がる。そしてそのまま凄まじい怒気を放ちながら。

「誰がッッ!!　雪旗硬地ィィィ……!!!」

「俺が悪いのか?!　いやいや、俺は悪くない。本当に、この場合はガチで……!!」

しかし、そんな言葉に耳を貸さずに彼女は神裂火織は放つのだ。猛

烈な聖人キックを
「ギャァッ!!?」
強烈な一撃を喰らい、四肢がもげたのではと思うほどだったが、五体満足のまま、彼は今日という一日を終えたのだ。

大覇聖祭。燃え盛る炎

今日は何の日でしょうか？　答えは大覇星祭だよ。大覇星祭。言ってみれば、学園都市の体育大会のようなモノだ。外の人間を訪問させて、外の人間達にいろいろ教えるのが、確か狙いだったはず。

その日、雪旗は面倒ごとが一気に降り注ぐと知っていた。といっても、自身が関わるのは、金髪巨乳姉さんの追っかけだけにしようと思っていた。

オリアナ＝トムソン。ぶっちゃけあまり関わりたくない人物だが、仕方ない。

「……はぁ」

学校の外で学校Ｔシャツに短パンの格好している雪旗は特に何も考えずに、目の前の脅威を理解しようとしていた。

「雪旗硬地!!!」

そんな大きな声で呼ぶのは、豊満な胸と少しおでこが広いのが特徴的な女の子。吹寄制理。ぶっちゃけ苦手なタイプではある、委員長キャラと呼べばいいのだろうか、実際の委員長は違うが。しかし実行委員をやっているか。と思い出す。

「こんな所で何をしているの!?」

「いいや、サボタージュしてやろうかと」

「サボろうとしていただって!!?」

「は、はい。まぁ……」

ポキッポキッと指の音を鳴らしながら、近づいてくる。

「ほぉ、私を目の前にして、そんなことをできると思ってるのかしら……？」

「ひっ……ま、待てよ。ほ、ほんの冗談というか、なんというか、あ！　ほら、上条が来たぞ!!」

と上条に罪というか、なんというか、面倒事を押し付けようとするクズ雪旗は心の中でこんなことを思っていた。

（フハハ!!　上条の所に行けば、おそらく俺が責められることは消えるだろう!!）

クズである。
「上条当麻は後でいい。それよりも、貴様がしっかりと参加するかの方が重要だ!!」
（え??? 勘弁してくださいよ。吹寄さん。俺はしっかりやりますって）
口には出さずに弁解する。アホの雪旗である。
「それで？ どうするつもりなのかしら？」
「やらせていただきまーす!!」
そんなこんなで会話を済ませ、吹寄は上条の元へと行って、いろいろ会話をしたら、最早例のごとくというべきか吹寄はラッキースケベの餌食になったのだ。ちなみに水を上から掛けられ、水浸しの状態である。
すかさず青髪ピアスが叫ぶ。
「さすが、カミやんや……あのカミやんにはついに対カミジョー属性すらも、突破するだけの力がァ!!」
もうなんというか、好き勝手である。
「……タオル貸そうか？」
雪旗がそう言うと、それで顔を拭く吹寄。
「ありがと」
そう言って、渡された。
「はぁ、上条さんよぉ……」
そう言って、呆れつつ言おうかと思ったら、上条の見た先に小萌先生が居た。それと嫌味そうな先生。
「まぁ、私の生徒があなたの生徒を完膚無きまでに叩き潰してさしあげますよ」
そう言って、去っていた先生。それを聞いた小萌先生の頬には涙が伝っていた。
「なぁ、みんな……もう一度だけ聞く……」
小萌先生を見た、上条がみんなの前に立ち。やる気なさげなみんなの前で決意したように言う。
「本当にやる気がねぇのか！」

全員。やる気が十二分に出ている状況である。あんなのを目の当たりにしたら、誰もが本気を出すだろう。燃え上がっている状態であった。

「……」

後ろから炎みたいのが見える、と思っていた雪旗だった。

サボり魔だったりしたのだ

「うらァァァあああああああああああ!!」

雪旗は全速力で走っていた。ただ、走る。もちろん向こうからは異能の力が束になって、襲い掛かってくるが、肉体強化（インフォースボディ）を使って、ジャンプしたり、避けたりと、いろいろ役立った。

「どりゃァァァあああああああああああああああッッ!!」

ただ、叫んでるだけで結構の人達が怯える。

「ゴラァァァあああああああああ、舐めてんじゃねぇぞオォォおおおおおおお!!!!」

結果としては勝った。全員がボロボロの中、見事勝つことができた。小萌先生は泣きながら、やりすぎですと言っていたが、全員は清々しい気持ちでいたとさ。

「あぁ、疲れたぁぁ……ッ!!」

悲鳴みたいな声をあげたら、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。何を隠そう、彼女らである。なぜ居なかったのか気になっていたので、ここで問い詰めようと思う。

「おい、お前ら二人！　なんで、競技に出なかったんだ？」

その二人とは勿論、麦野沈利（むぎのしずり）と滝壺理后（たきつぼりこう）である。

「あぁ？　ああ、めんど……場所がわからなかったんだよ」

「……」

黙ってうなずく滝壺と明らかに嘘をついている麦野。しかしここでそれを問い詰めたことをしても、待っているのは『死』だ。つまりここでは、何も言わないという選択が正解ということになる。

「そーですかー」

若干棒読みになってしまったが、別に構わないだろう、そんなことを気にする連中でもないし、それよりも、今回は自分が大分活躍できるのではないのかと思っている。

なぜなら、追いかけっこだからだ、どう考えても有利でしょ、この能力を使えば一瞬である、などと思っていると軽く睨みつけられる。

「な、なんだよ？」
　若干怯えた感じで言っているが、実際怖いのだ。だって一度殺害されているし、それに『暗部』という組織をまとめてたリーダーという事もあって、気迫が違う。おそらく『闇』という部分に浸かっていると勝手にそういう迫力というモノがついてしまうのだろう。
「いいや、なんでもないけど」
　これを聞き、自分の恐怖は完全に気にしすぎという結果に導かれたのである。そもそも、最近はあまりやんちゃもしなくなってるし、そこそこ『表』の世界にも慣れてきているのだろう。はじめは困惑というものがあるものだが、それでも時が過ぎれば、慣れるモノなのだなぁ、と雪旗は思っていた。
「ま、いいや、今何時だ？　次の大玉転がしはお前ら絶対に出ろよ……おい、こっち見ろよ」
　呆れたまま、頭を無造作に掻く。どうやらコイツらは意地でもサボるつもり満々のようだ。絶対にさせるか！　なんていう感じにもならない雪旗はそこまで気にもせずに適当に見送った。

　そのまま二人とは別行動を取り、歩いていると、そこに居たのはインデックスと上条当麻であった。おそらくご飯関連だろう。最近なんとなく、そういうのが察知できるようになってきた。
　近づいていこうと思ったら、後ろから猛スピードで何かが横切った。
「ん？」
「見つけたわよ!!　私の勝利条件――――ッッ!!」
　ビューンッッ!!　という擬音でもつきそうな程のスピードで御坂が上条を連れ去った。噛み付こうとしたインデックスは地面にダイブしている。
「なんか、凄い光景だったな」
　インデックスに近づき、事情を聞くと、どうやらパレードが始まるようで、その向こうにある屋台エリアに行きたいようだ。
「そーか、西に三キロ……」

飛び越えりゃいいんじゃねえか？　と思った、そう思ったと直後だった。インデックスを抱き上げて、少し助走をつける。
「何？　何？」
困惑しているインデックスを無視して、思い切り飛んだ。そこまで距離は無く、能力を使えばすぐに辿り着く場所だった。
「っと」

見事に着地したまま、屋台エリアでインデックスに適当に何か買ってあげた。ちなみにこの後すぐに警備員（アンチスキル）が来て、厳重注意を受ける雪旗だった。
「むやみやたらに能力使っちゃだめじゃん！」
「すみません」
雪旗がペコペコしている間。腹ペコシスターは満腹シスターになっていたので、満足そうな顔をしていた。
「はぁ、三キロ走るか」
インデックスを抱え、次はバレない程度に加減して、少しだけいつもより早く走っていた。こういうこともできるのかと少し能力についての知識がついた。
結局ずっと走りっぱなしで、なんとか移動することに成功した。
「疲れたぁぁ……ん？　あ、そろそろ時間か、じゃ、インデックス、俺、大玉転がしあるから、もう行くわ」
「うん。頑張ってね。こうじ！」
「おう！」
そのまま、疲れた体に鞭打ち、また走り出す雪旗だったが、途中でステイル＝マグヌスと土御門元春（つちみかどもとはる）を見つける。穏やかじゃない状況だと言うのは一目瞭然だろう。
（はあ、楽しい時間は終了ってか？）
そんなことを思いながら、二人に近づいていった。

『刺突杭剣』

「魔術師が侵入してるって？」

雪旗が言うと、土御門はいつも感じではなく、少しトーンを下げた『裏』の時の声色で話し出す。それでもふざけた口調のままなのだが、もはや癖なのだろうか、と思っている雪旗。

「そうだぜい、今は警備が甘い、ということは魔術師だって侵入しやすい。そこを狙っての犯行だにゃー」

そう言って、ステイルは煙草を吹かしながら、続きを言う。

「侵入したのは二人、ローマ正教のリドヴィア＝ロレンツェッティと運び屋のオリアナ＝トムソンだ」

（あぁ、居たなぁ……リドヴィアだか、なんだか……うん。まぁ一発キャラか……）

そんな無慈悲なことを思っていると、土御門がその続きを話す。というかどちらか一人が簡潔に話してくれないか？　と思ってるが口には出さないので、土御門が言う。

「そこで、ある霊装を取引しようとしてるんだにゃー」

「こんな所でか？　学園都市ってオカルトで一番遠い場所だぞ？　わざわざここでやるなんて何か理由でもあるのか？」

上条が言うと、そこで土御門がため息を吐きつつ言う。

「だからこそだにゃー。ここは学園都市側と魔術側、お互いに手の出しにくい場所なんだぜい、ここは」

「動けるのは、学園都市にいる君や上条当麻の知り合いだけってことさ」

どうやら事態は割りと面倒なことになっているようだ。それで思い出したかのように言う雪旗。

「あ、神裂は？　神裂だったらすぐに終わらせれるんじゃないのか？」

「神裂は使わない……。今回は特にね、何しろ取引される霊装が霊装だからね」

「あ？　何か、今回取引される、その霊装は聖人の弱点とかそういうのか？」

「勘が鋭いにゃー。さすが雪っち。そう、今回取引される霊装の名前は『刺突杭剣(スタブソード)』。ありとあやゆる聖人を一発で葬れる霊装らしい」
どうやら、今回は思ったよりも面倒事が沢山あるようだ。それでもやはり目的はたった一つ。オリアナをぶっ飛ばす。ただそれだけだ。
大玉転がしという競技を終了させ、土御門、上条、雪旗の三人でバスの中に居る。
「十字架に掛けられた神の子はどうやって殺されたか知ってるかい？
カミやん。雪っち」
「確か……磔にされて……」
上条が言ったら、土御門がそれを被せるように言う。
「刺殺だよ。刺突杭剣(スタブソード)ってのは処刑と刺殺の宗教的意味を抽出し、極限まで増幅、凝縮、集束させた霊装ですたい。普通の人間になら、何の意味もないが、聖人にだけ一撃で葬るぐらいの威力を誇る」
「そんなモン取引して、一体何に使うんだよ？」
雪旗が疑問そうに聞くと、土御門が答える。
「聖人ってのは、魔術師の世界では、核兵器に近い意味を持つ。それを使って戦争でもしたいんだぜい」
「けど、聖人以外にも魔術師は沢山いるんだぜ？　神裂がいなくても、他の魔術師達でなんとかなりそうなモンだけどな？」
上条が言い、土御門が真剣な表情のまま、続ける。
「今回も問題はそこじゃない。勝てる、勝てないじゃなくて、勝てるかもしれないという所だにゃー。そんなモンで起こっちまうんだぜい。戦争ってのはよ」
そう言い、上条は思い出したかのようにインデックスの名前を出したが、禁書目録が騒動の中心ということが魔術師達で思われており、禁書目録が動き出した瞬間。魔術師達が一斉に押し寄せて来るらしい。
(思ったより、事態は面倒な方向に行ってたんだな……)
雪旗が自分の考えの甘さを振り払い、再度、確認する。ここはやはり一筋縄ではいかないと。

運び屋　オリアナ＝トムソン

やることは山積みである。そして、ひとまずは動きだす。オリアナを探す為に走ってばかりの雪旗だが、簡単に見つけれるはずもなく、そんなこんなでずっと走りっぱなしである。

辺り一面、大覇聖祭一色という雰囲気でこんな場をぶち壊そうとしてる連中には少しばかり痛い目にあってもらわないと困る。ひとまずやることと言えば、大本を叩くのが一番早いのだが、今回の場合はどこにいるのかがわからない為、枝の方からやるしかないのだ。運び屋という職業である彼女はおそらく、撒く技術が人一倍あるだろう。

「くっそ……疲れた」

息を軽く切らしながら、横腹を押さえる。息を整えつつ、再度走り出した。

「見つからねぇな。どこだ？」

そうこうしていたら、上条を見つけた。

（あ、上条か？）

そう思ったら、その先にオリアナが居た。上条が見つけたということだ。しかしどうやらオリアナの方は上条に気付いてるようだ。それに上条は気付いていない。このままでは撒かれるだろう。

（さっさと捕まえたいが周りに人が多すぎて、無理だな……）

人ゴミの中、オリアナに気付かれないようにする。ついでに上条にも気付かれないようにしなければならない、もしも気付かれたら、仲間認識され、絶対に自分からも隠れるようになってしまうだろう。面倒ごとはごめんなので、二人にバレないように彼はずっと付いていく。が、しかし唐突に勢い良く走り出す。通行人が居るので、能力も使えない。そのまま走り出すのを追いかけようとしたが、追いつくことができなかった。

「チッ、逃げ足の速いヤツだな……さすが運び屋か」

「なんだ、雪旗もいたのか？」

上条が言うと、雪旗がいつもの調子で言う。
「あぁ、なんつか、アイツ。やっぱりプロだな」
多少、トーンが下がった感じで話す。別に格好つけている訳ではない、真剣に話す時など大体こうなってしまうものなのだ。
だから、別に左目が封印されてるとか、右腕に何か宿してるとかではない、実際この世界だと普通にありそうな話ではあるが。

場所は移り、そこはバスの整理場だったのだ。
「ったく、面倒な場所に移りやがって」
頭を掻きながら、雪旗はうんざりした調子で話す。
「自立バスの整備場って訳か……」
土御門の暗部バージョンの声が響く。そのままバスの整理場の中へと入り、走る。雪旗達が進んでいると何かを踏む。
「トラップか!? 伏せろカミやん!! 雪っち!!」

とっさに雪旗は横へと飛び込もうする。するとそれよりも先にステイルが上条を前へと押す。
「君の出番だろう」
「うわ!!?」
とっさに右手を構えて、トラップを破壊する。
「ナイス! 上条!」
「ふざけんな!」
「いいや、我ながらなかなかのチームプレイだね? 役割分担ができているのは動きやすい」
上条が睨みつけ、ステイルの方へと詰め寄り、胸倉をつかむ。
「お前なぁ……!」
「だから、自分の役割を果たしてこい!」
そう言いながら、押し返されると、直後トラップが発動する。それを右手を使って破壊する。どうやら上条はそういう役割のようだ。
トラップを破壊した瞬間、ステイル、土御門、雪旗は進む。

「ちょっ!?　待てって！」
すかさず上条もついていく。
二人はバスへと隠れながら、状況をうかがっている。
「ステイルはルーンのカードを配置して待機しておいてくれにゃー。オレは運び屋を抑える」
「了解した」
「カミやんと雪っちはどうする？　ここに残っていた方が安全だが……？」
「僕としても、そちらの方が安全だと思うけどね。僕の身が。ソイツはいらない」
「ああいう感じなの？　嫉妬？　嫉妬でしょ？　絶対」
そんなことを言いながら、結局三人はオリアナを追いかけることになったのだった。バスの整備場から出て行くまでにも、何度もトラップがあったが、それをすべて避ける。
「これは囮だ。いちいち構ってたら、逃げられちまうぜい」
「んなこと言われても!!」
「俺は簡単に避けれるけどな？」
結局、すべてのトラップを避け続け、やっとバスの整備場から出て行くことができた。すると、直後、地面の波のようなモノが襲い掛かってきた。
「上条ォォォおおおお!!」
「おう!!!!」
雪旗が叫ぶとそれに答えるように上条が地面の波を破壊する。
「うし！　行くぜい!!」
しかし、追いついたと思ったが、完全に逃げられてしまったようだ。もう姿すらどこにも見当たらなくなってしまった。
「どこ行ったんだ……？」

雪旗がそう言ったが、土御門が壁に貼ってあったモノを剥がし、一言。
「追跡封じのオリアナ＝トムソンか……ふざけやがって!!」
一度、バスの整備場へと戻り、オリアナの場所を把握しようとする。ステイルがルーンの魔術を使い、何かを発動させた。それ自体を覚える気はさらさら無かった雪旗だったという。
その魔術を使った瞬間、まるではね返されたかのようにステイルがもがき苦しむ。
「カミやん、ステイルを殴れ！」
「え!?」

しかし、その指示に従い、上条はステイルに触れると、直後、魔術が破壊される。
「ハァ、ハァ……なんだ？　今のは……？」
「おそらく、ステイル個人の魔力に反応して自動的に作動するような迎撃術式が組まれていたんだろうさ」
「ってことは、ステイルはオリアナに対して、魔術は使えないってことか？」
「まったく、厄介なモノを組まれたモノだ」
そう言いながら、立ち上がる。どうやらもう回復したようだ。
「さすがは追跡封じというべきか……」
そう言いながら、彼は懐からタバコを取り出し、吸う。どうやら今回の敵は想像以上に厄介だったようだ。

『速記原典』

「速記原典（ショートハンド）というべきか……」

土御門はそう言う、どうやら彼女が扱っていたのは、使い捨ての原典であったようだ。

「まずは自動迎撃術式をぶっ壊して、ステイルに魔術を使えるようにする」

「それをしている間に探索外に逃げられる可能性は？」

「そんなことをするなら、初めから自動迎撃術式なんて組まないんじゃないかにゃー？」

タバコの煙を吐き出す。どうやら納得したようだ。そして土御門が言う。

「なんでもいい、ステイル。魔術を使え」

「なっ!?」

上条が驚いたが、ステイルはなんでもないような顔で了解する。

「円陣を組んだ。これでステイルが魔術を使えば、相手を逆探知できるようにした」

「そんなことをしたら、ステイルがもう一度！」

上条が反論したが、土御門の方がわざとらしく驚いた風に言う。

「一度？　何言ってるんだ？　オリアナの場所がわからなければ、何度でも行うぞ？」

「てんめぇっ……!!」

ここで、雪旗が止めに入るように言う。

「おい、上条。やめろ。そもそもステイルだって、この程度のことはできるだろ？」

「その通りだ」

「オーケー。それでやろう。一つ言っておくぞ、絶対にオリアナの場所を割り出せよ？」

「わかってるにゃー」

円陣の中へと入る。そして、ステイルは言う。

「上条当麻。僕は今、君がここに居るというのが気に食わない。どう

して彼女の傍に居てやらなんだ。その所為で顔を曇らせたら、全部君の所為だろう」
そして、魔術を使う。
「ぐがァァァァあああああああああああああああ!!!!!」

場所は変わって、インデックスと小萌先生。なぜかインデックスはいつもの修道服ではなく、チアリーダーのような格好をしていた。
「うぅ……せっかくお着替えして、とうまに見せてあげようと思ったのに……」
またまた場所は変わり、バス整備場。
「円陣に反応ありとカミやん。地図持ってないかにゃー。ああ、ＧＰＳの地図があったかにゃー。それならこっちで」
「土御門ッ!!! どうしてそこまで冷たくなれんだよ!? コイツが誰の為にここまで！」
胸倉を掴みながら、上条は声を張り上げるが、土御門が反論するように返す。
「カミやん。ステイルだって魔術師、耐性ぐらいはあるにゃー」
そう言いながら、土御門から血が滴る。
「土御門……お前……！」
「これもしっかりと魔術って訳だにゃー。飛んでくる術式の魔力に反応して距離と方角を教えてくれる……魔力はきちんと使ってるにゃー。確かに俺がもっときちんと魔術が使えれば、ステイルはこんな風にはならなかった……認めてやるよ。だから絶対に俺は速記原典を破壊する。そして、オリアナも捕まえて、刺突杭剣の取引も絶対に成功させない！」
「カミやん。地図。北西３０２メートルに何があるか知りたい」
「あ、ああ」
そう言い、携帯を開き、ＧＰＳを使うと、その場所に驚く。
「中学校……」
雪旗がゾっとした。その場所は絹旗が居る中学校だったから。
そのまま、三人はその中学校へと向かう。当然、この格好のまま

じゃ入ることができない。もうそろそろで競技も始まる。
「もう、こっそりは入れないにゃー……選手としてまぎれるしかないにゃー。カミやん、雪っち。最も簡単な魔術儀式って何か知ってるかにゃー？」
「なんだ？　突然」
　雪旗が言うと、土御門が言う。
「触れることだにゃー。自動迎撃術式は触れることで発動する。つまり……」
「一般人に被害が!!?」
「その通りだにゃー。ということで！」
　そう言って、二人を突然押す土御門。そこは汚い水溜りだった。
「ぐげぇ……ッ!?」
「ぶべぇ……!?」
　二人が同時に水溜りへと突っ込む。そして土御門も飛び込む。
　会場の前には警備員が居り、嘘をついて、もぐりこむことに成功した。
「おい？　この格好じゃさすがに……」
「なぁに、保健室には代えの体操服があるってのは相場なんだよ」
「無かったらどうするつもりだ……？」
「その時はその時だにゃー」
　そんなことを言いながら、保健室に行き、代えの体操服があったので、助かった。そのまま競技へと紛れ込むことに成功した三人だった。

玉投げ

常盤台中学。今回。魔術が仕掛けられてる場所である。そして不幸にもというべきか、絹旗が居たという。

「うげぇ……速記原典（ショートハンド）はどこに仕掛けられてるんだ？」

雪旗が言うと、土御門は上条と雪旗に役割分担を言う。

「雪っちはできる限り暴れててくれにゃー。カミやんとオレはその間に速記原典（ショートハンド）を見つけるですたい！」

「うげっ!?　目立つ役割だなぁ！　おい!?」

雪旗が嫌々そうにその役割を果たす。

「位置に付いて、よういはじめ!!」

始まった。始まってしまった。すぐさま向こうから恐ろしい能力が畳み掛けてくる。向こうは全員が強能力者（レベル3）以上、それを意味するのはわかっているだろう？　恐ろしいィィいいい!!　などと考えてると、そのまま能力を使ってくる。それをすべて避けつつ、近くの玉を拾いまくりながら、一気に投げ飛ばす。

「うらァァァあああ!!　舐めてんじゃねぇぞオオォおおおお!!」

そしてもちろん、そんなことをしてたら、バレてしまうものである。相手はもちろん絹旗である。

「ぎゃァァァあああああああ!!　やめてぇぇぇ!!!」

絹旗が笑顔で窒素装甲で攻撃をしてくる。それも尋常じゃないスピードで、なんとか避けることができているのだが、彼女は笑顔で尚も続ける。

「超何してるか、説明できますか？」

「できません？」

「超殺します」

一瞬で恐ろしい程の衝撃が襲い掛かる。絹旗は別に本気で殺そうとしている訳ではない、と思っている雪旗だ。だがしかし、それでもあそこまでの攻撃をされたら、普通に気絶するかもしれない。それは

かなりのタイムロスになるため、できる限り避けたいことだ。
だから、一瞬にして、違う場所へ走り出し、逃げるようにそして注意をひきつけるように行動する。

「やめてくれよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉおおおおおお!!!!」
肉体強化(インフォースボディ)という能力を持ちつつも、電気を操ったり、風を操ったりする能力者と対等に戦うのは至難だ。よって考えながらも、隙をつくというやり方が一番あっている。
しかし、今回は別に戦うわけではない。よって、やることは簡単。ただ騒ぎながら、逃げればいい。
「はぁ、本当に今回はキツい……相手が相手だけに」
そんなことを言いながら、ふと周りを見回したら、上条が御坂を押し倒している所を発見する。
(何してんだ? さっさと見つけてくれないかな……フラグを立てる暇があるなら)
そう思ってる時だった。彼の近くの籠の棒のすぐ近くに吹寄がおり、今にも棒に触ろうとしていた。彼は知ってる。あの時、あの棒に触った吹寄がどうなったか。彼はとっさに能力を使い、すぐさま吹寄を棒から離す。
「な、何する気よ!! 雪旗硬地! 離せぇぇぇ!!」
「別に何もしねぇよ!! 心配するな!」
そう言い訳っぽく言い、雪旗は叫ぶ。
「上条! 土御門! こっちだ。この棒だ!!」

二人はすぐさまこちらに近づき、土御門が確認して、上条の右手でうち消す。今回は被害がでなかったので、ホッとする雪旗。どうやらタイミング良く、試合も終わったようだ。しかし雪旗は気付く事ができなかった。その後くる悲劇を。
「ねぇ、貴様達は一体何をしてるよ? いくらなんでも、勝手に中学生と共に試合にでるのはダメだってわかるわよね!!!」
と吹寄が。

次に絹旗が言う。
「超気持ち悪いですよ、雪旗。一回超殺します」
「お前が言うと洒落にならねぇんだよォォォおおおお!!?」
そんなこんなで絹旗から全速力で逃げることになってしまう雪旗は叫ぶ。
「あとで合流するから!!　電話でな!!」
そう言い残し、全速力で絹旗から逃げ出す。それを追いかける絹旗。中にはそれで喜ぶような人もいるかもしれないが、彼はそんなアブノーマルな趣味は持ち合わせていないので、全速力で逃げる。

オリアナｖｓ上条当麻

「様子はどうかにゃー？」
　土御門が通話してるのはステイル＝マグヌス。速記原典（ショートハンド）を上条が破壊したことによって、ステイルは魔術を扱うことが可能だ。ステイルは探索魔術を使い、二人にオリアナの場所を伝える。
　それから場所を転々と変えるオリアナをなんとか追い詰める。
「やっと、追い詰めたぜ？」
「悪いけど、そう簡単に捕まる訳にもいかないのよ」
　そう言い、単語帳を咥えて、紙を一枚取る。その瞬間、土御門が突然倒れこむ。
「土御門!!!?」
「再生と回復の象徴である火属性を青の文字で打ち消しただけ、早くその子を解放しないと、大変な事になっちゃうかもね」
「てんめェェェェェェェェ!!!」
　そのまま、戦う。上条が先手を取る。殴りかかろうとするが、突然、氷の壁が現れる。もちろん上条の右手でそんなモノは粉々に破壊する事が可能なので、すぐさま破壊する。
「お次は影の剣」
「!?」

　黒い何かが影に交わった瞬間に爆発のような衝撃が上条を襲い、上条はぶっ飛ばされてしまう。
「ぐあぁ!!?」
（まずいっ！　さっきの術式を使われたら、終わりだ！）
　しかし、そんな事を思っている上条の事など露知らず、彼女はこんなポリシーを口にする。
「お姉さんは一度使った術式は二度は使わないの」
　そうして、次々と違った術式を使っていく。上条は徐々に追い詰められていく。しかし何度も何度も、攻撃を繰り返され、上条は衰退していくのだが、それでも上条は立ち上がる。

「動いたら、死ぬわよ？」
次の術式が来る。一瞬だけ上条は硬直してしまった。恐怖が中で渦巻いたのだ。しかし上条は踏ん張る。ここで自分だけが甘えていてはいけないと思う。
「吹寄が今日まで頑張って準備してきた大覇聖祭が滅茶苦茶になりそうになってるんだぞ……こんなことで止まってる場合じゃねぇだろ！　上条当麻!!」
その一言を言い放ち、自身を奮い立たせる。
上条が一歩、また一歩と歩いていく。さすがにそれは予想できなかったのか、彼女自身少し気圧（けお）され気味になるが、それでも単語帳の紙を吹く。
「こ、この、お馬鹿さん！」

魔術が発動するが、上条は気にしない。ただ一直線に走る。そして上条はその術式を破壊する。また別の術式を使うが、それも破壊し、上条はついにオリアナに一撃を喰らわす。
「はあ……土御門！」
すぐさま、土御門の方を駆け寄るが、オリアナが立ち上がる。どうやらあまり効いていないようだ。そして術式を使い、逃げる。
刺突杭剣（スタブソード）はそのまま落としていった状態で。
「待て！　土御門は!!」
「その効果は二十分。じゃあね。心配性の能力者くん」
そう言い、見事に逃げ去られてしまった。その後、調べてみた結果。刺突杭剣はブラフ。本当の目的は別にあるということがわかったらしいのだ。
本当の目的は使徒十字だったらしい。ペテロの墓の上に立てられたと言う墓標で、大理石でできた十字架。突き刺した土地をローマ正教の支配下に置いてしまうという効力を持つ。
こんなモノを使われては学園都市が崩壊してしまう。
結局、一旦は別行動になったようだ。
「……どうすりゃ、いいんだ……？」

悩んでも答えなど出るはずもなかった。

雪旗は本気で戦うのだ

雪旗は全速力で逃げていた。絹旗は殺意こそ無いが、完全に全治一ヶ月以上の怪我を負わせる気満々である。はっきり言って、そこまでの怪我を負わせられても、不死身なので、回復力はかなり早いのだが、痛いのは嫌というのが事実である。

結局、言い訳をしまくったら、なんとか怒りは収まってくれたようで、近場の飲食店に二人で入っているという状況である。一体なぜこうなってのか、理解できないが、ひとまずは腹ごしらえだろう。そろそろお腹も減る頃だし。

「何食べる？　お前の活躍に免じて、奢ってやってもいいぜ？」

「超マジですか!!　じゃあ、これとこれ!!」

「はいよ。んじゃ俺はどれに……」

ピンポーンとボタンを押す絹旗。

「はえぇよ!!?!!」

まさか、ここまで常識知らずとは、と思いつつ、これもこれで嫌がらせの一種かもしれない、と諦める。店員が来るまであと二十秒も掛からないだろう。限られた時間で一気に思考を巡らせ、決める。こういう店は食べ物の種類が多い、だがその中でどれだけおいしそうなモノを選出できるか、それが重要である。まあ、大した差など実際には無いかもしれないが。

結果としては、店員が来るよりも先に決める事ができたのでよかった。

そして食べ物が来るまで一先ず、暇な時間がやってくる。雪旗自身は別に待っていられない人間ではないので、黙って待つ。しかし、向かえに座っている少女はどうやら黙って待っていられないようだ。

「雪旗。超ダメですね。こういう時は女性をエスコートしなくちゃ超いけないんですよ？」

「そーですか。お嬢様は一体何がお望みなのでしょーか？」

「むむっ！　超お子様扱いしてますね!?　私はこれでも大人な女性で

すよ！」
「そーか、大人な女性か」
　ちょっとバカにしたように、見る雪旗にさらに気分が害される絹旗。どうやらプライドだけは一人前のようだ。しかし何がきっかけで窒素パンチが来るかわからないので、できる限り激昂はさせないでおく。

「はいはい、冗談ばかり言ってないで、飯来るまで静かに待ってようぜ？　別にうるさくしてなきゃ我慢できないって歳でもねぇだろ？」
「やっぱり私を超バカにしてますね!!」
「してねぇって」
　そんなやりとりをしていたら、向こうから声を掛けられる。しかも名指しでだ。

「硬地!?　こんなところに居たのか！」
（……誰？）
　まったく見覚えの無い人物だった。しかし、名指し、年齢、今の状況を鑑みるに、おそらくこの人は自分の父親である事が予想されるだろう。それに隣には女性も居る。おそらくその人が自分の母親だろう。父親はダンディーな感じで母親はどちらかと言うと、ほんわかーという感じだ。
「どうした？　硬地？」
「え、いや……なんでもねぇよ。父さん。それよりどうしたんだ？」
　雪旗は何食わぬ顔で言う。演技力自体はそこそこ身に付いただろう。そんなすぐにバレはしないと思う。こういうのは堂々としてる方が逆にバレないモノである。
「あぁ、もしかしてお邪魔だったかなー？」
「なっ……！」
　自分の父親はこういう話が大好きなのだろうか、まさかこんな話をいきなり振ってくるとは、普通ここら辺は触れないでおくべきだろう。思春期だぞ、こっちは。と思いつつ、雪旗は絹旗を紹介する。

「彼女は絹旗最愛。俺の友人だ」
「またまたー。親にバレたくないからって、嘘はよくないぞー」
　このテンションがはっきり言って、見た目とギャップがありすぎて笑える。しかし状況が笑えない。実の父親から彼女のこういうのを触れられるのは、実際は嫌だろう。それはもちろん雪旗だって例外ではない。だが、絹旗は彼女ではなく友人。彼の中の認識はそうだ。だからこそ、雪旗は淡々と言い放つ。
「だから、嘘じゃなくて、コイツは本当にただの友人なんだって、悪いな絹旗。俺の親がさ」
「そうですよ。あなた。いい加減にしなさい」
「ごめんなさーい」

　もうキャラが掴めない。しかし力関係がわかった瞬間である。おそらくこの中で最も力が低いのは硬地で間違いないが、最も強いのは母親だろう。
「はあ、それで母さんと父さんはどうしたんだ？　この時間帯に来たのか？　来るなら連絡ぐらい……」
「いやぁ、驚かそうと思ってな」
（本当だぜ、まったく心臓に悪い）
　結局、二人と会話してる間、絹旗は間には、入ってこず、何か言いたそうにこちらを見るだけだった。それから料理が運ばれ、二人も同じ席に座り、四人で食事する事になった。父親は相変わらず、雪旗と絹旗の関係を勘繰ってるようだが、本当にそういう間柄ではないので、仕方ない。
（そういや、本名知らないな……）
　両親の本名を知らないとか、とんだヤツだな。と思いつつ、どうしようか本当に困ってる。しかしここで救世主の如く、絹旗が聞く。
「あの、超不躾かもしれませんが、お二人に名前とか聞いてもいいですか？」
「ん、ああ、そういえば君にはまだ自己紹介してなかったね」
「そういえば、そうだったわね」

（絹旗ッッ！！！！　愛してるゥゥゥゥううううううううう！！　超大好きだぜ！！！　これほど、お前に感謝した日はきっと後にも先にもこれが最後だと思うゥゥゥゥううううううう！！）
　と心の中で感謝だがなんだがわからない感情が渦巻いていると、自己紹介が始まった。

「私は雪旗正宗（まさむね）。えっと絹旗ちゃんだっけ。よろしく」
　手を差し出し、握手する。
　そして、次に母親が言う。
「私は雪旗卯澄（うずみ）。よろしくね。最愛ちゃん」
「超よろしくです……」
　なんだが、畏まった絹旗は見たのは初めてで、少し動揺する雪旗。両親の名も知る事ができ、もっと言えば両親と初めての対面だ。少しだけ感動に包まれながら、食事を口に運ぶ雪旗だった。

束の間の休息

「それじゃ、私達は少し出て行くよ、どうやらお邪魔のようだしね」
「まだ引っ張るつもりか……!?」
　両親が余計なお世話をした所為で二人っきりになった雪旗と絹旗。ため息を吐きつつ、雪旗はまた謝る。どれだけ謝れば良いんだと、思いつつ頭を下げる。
「悪いな、俺の両親が……」
「いえ、超良いんじゃないですか？」
「そうか……？」
　どことなく寂しそうな顔をしながら絹旗が言う。それを見て、雪旗は思った。
（そういえば、絹旗って……）
　『暗闇の五月計画』。一方通行の演算パターンを元に『置き去り』におこなった実験だ。そう、絹旗最愛は置き去りなのだ。だからきっと親というモノに特別な感情を抱いてる
　と思われる。雪旗は思い出し、もっと配慮すべきだったと後悔する。
　だが両親とこのタイミングで会ってしまった以上は仕方ないし、取り返しはつかない。だから、雪旗は絹旗の頭をポンポンと軽く撫でるように叩く。
「な、超何すんですか！」
「いいや、お前がなんか元気なさそうだったからさ、どうした？」
　これは誤魔化しだ。本当は事情だって知ってる。だけどもこんな事を突然言われても、きっと迷惑なだけだと言うのは明らかだ。だからこそ遠まわしに、それとなく。
「……超なんでもないですよ。後、たまには許してあげますよ。超これぐらいは」
　と絹旗は笑いながら、言ったのだ。雪旗もつられて笑い、傍から見てると、完全に。
「兄妹だな……」

「超殺しますよ？」
殺気が尋常じゃなかった。そう思った直後だった。店の入り口が開き、ふとそちらに目をやると、そこには上条とインデックスが居たのだ。二人で。しかも、インデックスは何やら、チアリーダーのような格好をしていた。そういえばそんな格好してたな、なんて事を雪旗は思い出していた。それと同時に。
（ここだったのかよ……ってことは……？）
上条達が来たのと同時にそこそこ離れた席に居た上条刀夜（とうや）が二人を呼ぶ。その隣にいるのが上条詩菜（しいな）。その隣には御坂美琴と御坂美鈴（みすず）だ。はっきり言って、気付かれなかったのが奇跡なぐらいだ。いや、美琴はご執心な彼が居るから、他の男なんて見えてないのかもしれない。などと冗談交じりな感じで思っていた。
（さてと、どうすっかな？　このまま二人に会いに行くか？　どうも不自然な気がする。いや、普通に気付かなかっただけなんだけどさ）
誰に言い訳するでもなく、心中で勝手に言い訳を募らせる。
「さてと、そろそろ別の場所に移動すっか？」
「超そうですね。お腹も超満腹ですし」
「太るぞ？」
バゴンッッ!!　と床にめり込みそうになるかと思った雪旗だった。大きな物音を立てれば、当然注目を浴びるだろう。上条は雪旗を見て、一言。
「何してんだ？」
結局、あの集団に入り込むしか無くなったという事だったのだ。

終わらせたい状況

「なんで、こんなギスギスした空間に俺を連れて来た？」
雪旗が軽く愚痴るように上条に言うと、上条は特に何も言わず、笑うだけだ。
「そもそも短髪は一体何なのかな？」
「それはこっちのセリフよ！」
そう、二人は言い合いをしていた。モテる男は困りますね？　と嫉妬と苛立ちが交ざった眼差しを送る雪旗。上条は困った感情しか抱いていなかったが。
「それに、こっちはこっちでさぁ……」
美鈴が何か胸を強調するような格好になると、そちらを見る刀夜。それにキレる詩菜。そう、こちらもこちらで若干ギスギスしている状態なのだ。
はっきり言って、どちらとも関わりたくなさすぎる雪旗にとっては、どちらも安全地帯じゃなかったりする。上条はなんとも思ってないようだが、一体どういうスルースキルなのだろうか、譲って欲しいぐらいである。
別行動中。
絹旗と雪旗。上条とインデックス。それぞれ別々に行動していたりする。絹旗自身、特に行きたい場所も行くべき場所も無いとの事で二人行動してる最中だ。
まあ、こういう時に限ってきっと面倒な何かが来るような感じがしたりするのだが、きっと気の所為だろうと雪旗は思っていた。
「おいおいおい、何してんだ？　二人して」
聞いた事のある声だった。というか、麦野沈利だった。
「ん？　麦野か。その口調どうにかしねぇか？」
「は？　別にどうでもよくないかにゃー？」
（どこぞの誰かを思い出すからやめて欲しい。そもそもそういう口調多くない？　何、流行ってるの？　もしかして俺にもそういう特徴的な口調必要？　俺には決めゼリフすらないよ!?）

と何やら、話が心中で脱線させている雪旗だが、そんな事は知る由もなく、麦野は続ける。
「それよりも、二人で何してたの？」
「ん？　超二人でデートしてたんだぜよ!!　なあ、絹旗っち!!」
「は!?!!　ちょ、超違いますよ!!!!　というか超なんですか、その口調!!」
（なんか、思った以上に恥ずかしいぞ……!!　やめる、もう特徴的な口調じゃないのが、特徴的って事にしよう!!　うん!!）
そんな空間の中、一本の電話が掛かってくる。一瞬で雪旗の目の色が変わる。土御門からの連絡だ。
「なんだ？」
ワーワー言ってる二人から少しずつ距離を取って、別の場所で通話する雪旗。巻き込めない以上、素早くここから立ち去らなければいけない。そんなこんなで、会話をしていると、どうやらオリアナに動きがあったようだ。第五学区の地下鉄のようだ。
一気に駆け抜ける。能力を使い、すぐさま行く。おそらく全員が動いているはず。すぐさま、地下鉄に向かい、移動する。土御門は随時、連絡をくれる。何度も何度も。
なにやら魔術を使い、場所を随時調べているようだ。
「……アイツらどこだ……？」
上条とステイルの二人とは完全に別行動となっている為、土御門は二つに連絡している事になる。なんだか悪い気分になってきた。さっさと二人と合流しようと思う雪旗である。
「……さっさと終わらせるぞ。こんな状況をよ!!」
そんなこんなで雪旗は一気に駆け抜けるのだ。こんな状況をさっさと終わらせる為に。

時間は迫る一方

土御門からの連絡がきた。どうやら聖人が来ると、ハッタリをかまして、場所を誘導したようだ。さっさと行くために走る。

（さ・て・と……さっさと見つけないと、被害が拡大するだけだっての……！）

走る。先程からずっと走っており、さすがに疲れも見えてきているようだ。息を切らしながら、横腹を押さえながら走る。先程何か食ってたのが、ここで来るとは思わなかった。吐き気を抑えながら、走る。

居た。オリアナが完全に油断してるタイミングで出会う事ができた。後ろから急に殴りかかる雪旗。奇襲、不意打ちは卑怯だが、今は気にしてる暇ではないだろう。

「!!」

さすがに気付き、防御態勢に入られる。

「っと、さすがに気付いちゃうか？」

「当たり前で……しょっ!!」

単語帳の一枚を口で取り、吹き出す。凄まじい突風が雪旗を襲う。それに勢いよく押され、一気に吹っ飛ばされる。それだけで彼女は逃げ切ってしまう。街を縦横無尽に走り回り、魔術を使い、姿を晦ます。これが彼女のやり方なのだろう。追いかけたが、すぐに姿が見えなくなった。

「チッ!!　さっさと捕まえてぇのによ!!」

ガンッ!!　と苛立ちで地面を勢い良く踏む。しかし、一旦頭を冷やして、冷静になる。再び走り出し、やっと、上条と合流する事ができた。そして上条と土御門が携帯電話で会話をしている。どうやら、使途十字（クローチエディピエトロ）の発動法はいまいち不明だが、どうやら星座が関係してるという事がわかったらしい。

（たしか……夜空の光がどうのこうのって話じゃなかっけか？　いや、適当な事言ったら後々面倒になりそうだから、やめとくか）

そんな事を思っていたら、インデックスと合流した。偶然に。
「イ、インデックス！」
上条が驚いたように言った。
「とうま、どうしてクラスのみんなと一緒に居ないの？　午後から競技にも出てないよね？　なんで？　こうじも」
ついでな感じで言われた雪旗である。
「……あー。運営委員の手伝いをしてたんだ。あれー？　おかしいなメールはしておいたはずなんだけどなー。と、とりあえず、手伝いが終わったら、すぐに行くから、待っててくれ」
上条も早く戻りたい気持ちはあるだろう。こんな目に遭っていなければ、クラスのみんなと一緒に競技に出ていたんだから。インデックスが納得して向こうに行った後、雪旗が。
「おい、行ってもいいんだぜ？　後は俺達にまかせてさ」
「んな事できる訳ないだろ」
上条当麻という人間はそういう人間だ。近くに困ってる人が居たら、どうあっても、手を差し伸べようとする。かと言って、自身の危機にはあまりにも鈍感な人間なのだ。
「ったく、あんまりインデックスに心配掛けさせんなよ？」
「お前もな。なんか仲良しな女子達が居ただろ？　まったくモテる男は困りますね？」
とおそらく、あのアイテムのグループの事を指してるのだと思うが、訂正しておきたい部分が雪旗にはあった。
「何言ってやがる!?　モテてるなんて勘違いした日にゃ、その日で朝日が拝めなくなるぞ!!?」
が、それを無視して、土御門も言う。
「悪いな、カミやん、雪っちも」
「だから、さっさと終わらせようぜ、こんな事」
電話が掛かる。どうやらステイルからのようだ。電話の内容を聞くと、姫神がなんとか危機的状況から脱したという報告だった。
（なっ!!?　あの女。俺と戦った後か？　前か？　くそ、どっちにして

も……!!　クソがッッ!!!)

再び、地面を思い切り踏みつける。自身の知り合いや友人が命の危機に晒されれば、誰だってこれぐらいの反応はするだろう。ひとまずは危機的状況から脱したという事で、ひとまずは冷静になる。冷静にならなければ、ならない状況では冷静さを欠けば、邪魔にしかならなくなるだろう。自身の知識をフル活用して、先回りして、叩く。

その為に、できる限り、思い出す。絶対に、もう誰もそんな目に遭わせない為に。

第二十三学区

ステイルからの言伝で土御門が何かを掴んだという情報があったらしい。土御門と合流する。辺りもそろそろ日が沈み、景色が夕焼けに染まっている。

そして、どうやら使途十字は、いや、やはりというべきか星座が関係してるという事になっているのだが、それ以外にも、他のギミックがある。というのが土御門の見解らしい。

直後、電話がくる。オルソラだ。そして、どうやら発動条件も彼女が掴んだようだ。今回、その使途十字（クローチェディピエトロ）が使われるポイントも掴んでいるようだった。その後、ステイルとも合流する。

「ポイントは、二十三学区の実験空港か……でもどうやって潜り込むんだ？」

「ふっ、それはあれだ。今回限りのオレの特権ってヤツを使うんだぜい？」

どうやら、警備状況を変えてもらったようだ。土御門の特権というヤツは随分と恐ろしいな、と雪旗は思ったが、今回はそれが役立った。二重スパイというのが、上手く働いたと思えばいいのだろうか。

「使途十字（クローチェディピエトロ）の発動時刻は日没直後、おそらく午後六時から七時の間、二十三学区のターミナル駅までは一〇分、リミットは二十五分ぐらいしかないんだぜい？」

「その身体で大丈夫なのか……？」

雪旗が聞いたが、どうやらこの三人で抜けられる程、二十三学区の警備は甘くはないようだ。つまり、絶対に土御門の力が必要になるという事だ。

列車が到着する。これに乗り込めば、後戻りはできない。つまり、ここが最後に引き返す場所だ。

「覚悟は決まってるのか？　これに乗り込めば、後は殺し合いだけが待っているんだぞ。上条当麻、雪旗硬地」

「当たり前だろ？　こっちはそれぐらいの気持ちでここまで付いてきてるに決まってるだろ？　ま、人殺しとかは御免だが」

「ああ、後、俺は殺し合いで終わらせるつもりは無い！」
全員で列車に乗り込み、最後の戦いへと赴く。使途十字（クローチェディピエトロ）など成功させない為にも、これ以上の犠牲者を増やさない為にも、こんな事を終わらせるのだ。絶対に。
隠れつつ、進む。どうやら空が飛行機などで混雑してる為、監視用の機体も巡回のルートを変化させるらしい。死角を使って、潜り込む。
土御門を先頭に走り出す。先には、フェンスがある。それを土御門が掴もうとする瞬間。雪旗が上条よりも少し早く叫んだ。
「あぶない!!　土御門!!」
「ん？　何が？」
と言ったと同時にフェンスに掴んでしまった。
「ぐあぁぁ!!?」
電気のようなモノが迸り、そのまま後方へ飛ばされる土御門。先程、ボコボコにされた後のこれで、もう既に動けなくなっている。雪旗がステイルに言う。
「ステイルは土御門を見ててくれ、上条！　これを消してくれ！」
「あ、ああ！」
すぐさま、幻想殺しでこのトラップを消し去り、フェンスを昇りながら、雪旗が言う。
「待ってろ、すぐに終わらせてきてやっから」
雪旗・上条ｖｓオリアナ＝トムソン。バトルが今、始まる！

雪旗硬地＆上条当麻ｖｓオリアナ＝トムソン

先に動いたのは、オリアナ。単語帳を一枚、咥えて、吹き出すと、空気の塊のようなモノが襲い掛かってくる。上条はそれを右手で殴り、破壊しようとしたが、どうやら簡単には消えてくれなかったようだ。

「上条！　伏せろ!!」

上条がとっさに反応する。そして、光線の如く、光の粒子が風を消し去る。どうやら竜王の息吹の威力調整もできるようになっているようで、風だけを綺麗に消し去る。身体から噴水のように血が吹き出るが、それらすべてを無視して、血まみれの状態でぶっ飛ばしにいく。かなり不気味で恐怖を煽る状態で走り出すから、オリアナの方も少し、引いているようだ。

「それでも、あの聖人はやっぱりこないようね？」

どうやら、それだけは常に気にしてたようだが、雪旗だって、聖人レベルまで行かなくても、能力で身体能力は凄まじいモノになる。それを駆使しつつ、魔術も扱えるのだ、身体に負担はかなり大きいが、この際気にしない。

一気に駆け抜けると、オリアナが先に向かった上条に蹴りを喰らわせる。腹部に喰らわせた後、横腹にも食らわせ、横へ大きく吹っ飛ばす。雪旗は接近戦では勝てないと思ってるようで、常に何かの魔術で近づけないようにしている。

（チッ、厄介だな！）

「てめぇ!!　何が目的だが、いまだによくわかんねぇけど！　こんなふざけた真似したんだ。そのツケはかなり大きいぜ!!」

雪旗が魔術を無視して、猪突猛進する。それを見て、大きく後退するオリアナに対して、雪旗はブーストのように、地面に蹴りを入れて、速度を上げ、一気に一発叩きこむ。

「くっ!!」

軽い防御体制に入られたが、それでもダメージは大きいだろう。能力込みでの初殴り、彼女的にもそこそこ効いているようだ。上条もさらに追撃するように殴りかかり、ダメージをさらに食らう。

「くっ！」
「こんな使途十字だの、ふざけた真似しやがって、絶対にこんなふざけた事は止めるぞ！」
「あら、ふざけた事だなんて、これは科学と魔術の壁を取りさげ、世界中の人々を幸せに導く事ができるかもしれないのよ？」
　上条は反論するように、言う。
「いいな、それ。それがなんとなく言い事ってのは、わかった。だけど！　俺が困るのは！　ここで今、大覇聖祭が潰されちまう事なんだよ!!」
「お前は知らないだろうが、この大覇聖祭がどれだけ、みんなにとって大事か。これを奪う権利は誰にも、お前にも無いんだよ!!」
「その程度じゃ揺らがないわよ？　それくらいで傷つくようなら、はじめから動いて無いわよ」
　きっと向こうにも向こうなりの正義というモノがあるのだろう。だけど、それでも、彼女は失敗を犯している。無関係の一般人を傷つけるという失敗を犯してしまっている。つまりは結局のところ、それじゃ意味が無いのだ。それだけだと彼には通じないのだ。
「それ、お前が傷つけた姫神の前でも言えるのか？」
　それに一瞬だけ彼女の何かが見えた。おそらく彼女も彼女で好きでやった訳じゃないというのは、知ってる。だけど、それでもやってしまったのだ。だからこんな事は止める。こんなモノしか生まないのならば、絶対に止める。

あと少しで終わりを告げる

雪旗と上条は一気に駆け出し、上条は回り込み、雪旗はそのまま真正面から一気に右拳を叩きこもうとするが、炎で前が見えなくなってしまう。身体全身が焼かれるような痛みが走るが、この程度ならば、無関係で殴りこむ事ができる。

ガヅッ!! という鈍い音が響き渡る。

「いっづ!!?」

「ぐっ!?」

しかし、叫んだのは雪旗と上条だった。どうやらいつの間にか、雪旗の拳と上条の拳が衝突していた。しかも、それが右手だった所為で自身の能力が完全にうち消される。しかも、まるで狙ったかのように、それと同時のタイミングでオリアナが腹部に思い切り、蹴りを入れられた。

「ガァッッ!!?」

ダメージが凄まじい、だが、痛みには滅法強い雪旗はこの程度で動きを止めたりしない、能力を再び発動させて、懐に潜り込み、至近で一気に叩きこむ。

「ぐっ!?」

向こうには、それ相応のダメージがあるはずなのに、まだ、倒れない。やはり譲れない理由が彼女にも存在するのだと、雪旗も思う。だけど、その気持ちはこちらだって、負けちゃいない。

辺りが徐々に薄暗くなっていく。

「あ、あら、そろそろお家へ帰る時間じゃないの?」

(まずいな……さっさとぶっ飛ばして!!!)

駆け抜ける。

(さっさと決める)

「いくぞぉぉぉ!!! 上条!!」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッッ!!!」

一気に駆け抜ける。これ以上無い程の本気を出し、上条と共に殴りぬける。

「……きゃぁっ!!!」
バタッと倒れこむ。その状態のまま、彼女は考える。
（絶対の基準点が……誰もが幸せになれる世界が、そんな最高の世界を……!!）
オリアナは魔法名を口にする。
「私は……私の名はＢａｓｉｓ１０４」バシス
（魔法名!!）
オリアナは氷のつぶてを一斉に放つ。雪旗は素早く、上条の前に立ち、つぶてをすべて喰らう。それにブチ切れる上条。
「お前、一体どれだけの人を傷つければ気が済むんだ!!」
「お姉さんだって誰も傷つけたくないわ？　でも私には目的があるのよ。さ、来なさい。坊やを倒せば、後は使途十字が私の望む世界を創ってくれる」
「……結局……他人任せかよ……偉そうに言ってんじゃねぇぞ」
「他人任せ……ね。お姉さんは誰でもいいのよ。誰かがこの世界に転がる主義主張を束ねてくれたらいいの」
「……お前のそんな事の為に学園都市を引き渡せってか……？　冗談も大概にしろよ……？」
「坊やは知らないから、そういう口が聞けるのよ……あの身に降りかかるモノを呆然と立ち尽くしてる事しかできない。悔しいという一言を聞いた事が無いから」
「……だから、そんな酷い状況だったから、そんな苦しい目に遭わない為に、学園都市を差し出せと……？　お前の言い分はそれだけなんだな？　だったら、申し出は却下だ……きっと俺が想像も付かない事を体験してるんだろうさ……お前は、でもな、それを
理由に暴力を重ねるってのは、どうなんだよ？　それが……その人達が望んだ事なのかよ!?　自分の為に他の誰かが犠牲になってくれって!!」
雪旗が何を言おうと、どうやらもう既にやるべき事は決まっていて、その為に突っ走る事が彼女の生き方のようだ。
「もう、いいわ」

その一言で単語帳のピンの部分を引き抜き、紙をすべて散らす。
「我が身に宿るすべての才能に告げる。その全霊を開放し、目の前の敵を討て!!」
炎の塊のようなモノが襲いかかってくる。上条がそれをうち消す為に一気に駆けぬけ、炎の塊をうち消す、だが。
(中に何かが――――ッッ!!?)
そう思った時には既に遅く。そのまま身体全身を叩きつけられるような衝撃が襲い掛かってくる。身体全身に重たい衝撃が走り、そのまま倒れこみそうになるのを、耐える。大覇聖祭で被害になった姫神を思い出す。
そんな犠牲になった、こんな事の所為で。上条は耐えて、オリアナの元へ一気に駆け抜ける、そしてオリアナに思い切りのパンチを喰らわせた。
「……」
直後だった。声がする。その声の主はリドヴィア。そして使途十字はどうやら学園都市には既に無く。オリアナは囮だったようだ。そしてすべてを改変するつもりのようだ。一方的に完全に相手の勝ちだった。
「く、くそ……」
「やられた」
ステイルと土御門が来る。ステイルが土御門の回復に専念していたようだが、それでも完全回復ではないようで、探索と攻撃。二度も魔術を使う事はできないようだ。
発動まで、あと百七秒。
「……いいや、大丈夫だ。何もしなくてもな」
「は!!? 何言ってんだよ! 雪旗!!? まさか早々に諦めたってんじゃ!?」
「これを見ろ」
携帯電話を見せる。それに表示されているのは、大覇聖祭のスケジュールが書かれている。それを見て、上条はピンと来た。
そして、時間は六時ジャストになる。それと同時に花火が空全体を

覆いつくす。
ナイトパレード。それが六時に開始されるのを、きっと向こうの連中は、リドヴィアは知らなかっただろう。これで星空を覆いつくして、術式が完成できなくなった。
「最後の最後で大覇聖祭が作り出した。その人達の光にお前らは負けたんだよ」

偉大な両親

結局、リドヴィアは知らぬ間に捕まっており、上条は上条で病院送りにインデックスに説教のようなモノを受け、さらに、さらに雪旗は雪旗で。

「ほぉ？　言いたい事はそれだけか？」

アイテムの面々に説教中。ちなみに全員が見事にキレている。まさかの滝壺までもが例外ではないという事態だ。

「超雪旗は自由行動が酷すぎると思うのですが？　まさか二人に説教をしといて、自分は全然競技に出ないとは」

「サボってた訳ではなくてですね。実はいろいろとあったのですよ。うん。忙しかったなぁ」

「それだけじゃわからない」

滝壺が怖い。という感想しか抱けない雪旗が今にも涙目になりそうになっている。ここではフレンダというもしかしたら、この状況を変えてしまうかもしれないから、縋ろうとしたが、フレンダとフレメアが居たけど、二人は特に何も言わないけど、かと言って助けてくれる訳でもないという状況だ。

「す、す、すみませんでした――――っっっ!!!」

もはや、謝るしか道は無かった。というよりもそれ以外に道が用意されてない。結局、大怪我したけど、とある事情ですぐに治ってしまうので、病院へは入院はしなくても良かったのだが、毎度の如く、説教は受ける。ちなみに上条は噛み付きでも喰らってるのじゃないだろうか、と雪旗は思っていた。

「……はぁ、それで、結局今日は何してのよ？」

麦野が聞いてきたので、何の迷いも躊躇も無く言う。

「そーだな。みんなの為に頑張ってた!!」

元気良く言うが、それに対しての彼女達の反応は本当に酷いモノだ。

「超何言ってんですか？　恩着せがましい言い方ですね」

「お前がみんなのためとか似合わないな!!　女相手でも容赦ない癖

に」
　どうやら皆さんは傷を抉るのが大好きのようだ。雪旗は身体だけではなく、精神的にも強くなりそうであった。その後、という訳ではないが、両親が出向いてきたので、彼女達は何かを察したのか、三人だけにしてくれた。こういうところがあるから、彼女達は本当に頼もしい。
　そして、三人だけの空間になったので、雪旗は気恥ずかしそうに、頬を掻く。そしてなんと言い訳を募ろうか、考えてる内に、父親の方から、行動を移して、肩に手を置く。
「お前が、どこで何をしてたのかは、聞かん！　父さんだって母さんだって心配してたが、何も言わん!!　だが、これだけは言わせて貰う！」
「言わねぇんじゃないのかよ!?」
「っと、そうか……いや、やっぱり一言だけ言う!!」
「ったく……」
　頭を掻き、そして真っ直ぐ父親を見据えて。
「お前は気にするな！　いくらでも俺達に心配を掛け続けろ！　何も気にせず、高校生の時ぐらいだったら、父さんだって死ぬほど迷惑掛け続けてたからな！　そりゃ、もうあり得ないぐらいにな、お前の十倍以上だ！　だから、お前の我が儘ぐらい、いつでも聞いてやるから心配すんなよ！」
　ドンドンッと背中を叩かれる。そして、その光景が前世の、自分がもう決して戻る事のできない光景を思い浮かべる。自分にとって父親という存在がどれだけ大きいか、自分にとって、どれぐらい大きい存在だったか、自分は前の親に何も報いてない。何も返せないままにしてきてしまった。それがどれだけ後悔を生んだか、今、この瞬間に悟った。
　そして、母親の方も前に出てきて。
「もう、父さんが言いたい事、全部言っちゃったからほとんど言いたい事もないんだけど、ほら、また会えなくなる期間が長いから、私の方からも言っておくわ」

トンッと軽く背中を叩かれ。
「あんまり心配を掛けすぎんじゃないわよ……？　父さんもあれで結構心配症だからね」
「母さん！　俺の立つ瀬が無くなるぅぅ……」
と縋るように母さんにくっ付く両親を見て、思わず、噴きそうになるのを我慢しつつ、そして両親をしっかりと見据え。
「父さん！　母さん！　俺、頑張るよ。ここで絶対にいつか恩返しするから、それまで元気でいろよ！」
と親指を立てながら、前へ突き出す。それに返すように、父親と母親が同じ動作をして。
「当たり前だ！　いつまでも元気で居て、お前を絞りつくしてやる!!」
「母さんもお願いねぇ」
そうして、両親は学園都市から帰ってく。それから数分経ち。みんなが来て、麦野が一番に話しかけてきた。
「いい両親じゃない……」
「そうだろ。俺の自慢の両親だ」
「はっ、マザコンでファザコンかぁ？」
「そうかもな」
一切の恥ずかし気も無く言うものだから、麦野も少し驚いている。そして、すぐに自分の言った事に赤面する雪旗は恥ずかしがりながらも、それでも、自分にとってはやはり自慢の両親だから、訂正はしなかった。

北イタリア　五泊七日の旅

いつも、自分が思ってる事が丸っきり否定するような出来事が起きたら、それは何かの陰謀だと思うのに、さほど時間は掛からないモノだろう。
というのも、上条当麻という。
ふざけてるのかと思う程の不幸体質の人間が大覇星祭最終日恒例の来場者ナンバーでなんと、なんとあの上条当麻という人間が、北イタリア五泊七日の旅を見事に引き当てたのだ!!
「……うぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」
と叫んでいるのは、雪旗硬地だったりする。何故、叫んでいるのか、その理由は、自腹を切らなければならないという部分だ。
いや、ついてこなくてもいいのならば、彼らの旅が本当にただの旅ならば、雪旗は一緒に付いていったりはしない。だがしかし、あってしまうのだ。
上条当麻のいる所に事件あり、という言葉が作られても不自然ではない程、彼はその点に関しては遺憾なく、不幸を発揮したりするのだ。
「……はぁ、自腹かぁ……高っけぇな……」
とお金はたっぷりあるのだが、使うのがなんだか勿体無いという感じがする雪旗硬地はそのまま後悔の念にとらわれたまま、準備を素早く、済ませていた。
「ったく、しょうがないなぁ……」
叫んだ理由も実のところ、旅行が楽しみで楽しみで仕方ないという部分もある。しかし、彼は滅多に自分の感情を表に出さないのだ。
しかし、今回のような事があれば、彼もテンションは上がるだろう。そして、様々な問題をクリアして、彼らは北イタリア五泊七日の旅へと、向かったのだ。
「さてと……どうするか」
思案している雪旗を置き去りに、彼らは勝手に行ってしまう。まあ、なんとなくそういうヤツらだとはわかっていたが、それをわかっていた上で。

「おーい……酷くない？」
そんなこんなで、三人で来ていた。ちなみにアイテムの彼女達も後に合流するらしい。誘ったのは自分だし、一応奢りという形になるのだ。
今まで貯めこんでいた貯金が一気に消え去ったのに軽いショックを受けつつも、その事を払拭する為に、楽しむだけ楽しもうという感じだ。
（怪我はしないようにしないとな……いろんな意味で洒落にならんし）
そしていつも通りと言うべきか、暴食シスターインデックスはご飯を見て、目を輝かせている。
いつも通りの服を着ていて、ここでもやはりと言うべきか、目立つ格好だ。
「食べるのはホテルに荷物を置いてからだぞ？」
と上条が呆れ混じりに言ったが、インデックスは顔を真っ赤にしながら。
「く、釘を刺されなくても、わかってるかも!!」
と言った直後、また食べ物に目がいっている。上条も微笑ましく思ってるようだ。
「あのさ、食べ物も良いんだけどさ、チェックイン済ませたら、ヴェネチア行こうぜ、ヴェネチア。俺、一回ゴンドラ乗りたかったんだよな」
と上条の方もどうやら行きたいところがあったらしい。
ちなみに雪旗も海外旅行などは両方合わせても、今回が初めてで、ワクワクがいまだ健在という事だ。
行きたいところは少ないが、海外旅行という事でテンションは爆上がり、さっさとチェックインを済ませたいところだと、思っていたら、その前に不都合が起きたり。
「あれ？　インデックスは？」
「え？　インデックス……？」
迷子。
インデックスがというよりも、彼ら二人が。

インデックスを探す為に、いろんな場所を回っていたところ、そこで、ここに住んでいるであろうおばさんが話しかけてきた。
ペラッペラのイタリア語だ。一応、雪旗が華麗に対応したおかげで、難を逃れた上条はホッとしているところで、彼女に会った。
「オ、オルソラ……!?」
「はい」
ニコリと対応してくれたのは、オルソラ＝アクィナス。前に上条が助けた内の一人だ。たまたま、今回も会った、という事だろう。
ちなみに雪旗は知っていたのだが、一応、対応は驚きを混じらせている。
「それで、一体どうしてあなた様達が？」
と聞いてきたオルソラに対して、上条が答える。
「俺達は旅行でな、そういうオルソラこそ、確か、ロンドンじゃなかったか？」
「つい先日までこちらに居を構えてございまして、ローマ正教からイギリス清教へ移る時に少々バタバタしてしまいまして、天草式の人達がお手伝いをしてもらいまして」
「天草式か……」
雪旗が、少し含みのある感じで言ったが、上条はそれを一切気にせずに、多少驚いた感じでいた。そしてオルソラが聞く。
「ところで、あなた様達は、何をしていらっしゃたのですか？」
「え、ああ……インデックスを探して……」
「ここで会ったのも、何かの縁でございます、丁度良かったのでございますよ、荷物の整理を手伝ってもらえませんか？」
「え、だから、俺達はインデックスを……」
（なんか、天然さんな感じだよな……）
などと思っていたら、彼女が。
「あら、インデックスさんでしたら」
先にオルソラの自宅に居たりした。二人が必死に探してる間に彼女はジェラートを頬張っていたのだ。笑顔でそれを頬張りながら、インデックスが。

「とうま、とうま！　コレ見て、コレ！　こんなにおいしいジェラートなのにお徳用で凄く安いの!!　あむっ!!」
　と本来ならば。
　それを使って。
　掬いそのままコーンなどの上に乗せる為に使うデッシャーを使いながら、そのまま食べているという贅沢な食べ方をしているインデックスに対して、上条は若干、負のオーラを漂わせながら、肩を下ろしている。
「お前、俺達を置いてけぼりにして……？」
「あ、オルソラ！　お昼ご飯まだぁ？」
　と二人を無視して、お昼ご飯を要求するインデックスに落胆しながら、上条はいつもの一言を発した。
「不幸だ……」
「ま、それがお前だから」
　とフォローになっているような、なっていないような一言を言って、肩に手を置き言う。
　そんな事をしていたら、天草式の人達か、扉を半開きにして、五人程の人数が居る。
　その中で雪旗が最も気にしたのは、やはり誰が何と言おうと、五和だろう。この時には既に彼女は上条に惹かれていたはず。
　上条におしぼり作戦なるモノを実行していた時は、あまりの回りくどさに驚愕したのを思い出す。
　そして、雪旗達のお昼ご飯が用意される。パスタという、イタリア料理の定番を出された。
「あ、でもいいのか？　俺達まだ何も手伝っていないけど……」
　と上条が心配そうに言うと、オルソラが笑顔で対して。
「まずはお客様をもてなすのが先でございますよ」
　上条が笑顔で答える。
「じゃあ、遠慮なく」
　と言ったら、五和が上条に対して、おしぼりを用意する。
（お……）

「使います？」
「あ、ども……」
と軽く会釈。
「いえいえ」
そのまま彼女はそそくさと退場する。上条もいまいち、要領の得ない顔をする。
「あいつらは一緒に食べないのか？」
上条が聞くと。
「鍛錬中とかで、決まった食事作法でなければ、ならないらしく」
「とうまぁー」
と我慢できずに上条を急かす。オルソラも笑顔で。
「さぁさぁ、冷めない内に」
「じゃあ……」
三人一斉にいただきます、と言い。食べ始めた。
「う、うめぇ……」
雪旗が感嘆の声を漏らす、それと同時に二人もおいしいおいしいと食べまくる。
「なんだ、パスタってこんなに旨くなるモノなのか!?」
「とうまが作った五百倍ぐらいおいしいかも!!」
「てめぇに言われる筋合いはねぇけど、本当においしいから今はいいや！」
と食べながら喋るという行儀が悪い食べ方をしていた二人。雪旗は黙々と食べていた。
食事中に喋るというのは、あまりしなく、今も寮では一人で食事してるし、そこら辺は黙って食べるのが、癖になってたりしている。
そうして、全員が食事を済ませた。

アドリア海の女王

オススメの場所をオルソラから聞きながら、上条と雪旗は引越しの手伝いをしている。と言っても、雪旗はもっぱら力仕事のみに専念していて、他の事を一切まかせっきりという感じだ。

「ほぉ、さてと、他にする事はぁーっと……」

そして上条が新聞紙のストックの場所を聞きにオルソラの元へ、この時、二つの場所からシャワーの音が聞こえるという状況に陥った上条は悩みに悩んだ末、インデックスの声が聞こえない方を開けていた。雪旗もその場面を目撃しており、雪旗が一番初めに思った事はまさに上条と同じだ。

（なぜ、ノックで確認しない……？）

まさに流れるような作業とでも言うべきか、ラッキースケベを終えて、待っているのは制裁だ。インデックスに噛みつかれる上条当麻の一言。

「不幸だーッッ!!!」

そんなこんなで、辺りも暗くなりやっと引越しの作業を終える。上条はオルソラに一緒に見て回るかと、誘ってみたが。

「そんな、大人数でだなんて」

とクネクネさせながら、赤面させて言うオルソラ。ガクッ！　と上条は体勢を崩す。インデックスが不思議そうに聞く。

「何、大人数？」

「聞かなくて良い!!　そして知らなくて良いんだ。インデックスッッ!!」

「それにこれからキオッジアにお別れを告げに回りたいですし、みっともない顔もしてしまうかもしれませんし、あまり見せたくありませんから」

と少し恥ずかしそうに言う。

それに上条は少しだけ微笑んで。

「そっか」

「では、私はこれで、機会がありましたら」

そしてオルソラと別れようとした、その瞬間だった。
「これは……！　みんな伏せて!!」
インデックスが叫び、そして強制詠唱（スペルインターセプト）。オルソラを狙っていた魔術を強制的に位置を変え、そしてオルソラの荷物が吹っ飛ぶ。そして魔術師の仕業だとわかって先に動いたのは、上条。そのままオルソラを押し倒しながらオルソラを狙っていた針のようなものが上条の背中を掠る。上条がうめき声をあげてしまう。
そしてそのまま魔術師の場所を探すが、見つからない。探していると足を掴まれる上条を水の中へと一気に投げ飛ばす。そして水の中から這い出てきた魔術師は持っていたヤリでオルソラに突こうとするが、それを雪旗がオルソラの前に立ち、突いてきたヤリの軌道をずらし、その魔術師に思い切り蹴りを入れ、水の中へと再び、ぶっ飛ばす。
「チッ!!　なんだこれ!?　上条ー!　大丈夫かっ!?」
「あぁ!!」
上条は水の中から這い上がり、辺りを見回す。
向こうから数名の魔術師が何かを喋る。
「……？」
雪旗が疑問を浮かべてると、地面から地震のような揺れが生じる。
「なんだ……？」
そう上条が呟いた後に、水の中からとてつもなく大きな船が出てくる。あまりの大きさに上条とオルソラが立っていた場所も巻き込まれ、そのまま上条とオルソラは船の中に入ってしまった。
「大丈夫か、インデックス。少し下がってろ」
雪旗も助走をつけて、一気に船の中へと入り込む。すると、その直後だった。船が急発進し、そのまま三人を乗せたまま船は動き出してしまう。
「これ、素材はなんだ？　ガラス？　いや、氷か？」
雪旗が少し船について、考えていると雪旗達が上の部分に居ると、船の下の方から魔術師が数名ほど来る。どうやらここに居るという事は既にバレているようだ。

「俺が囮になるから、その間にお前達は中に入ってろ……」
「なっ!? 何言ってんだ!? 雪旗ッ!!?」
「お前はちゃんと、オルソラを守ってやれよ……中にも敵はいるかもしれねぇからな」
　そのまま雪旗は上条達から多少離れた場所から一気に下へと降りる。そして啖呵を切る。
「よぉ、魔術師達よ!!! 俺が相手してやるぜ。かかってこいよ!」
　向こうは日本語ではない言葉を使っている。雪旗が使ったのは、日本語だから理解できてないだろうが特に気にしない。どうせ向こうはわからなくても……。
　向こうから迫ってくるからだ。魔術師達が槍やら何やらを使って、こちらに向かってくる。雪旗はそのすべてを避けて、一気に迫りくるヤツらを一気に吹っ飛ばす。
　そして、そんな間。中に入ってる上条とオルソラ。中の構造はどうやら客船のような感じだ。そして向こうから魔術師が来たので、一室に隠れている上条とオルソラ。どうやら相手はローマ正教のようで、二人は頭を抱えていた。その直後、船が大きく揺れる。一室についていた窓を二人で覗くと、今乗っている船とまったく同じ船が多数ある事に気付いた。
「この船は敵の本拠地ではなく、一部に過ぎなかったという訳ですか」
「キオッジアじゃ、狭くて、展開できなかったって訳か……」
　上条が懸念している事は今はインデックスだ。どうやら一人っきりにしてきた事を心配していた為、携帯電話で連絡しようとしたが、どうやら電源が切ってあるようで、連絡はつかない。そんな話をしていると、扉が開かれる。慌てふためいた上条がとりあえずオルソラをベットの上にあった毛布で包む。扉を閉めようとしたら、そこに居たのは。
「アニェーゼ……!?」
　そう言うのも束の間、アニェーゼは上条の頬と腹部に一撃。それを見兼ねて、上条の前に庇うように立つ。アニェーゼは驚いたようにオルソラを見る。

「どうして、アンタ達がアドリア海の女王に……？」
「成り行きで船に乗ることになったのですけど……アドリア海の女王というのは、この氷の艦隊の名称でございましょうか？」
「艦隊名は女王艦隊。この船は護衛艦の一隻。本当に何も知らないみたいですね？」
　上条が少し回復して、口を挟む。
「どうして……こんなところに？　何やってんだ？」
「侵入者捜索の手伝いです。ですが、アンタ達が侵入者なら、これは少し利用できそうです……」
「でも、俺達もここに来たばっかりだぞ？」
　と反論したが、彼女は平然なままだ。
「グダグダ言ってたら、ここで今叫びますよ？　アンタ達は黙って従ってればいいんです」
「ですが、私達を逃がして、あなたに何のメリットが？」
「報酬……そう捉えてもらえればいいです」
　そしてこの船の事を少しでも知りたく、上条が聞くと、どうやらこの船はアドリア海の監視の為のものらしい。オリアナは聞いた事がなかったらしいが、どうやら二人が知ってる事などほんの一部に過ぎないらしい。
「というか、俺達はいきなりこの船のヤツらに襲われたんだぜ？　本当にただの監視の為のものなのか？」
「そりゃ文字通り、監視に引っかかったんじゃないですか？　あなた達はローマ正教のプロジェクトを破壊した人物なんですし、その上、片方は日本から片方はロンドンからやってきてんですし」
　どうやら、この狙っていたのはオルソラだけでなく、上条や雪旗も狙われていたという事になる。上条がそう考えていたら、アニェーゼが続きを話す。
「ま、それは建前でここは一種の労働施設なんですよ。私みてぇな罪人を集め、受けた損失分を支払わせる為のね、だから船に居るのは私の部隊、いえ元部隊のシスター達がほとんどです」
　上条は少し考え込む。どうやらあの時の事件がこういう風になっ

ていたと上条は知らなかった為、少し考えるところがあったのだ。
「それで、こっからが本題ですが、あなた達を見逃す代わりとして、シスタールチアとシスターアンジェレネを助けて欲しいんです。あの二人、索敵の裏をかいて脱獄して、準備を整えてから、私達を助けるつもりだったらしいんですが、途中で捕まってしまって、脱獄術式の加工をされるらしく……」
「それはつまり、思考力そのものを奪うという事でございますか？脳の構造を壊すと……？」
「そうなる前に助け出して欲しいんです……そうなりゃ、脱獄術式を使えるでしょう」
　しかし、ここで懸念がある。
「ですけど、その術式はすでにローマ正教にもバレているのでは？」
「女王艦隊ではこれから大仕事があるのですから、一人二人の脱獄を気にしてる余裕が無いのですよ。私は陽動の為に機関に戻らないといけないんですよ。その間に助け出して欲しいんです」
「お前は俺達を助けてくれるのか？」
　と上条は言うとアニェーゼは否定。利用していると。
「管理している側が怖れてるのは、労働者の反乱なんですよ。言っちまえば、私はそれを防ぐ、精神的な安全装置という事です。艦隊の中を自由に動く権利だってありますし、労働も免除、シスタールチアとアンジェレネ両名は空回りなんですよ」
　小さな声で、さっさと二人だけで逃げればいいのにという言葉が聞こえた。
「運良く、ここから出られたら、もう二度とローマ正教と関わらない事ですね」
「……わかったよ。多勢に無勢だと、こっちだって助ける余裕無いしな……」
　上条が頭を掻きながら言うと、アニェーゼはあの時の事件の事を掘り返す。あの時にたった一人で立ち向おうとしてたのは、どこのどいつだと。そして、アニェーゼは手を差し伸べる。
「ああ、ありがとう……」

と手を取ると、その瞬間。幻想殺しが発動する。そしてアニェーゼの服が一気に散る。どうやら魔術的な何かが施されていたようで、そのまま上条の右手に反応して破壊されたようだ。叫びそうになったアニェーゼの口を上条、オルソラは急いで塞ぐ。

二人はそのまま、中に居るシスタールチアとアンジェレネを助けようとしたら、向こうから足音が聞こえる。ここはかなり人が居ないという話だったが、どうやら運悪く人が居たようだ。上条がオルソラを下がらせ、身構える。

すると、そこに居たのは。

「あれ？　上条……？」

「雪旗……とルチアとアンジェレネ???」

どうやら助けようとしていたら、雪旗が先に助けていたという事だったのだ。

雪旗とルチアとアンジェレネ

雪旗は雪旗でいろいろと大変だったりする。とりあえず、外に居る連中をすべて寝かせる事に成功した雪旗はやっとの思いで中に入る事ができた。雪旗が中に入ると、氷の鎧が多数襲い掛かってくる。それを一人一人相手にしつつ、上条達の場所を探そうとしている。だが、とにかく数が多い氷の鎧の武器を破壊して、体を破壊して、突き進む。

（どうやら、全体的に氷でできてるから、脆いっちゃー脆いな……）

そんな事を考えながら、とにかく敵を倒しまくる。艦隊の中にはどうやら一室一室があるらしく、その中を一つ一つ調べていく。そんな中でどうやらシスタールチアとアンジェレネが居た。その二人がどうやら囚われている状態のようだ。

（あぁ、そういえば脱獄しようとしてたんだっけか……ここは助けるべきだよ……な？）

そのまま物音を立てずに扉を開こうとしたところ、彼はなんと転んでしまい、扉に一気に突っ込んでしまう。

「……ははは、お邪魔します」

焦りすぎて、日本語で話してしまった訳だが、向こうは一切わからないに決まってる。彼らは魔術を使って、どこかへ連絡しようとしたのだろう、しかし雪旗はそんなものを許さない。一瞬で懐まで潜り込み、思い切りアッパーを顎に喰らわせ、そのままもう一人の魔術師を巻き込ませ、両方気絶させる。

「あなた……一体？」

ビクビクしているアンジェレネはルチアの後ろに隠れている。そんな中でルチアは一切、臆せずに言う。

「いや、まあ助けに来た？」

「……あなた確か、法の書の時の……」

どうやらあの時の事件を思い出しているようだ。結構影が薄かった気がするが、どうやら覚えて貰ってはいるのだろう。そうしてそのまま、話を続けようとしたら、彼女二人はどうやらこちらを警戒して

止まないようだ。
「あの、俺ってそこまで信用無いですかね？」
　今まで、信用というものを勝ち取った事が無いような気がしたりしてる雪旗は今も精神的にボッコボコにされているという事だ。ここではどうやら、信用を勝ち取らないと、今後の事で影響が出るだろう。それでも上条達ならば、なんとかするだろうが。
「まあ、とりあえず座れよ。いきなり襲ったりしないから、そこまで心配するなら手足縛ってもいいぜ？」
「い、いえ……まぁ、そこまではしません」
　と若干引き気味になってるルチアに釈然としない雪旗。別にそういう趣味がある訳ではないのだが、と胸中で呟く。
「それで、あなたは一体何が目的でここまで来たんですか？」
「いや、それが俺自身よくわからなくてよ？　これって何なんだ？　デカい艦隊ってヤツなのか？　外でこれと同じヤツがいっぱいあったりしたけど、どういう事なんだ？」
「あなたは本当に何も知らないんですか？」
「ああ、知らん」
「……まあ、私自身もよくわからないんですが、これは女王艦隊の護衛艦の一隻です……。私達はなんとかここから抜け出そうとしたのですが、それも失敗してしまいこういう事になってるんです」
「脱獄ねぇ？　二人してどうやって……？」
「そんな事、言える訳無いでしょう？」
「やっぱり、そこまでの信用は得れて無いと？」
「はい、あなたが何を考えてるか、まだ読めてませんから……」
　どうやら二人とも、疑心暗鬼に陥っているようだ。だったらどうすればいいのだろうか。雪旗は今は二人の事を考えて動くつもりだ、上条達もこちらに来るのだろうからここで彼女達を引き入れれば、後々の作業が楽になるのは確かだ。だから極力、警戒心というものを除外しておきたい。
「……そこまで信用できないかなぁ？　俺って結構わかりやすいヤツなんだけどな……？」

「当たり前です……。あなた方の所為で……私達がどんな目に……」
憎んでいるような顔をして、こちらを睨みつけるルチア。それに対して雪旗は飄々とした感じで。
「お前、それはお門違いってヤツだろ……お前達がしてきた事は決して良い事とは言えないんだからよ……」
と言い返す。そのまま彼女はグッと口を噤む。
「……それにお前の脱走を手伝ってやったって良いんだぜ……？　見たところに拠ると、その頭のヤツで行動が制限されてるんだろ？　まあ、俺の手じゃそれは破壊できないけど、手伝いぐらいはできんだろ」
「だから言ってるでしょ……信用に値しないと」
「まあ、信用ってのは大事だよな……後ろから襲われちゃたまんねぇし、それで……？　どうするんだ。お前らはここで腐ってるだけで誰も助けずに終わるのかよ？　誰一人助ける事ができずに、ただここでお前らの脳の構造を破壊されて、それでいいのか？」
「なっ、どうしてそれを……！」
と、つい身構えるルチアだが、雪旗の態度は変わらない。
「どうするかって聞いてるんだ。お前らは抗うのか、どうする事もできないと嘆くのか……!!」
「ッッ!!!!」
それを聞いて、二人の表情が一変する。そこまでの事を言ったのだろうか、と雪旗自身少しだけ驚きを露にするが、どうやら二人の決意は決まったようだ。
「癪ですが、利用させていただきますよ」
「そうかい、じゃあ、利用されてやりますか……」
そしてポケットに手を入れると、チョコレートがあるのに気付く。
「ん？　チョコか」
そんな事を思ってたら、アンジェレネがこちらを見て、目を輝かせていたりする。どうやらこのチョコにしか目が入っていないようなので、このチョコレートをあげる。目を爛々とさせて、チョコレートを頬張るアンジェレネを見て、とある白い修道服のシスターを彷彿とさせた。

（なんか、餌付けしてる気分だ……）
「シ、シスターアンジェレネ!!　シスターたるもの、食べ物で釣られてはいけません!!」
「す、すみません。シスタールチア」
　と謝っているアンジェレネに対して、雪旗がアンジェレネの前に立って。
「まあ、まあ、育ち盛りだしさ。その辺は許してやれよ」
「ッ……!　まあ、いいです」
　とりあえずアンジェレネには信用を得られたようだ。ルチアの方は半信半疑といったところか、それでも今の段階ならば、問題ないだろう。そのまま雪旗は小さくため息を吐き、この一室から出て行き、そのまま上条達を探しに行こうとしたら、足音が聞こえてきたのだが状況的に考えて、敵の可能性があるので、一気に突撃してやろうと思ったら。
「あれ？　上条……？」

女王艦隊

上条と合流した後、雪旗から二人の説明があり、とりあえずは警戒せずに話しを進める事ができた、それで雪旗が話の本題に入る。
「……さてと、俺達はお前達の脱獄に協力するけど、お前らはどうやってやるんだ？」
雪旗が言うと、ルチアとアンジェレネは手を合わせて、それを前に突き出す。すると、艦隊に穴が生じる。雪旗と上条が驚く。
「すげぇ」
「ほぉ、これで脱獄したのか」
「氷で使った造船術式の亜種で空洞をあけられるのです、これを応用し、海底を凍らせて海底コースターを造りあげるのです」
と言った途端だった。彼女達の頭についてるものが光りだし、苦痛に顔を歪める。
「どうした!?」
雪旗が言うと、どうやらこの術式を使う事も違反だと追加されたようで、それに反応しているようだ。だが手順に則り縫目を壊せば拘束衣服の一部は壊せるようだ。
「壊す……」
と上条が自分の右手を見て言う。
「だったら手っ取り早く俺の……」
それに続く言葉はなかった。なぜならば、即座にオルソラが腹部に肘打ちをしていたからである。それもそのはず、そんな事をしたら二人まで素っ裸だ。ルチアとアンジェレネは何をしているのかわからず怪訝な顔を浮かべるが、雪旗は理解して、少しばかり呆れる。
そんな些細なやり取りがあった後、アンジェレネが聞く。
「あの、シスターアニェーゼとはいつ合流できるんですか？」
「悪い……アニェーゼは多分……来ない」
と上条はバツが悪そうに言う。
「お前達を助ける為に陽動に出ると言ってた。この女王艦隊の機関に行ってるみたいだけど……」

と言った途端。
「冗談ではありません！」
ルチアが叫ぶように言う。
「この女王艦隊は大規模魔術アドリア海の女王の儀式場を守るためのものです!!」
「アドリア海の女王？」
上条が疑問そうに聞くと。
「わかっているのは同盟の機関で行われる事、その発動キーとして、刻限のロザリオという別の術式が関わっている事、そしてその刻限のロザリオにシスターアニェーゼが使われる事……！」
「ど、どうなるんだ!?」
「詳細はわかりません。ですが、脳は確実に破壊され、心臓を動かすだけの存在になる……と」
上条が驚きながら、その話を聞く。上条が聞いていた事とは全然違う。だから上条は奥歯を噛み締め、悔しそうな表情をする。雪旗も同様、さすがにそんな話を聞かされて、見過ごせるようなヤツではなかった。すると艦隊全体が揺れだす。どうやら他の艦隊から一斉に砲撃を受けているようだ。穴があき、その衝撃に全員が吹っ飛ぶ。
「何のつもり……だ？」
その後、この艦隊は完全に落とされた。

上条が目を覚ますと、そこには心配そうに見ているインデックスの姿が。
「んー？　インデックス？」
「体は平気なの？　とうま」
そんな会話をしていると、そこから現れたのは建宮斎字だ。
「建宮？」
「おう、天草式十字凄教教皇代理さんだ、今は手前にイギリス清教所属ってつくけどな」
それを聞くと、すぐ傍に居た五和がおしぼりを。
「どうぞ」

「あ、ども」
「いえいえ」
　そのやり取りを終え、そのまま足早に去っていく。
「……？　あ、そんな事より！　オルソラ達は!?」
「ん、大丈夫だぜ？」
　と言ってきたのは、雪旗だ。どうやら上条よりも先に起きていたらしい。
「一応全員拾っておいたのよ、まあ、雪旗の功績は結構大き目だと思うのよな？」
「……？」
　上条が怪訝な顔を浮かべると、どうやら雪旗は全員を担ぎこんで来ていたようで、そこで天草式と合流したようだ。
「そ、そうなのか、助かった」
「いや、そもそも助けてくれたの、コイツらだしな。俺って何もしてないような……」
　と言う。
「さてと、続き続き」
　と雪旗が急かそうとすると、先に上条が疑問を問う。
「あのさ、ここって天草式の秘密基地みたいなものなのか？」
　と上条が聞くと、建宮が笑い、そして少し退いて言う。
「ここは建物の中じゃないねぇーのよな」
「あ？　ってことはまさか!?」
「潜水艦と言いたいところだが、そこまで高性能じゃねぇのよな。せいぜい上下艦ってところよな」
　そう言うと、天井が開きだす。
「引越しの手伝いするのに、ここまで持ってくるのか？」
　と上条は呆れ気味に言うと、建宮が否定するように言う。
「我らが武器を懐に持つのは当たり前、そしてわれわれが最も得意とするのは、海上戦よ！」
　向こうには女王艦隊の護衛艦が大勢見られる。そちらを見ながら、小さく呟く上条。

「アニェーゼ……」
　それを不機嫌そうに見るのはインデックスだ。
「ど、どうした？」
「別に！　これからどうするにしても、まずは詳しい話を聞かないとね」
「なら、俺よりルチアとかアンジェレネの方が……」
　と言い、さらに不機嫌な顔をするインデックス。もちろん一部始終知っている雪旗はそれを少し笑いながら、という訳にもいかない。何故だと言いたいところだが、どうやらここには『アイテム』も居るようで。
「おいおい、お前何笑ってんだ？」
　と聞いてくるのは麦野だ。なぜここに居たんだ。という疑問の方が大きいが建宮から聞いた話では、どうやらインデックスと一緒に合流したようで、よく考えたら、面識自体はあったし、この五人が一緒に行動するのは些か問題があるような気もしたが、気にしない。
「まったく、雪旗はいつでも超雪旗ですね」
　と絹旗に、それに続いて久々にフレンダとフレメアにも、言われる。
「にゃあ！　超雪旗って大体何？」
　とフレメアがフレンダに聞いていると、フレンダも肩を竦めながら。
「超雪旗ってわけよ」
　と説明になってない説明をしていた。雪旗自身、このやり取りの久々さにまた笑みを零して、また先程のようなやり取りをするという結局何も変わらないやり取りを終えると。
「あ、ラッキースケベ」
　と雪旗が言うと、そのラッキースケベを行ってた上条自身は目をぐるぐる回しており、どういう状況かと言うと、インデックスとの諍い中に五和にぶつかってしまってという状況だ。
「すげぇな。健在って訳か」
　と上条のこういう体質を些か羨ましがるのは雪旗だったが、それすらも見破られた。結局ボッコボコにされて、あたふたしていると、ア

ンジェレネが全員が話を聞いてくれない状況に、すごい行動に出る。
「ちゅうもーくっっ!!!!」
と言い、ルチアのスカートをバサッ!! と捲る。それを見た雪旗の一言。
「パンツだ……」
次の次こそ、凄まじい閃光が迸った。無論、麦野が発生させたものだ。
全員で食事をする。と言っても天草式は決まった食事作法をしなくてはいけないので、食事をしてないが、そして前も思ったのだが、アンジェレネはやっぱり食事に執着が強いようだ。それを見て、雪旗はやっぱり白い居候シスターを彷彿とさせてしまう。すぐそこにいるが、視線をそちらにずらすが、インデックスは気付かない。
そしてまたも、おしぼりを持ってくるのは五和だ。
(またやってんのか、しつこすぎないのがポイント……?)
「何見てるの?」
と滝壺が久々に声を発する。
「ん、いや、おしぼり作戦は成就するかなって……」
「おしぼり……?」
と顔を傾げる滝壺のしぐさにキュンッと来たのは秘密だ。
(麦野にもやってもらいたいところだ。ギャップ萌えっていいよね……)
と内心思ってる雪旗。
「それにしても、どうしてアドリア海の女王が術式の名前になってんだ?」
と上条が聞くと、オルソラが答える。
「その昔、ヴェネツィアとローマ正教は相当に仲が悪かったのでございますよ」
それに続いてインデックス。
「ローマ正教がヴェネツィアを一撃で葬れるように整えたのが、アドリア海の女王なんだよ」
「葬るって……爆弾か何かなのか?」

上条が聞くと、インデックスはさらに詳しく言う。
「破壊されるだけじゃない。その歴史や文化そのまま全部奪われるの」
「全部……」
と上条が呟くと、アンジェレネは言う。
「シスターアニェーゼはきっと何も知らないと思います、知っていたら黙ってるはずがありません！」
「ようは、その魔術が発動する前にアニェーゼ＝サンクティスを助け出せって事だろうけどよ……かなり難問なのよな」
そう言うと、ルチアが立ち上がり言う。
「それでもいかなくてはなりません。このままではシスターアニェーゼが廃人になってしまいます!!　それを黙ってみてろというのですか!?」
それに続いてアンジェレネが。
「私はいつもシスターアニェーゼに助けてもらっていたから、このままお別れなんて絶対に嫌です！」
「だが……敵は厄介だぜ？」
「海底コースターを使えば艦隊の動きが止められるかも！」
「動きを止めた程度でどうにかなるとも思わんのよな！」
アンジェレネが弱々しく。
「そ、それは……」
そこで入ってくるのは上条だ。
「なあ、建宮、もういいんじゃねぇのか？　俺達が議論するのは、アニェーゼを助けたいか助けたくないか……それだけなんじゃねぇのかよ？　アイツはわざわざ自分を逃がすチャンスまで棒に振って、仲間を助けた。このままじゃアイツの思いは利用されて破壊されちまう。ヴェネチアの破壊だって何もかも、アイツを助けりゃいい!!　お前はアイツを助けたくなくないのかよ!!?」
と言った瞬間だ。コソコソと麦野が耳打ちする。
「なあ、あんな熱血野郎なの？　アイツは……？」
雪旗がそれに対して。

「あぁ、アイツはああいうヤツだよ。ああいう熱血ヒーローだよ」
と言う。麦野とはあまり仲が良くなりそうにないタイプだな。と思いながら、建宮だって当然同じ考えだ。そこはクリアしている。あとはこちら次第だったという訳だ。
「我らが教皇から得た教えは!!」
と言った瞬間。天草式の全員が。
「救われぬものに救いの手を!!」
と声を揃えて言う。全員が準備を整えて、氷の戦艦へと向かおうとしてる。
「では、はじめんのよ……」
と紙を取り出す。向こうも異常に気付いたようだ。向こうから砲撃が来る。打ち落とそうとしているようだ。しかし、それはすべて無人艦隊。本当の狙いは下から、と思わせておいての、それも囮だ。
そして全員が氷の戦艦に入り込む事が成功した。目指すは女王艦隊。そこに待ち構えていたのは大勢のシスター達。勿論全員武具を持っている。すべて魔術的なものが含まれているだろう。と思った途端、上条達の上から車輪が放たれ、それが爆散する。そしてそのまま大半のシスター達がその衝撃で倒れる。上条達がその隙を突き、進もうとしたが、それを残りのシスターが許さない。
砲弾。そんなシスター達を容赦なく打ってくる。このシスター達だって結局は囮のようなものだ。その程度の価値でしかない。
そのままアンジェレネが魔術を使用し、全員を守ろうとしたが、それに砲弾を打ち、氷の塊がこちらに落ちてくる。
「チッ、クズ野郎が……っ!!」
雪旗が忌々しそうに奥歯を噛み締めながら、竜王の息吹を使おうとしたら、麦野が。
「あんなもん、簡単に吹っ飛ばしてやるよ!!」
超能力。それはやはりというべきか、凄まじい。迸る閃光で氷の塊が粉々になる。だが粗い。所々に大きい氷の塊もある。雪旗はその大きい氷の塊を飛んで、殴り粉々にする。
「いえーいっ!」

と雪旗がそれに対して麦野が。
「はぁ……」
とテンションが低めで返す。だが、パチンッと二人でハイタッチ。ハイタッチは許容してくれたようだ。そしてシスター達は一応無傷のようだ。
「はぁ……ったく、本気でぶっ飛ばす……」
雪旗が沸々と闘志を燃やす。

力を合わせて、全員で

大群のシスター達は、一切の情け容赦なしにこちらに迫ってくる。どうやら向こうも本気のようだ。雪旗は一応、助けてやったんだけどな、と小声でぼやく、勿論誰一人として聞いてないが。

「いけっ!! 何がなんでも、あの子を連れ出してこい!!!」

と叫ぶ建宮。雪旗達もその声に従い、雪旗達が走り出そうとしたら、それよりも先にシスタールチアとアンジェレネが動き出す。よっぽど助けたいという意思が見られた。

「シスター達はお前らに任せたぞ、麦野達もあっちを手伝ってくれ！」

「ったく、てめぇが命令するとか、何様だァ？」

「命令じゃなーい！ お願い！」

「チッ、しゃあねぇな」

そう言うと、麦野と絹旗は残る。ちなみにフレンダ、滝壺、フレメアはここには居ない。別の場所で待機させてもらっていた。船はどうやら多く用意できるようで、その中に待機してもらっている。天草式の面々には感謝だ。

「……いくぞぉ！ 絹旗！」

「はい！ 超わかってますよ!!」

二人の連携プレイでどんどんシスター達を排除していった。ちなみに誰一人殺さず、無力化させてるところが、戦力の差を思い知らされる。

戦艦内部は雪旗。上条、インデックス、オルソラ、シスタールチア、アンジェレネだ。戦艦内部に二手に別れて、移動する。女性陣と男性陣にだ。

「さてと、一体どこにいるかな？」

「さっさと助け出そうぜ！」

走りながら、場所を探すと、氷の兵が現れる。そのまま攻撃してくるのを、雪旗と上条は殴って倒す。能力で破壊できるので、結構楽だった。それから、しばらくすると、インデックスから電話が掛かってくる。

それによると、どうやら刻限のロザリオという術式は嘘情報らしく、ローマ正教内部にのみ伝わる術式らしい。そんな電話をしていると、天井から自分達を押しつぶせる程の大きさの氷の塊がこちらに迫ってきた。とっさに上条が右手で破壊する。そして、そこから現れた人物。

ビアージオ＝ブゾーニだ。

「その右手、承服できないね。そんな主の恵みを拒絶する力など、あまつさえ、それを武器として扱うなんて。私はビアージオ＝ブゾーニ……主の敵に引導を渡そう」

「へへっ、負け惜しみってやつか？　外道が……アニェーゼの場所はどこだ？」

怒りに任せて、攻撃などしない。場所を聞き出すのが、先だ。まあそれでも……。

「言うと思っているかな？」

言わなければ、話は別だが。先に動くのは雪旗。一気に距離を詰めようとしたが、その前に十字架を取り出すビアージオ。それを見ると、とっさに身を引く雪旗。さすがに魔術を無視して攻撃しようとか、そういうふざけた真似はしない。だが、そんなものに意味はなかった。一瞬で巨大化した十字架に体を押さえつけられる。だが、肉体強化を使い、一気にその場から抜け出すが、二つ、上条にもそれが圧し掛かっていた。当然、それを右手で破壊する事に成功したのだが、その右手が地面に触れていたのだろうか、雪旗を含め、穴の開いた地面に一緒に落ちてしまう。

綺麗に着地する雪旗とは違って、上条はドサッと腰を打つ。

「っつぅー……」

「大丈夫か」

手を貸し、上条を起こす。

「悪い」

起こしたと思ったら、上から巨大化した十字架がまたもや、来る。数は三つ。縦に落ちてくるのを上条と雪旗は転がって、避ける。だが、次の十字架は小さなまま、鋭利になって、こちらに一気に降り注

ぐ。さすがにあぶない、道を塞いでる十字架を上条は右手で破壊する。雪旗はなんとか、それを掴みながら、向こうへと投げる。無論、肉体強化を使ってだ。
「ぐっ?!!」
そして上条が壁に右手をつけ、部屋がある。そこへ転がるように入っていく、雪旗もそこへ行くと、ビアージオも来る。
「まったく、あまり壊さないで貰いたい、向こうの完成度に影響が出るのでな」
「向こうだと……?」
「刻限のロザリオだ。この期に及んで知らぬとは言わせないぞ?」
「ともあれ、てめぇを潰して、アニェーゼ連れてくりゃ、それで終わりだ」
ビアージオはまた十字架を用意する。数は七個。巨大化して、襲い掛かってくる。小さな部屋なので、避ける事ができない。上条はその場で一瞬たじろぐ。だが、直撃する事は無かった。
「ヴェネツィアをどうこうできるだけの力をてめぇが持ってると、勘違いしてんじゃねぇぞ!」
上条が巨大化した十字架を破壊して言う。だが、向こうはどうやら上条が考えてるような事をする気は無いようだ。
「シモンは『神の子』の十字架を背負う!」
すると突然、身体が押しつぶされるように重くなる。どうやらこれも術式の一つだろう。なすすべなく上条は倒れこむが、雪旗は肉体を強化させてる為か、なんとか耐えてる。すると、ビアージオは巨大化させた十字架をいくつも、こちらに投げてきた。
「ま、ずい……ッ!」
雪旗は倒れてる上条を庇うように体で覆う。そのまま巨大化した十字架は一気に降り注がれ、地面へと穴を開けるほどの衝撃だった。
場所は変わり、インデックス側だ。どうやら向こうにはかなりの数の氷の兵が居る。近くには扉があり、中に入ればおそらくアニェーゼが居るのだろう。氷の兵は強い。だが、なんとかシスタールチアとア

ンジェレネが居るお陰か、そこそこ相手ができているようだ。
　そして、氷の兵が居たが、とりあえず、全員で扉の中に入る事に成功したようだ。中にはアニェーゼが居る。とても大きな氷の塊に体を預けている姿だ。そしてアニェーゼがシスタールチアとアンジェレネ、そしてオリアナ、インデックスの姿を見て驚く。
「あ、あなた達！　一体なぜここに!!」
「それは私達のお言葉です。シスターアニェーゼ!!　どうして逃げようとしないんですか！」
「そ、そうです！　私達はあなたともっと一緒に居たんです」
　二人は懇願する。アニェーゼは二人にとって、とても大事な人なのだろう。この言葉だけでそれがすぐにわかる。それを聞き、オリアナは少し微笑む。
「私は……私の意思でビアージオに従ってるんです！　だから、あなた達はさっさとここから立ち去りなさい！　今がどういう状況かわかってんでしょう!?　早くしないと!!!」
「「嫌です!!!」」
　二人の言葉が重なる。意地でもアニェーゼを連れて行くつもりだ。その為にわざわざここまで来たのだから、当たり前だろう。二人はアニェーゼを見据える。揺れるアニェーゼ。
「困るんだよね、そういう事をしてもらうと……君が死んでも、計画は途絶えない。だが面倒だ。他の適正者を探すのが、私は面倒臭い事が大嫌いなんだ……」
「貴様……」
　歯噛みするルチア。殺意すら湧く。シスターアニェーゼを死なせたくないからここまで来たというのに、邪魔が入る。現時点でここに居る誰一人、ビアージオには勝てない。差がありすぎる。構えるが、ビアージオが止める。
「あまり暴れないでくれないか？　ここを安易に傷つけられると、困るのでねぇ」
「対ヴェネツィア用大規模術式、そんなものをなぜ今更？」
　オリアナが聞くが、ビアージオが否定する。

「そんなモノの為じゃない。その先だ。アドリア海の照準制限を解く。その為の刻限のロザリオだ」
「まさか、あなた達は邪魔と感じた都市を破壊するつもりですか!?」
　ふざけすぎている。あれだけの大規模術式だ。その制限を解かれたら、それこそ、最悪の結果を招くに決まってる。
「アドリア海の女王はその都市に関わったすべてを破壊する。それと同じ事を敵対する都市に向かって放てば、どうなると思う?」
「まさか、学園都市を!!?」
「あらゆる科学技術は学園都市の影響を受けている。それをすべて破壊するとなれば、忌々しくも、世界の半分を包み込んでいるサイド全体を一夜にして、破壊する事ができる!!」
「それで、皆が幸せになるとでも!?」
「思わんよ!　魔術サイドでも、敵対するものは居る。だが、それを続けていき、いずれ不純物は取り除かれる」
「あなたはっ!!」
「あんなヤツの言う事を聞いても無駄です!!　アンジェレネ!」
「は、はい!」
　二人はビアージオに向かって、術式を放とうとするが、それよりも先に、ビアージオが動く。
「十字架は悪性の拒絶を示す!」
　巨大化する十字架。その数は四つ。そして、そのすべてが綺麗にオルソラ、インデックス、ルチア、アンジェレネを押しつぶす。
「ぐっ!!」
　全員が押しつぶされ、動く事ができない、
「さて、少し早いが、始めるか、シスターアニェーゼ」
　そう言うと、巨大な氷の塊の真ん中に小さな穴が開く。
「喜べ、君は十字教の歴史上、最も多くの敵を葬った栄誉を得る!」
「や、めて……シスター……アニェーゼ……」
「シスター……アニェーゼ……」
　そして意を決したように、アニェーゼはビアージオの方を見る。どうする事もできない状況だ。だがそれでも。

「私は……シスタールチアとアンジェレネと……まだ一緒に居たい!!
面倒を……みたい!! 他のシスター達とも一緒に居たいんですよ!!」
彼女は対抗する。ビアージオには勝てないだろう。だが、それでもこの四人を逃がす事ぐらいは、隙を見て、逃げる事ぐらいはできるかもしれない。その言葉に彼女達は重たい十字架を必死の思いで、退かす。そして、シスターアニェーゼのところまで行く。
「私達も一緒に居たいです!」
「私もです!!」
それを見たビアージオは憤る。
「舐めた口を聞いてるんじゃねぇぞ!! 罪人がぁぁぁ!!」
そして十字架を投げる。
「シモンは『神の子』の十字架を背負う!!!!」
全員の身体は押しつぶされる。誰一人動けない。苦しそうな声を上げる彼女達。シスタールチアとアンジェレネを見て、一瞬心配そうな顔をするアニェーゼ。そんな事を気にせずにビアージオはアニェーゼの顔を蹴り上げる。
「ぐあっ!!」
一気に飛ばされるアニェーゼ。どうやらこの術式は他のシスター達の装備品の重量を攻撃に変換させてる術式らしい。だがそんな事がわかった程度で、彼女達に突破口は見つからない。立ち上がろうとするアニェーゼを見て、ビアージオが嘲笑する。
「そんな軟弱な腕で、やるならもっと頑丈な腕を用意しろ!」
そして、声が響いた。それは誰もが待ち望んだ声だろう。
「なら、こんな右手でいいか……?」
ビアージオがアニェーゼから声の主の方へ視線を移す。そこには上条と雪旗が居た。そして上条は右手を空へ掲げ、そのまま重量は消される。
「貴様……異教のサル共がァァァ!!!」
「死体ぐらい確認しとけよ、アホなのか? アイツの右手はお前が思ってる以上に厄介な代物だぜ?」

上条の方を親指で指して、雪旗は笑みを浮かべながら言う。そして二人同時に一気にビアージオに迫る。ビアージオが十字架をこちらに向けてきたが。
「おせぇ!!」
上条が右手でうち消し。そのまま殴る。そして雪旗はそのまま吹っ飛ばされたビアージオに追撃し、殴る。それだけでビアージオは動けない。
「ありがとな、アニェーゼ。もしもお前が居てくれたおかげで、どうやら全員無事みたいじゃねぇか」
雪旗が言うと、アニェーゼはそっぽを向く。頭を軽く掻く雪旗。そして上条がアドリア海の女王の壊し方を聞くと、どうやらここの部屋だけが代えが無いらしく、どうやらココを完全に破壊すればいいのだと、上条が思った瞬間、アニェーゼが苦しみだす。何かと思った瞬間、ビアージオの方を見ると、十字架が光っており、どうやら刻限のロザリオを発動させようとしてるようだ。だが完全には使えないようで、力のみを発動させているようだ。そして今、起こそうとしてる事は自爆だ。そして天井が何やら突起物が出てくる。そして一瞬で景色が変わる。全体的に暗くなった感じだ。ここは大規模魔術装置のようで、壁や床を壊した程度では、完全破壊は無理だ。そしてこのままでは、爆発だけで、かなりの広範囲に被害が加わるようだ。そしてアニェーゼもかなり大変な状態だ。
「おい、お前らは先に逃げろ。ここは俺と上条でなんとかする、他のやつも連れてな」
「な！　お前も逃げろ！　雪旗」
「ざけんな！」
「ですが、あなた達は！」
とルチアとアンジェレネも心配したが、雪旗が笑顔で。
「後で必ず合流するから、心配するな。アニェーゼも心配だ……早く安静できる場所に連れてってやれ！」
そしてやっと折れてくれた彼女達は心配そうな顔をしたまま、とりあえずこの部屋から出て行く。どうやらビアージオは上条をローマ

正教の強敵として、判断しているようだ。最後の最後ですべてを巻き込んで、上条を倒そうとするビアージオ。
上条がその言葉に憤り、一気に駆け、右手で殴ろうとする。雪旗もすぐさま駆ける。そしてビアージオは十字架を巨大化させる。複数の巨大な十字架を右手を使って、上条は複数の十字架を無効化させていく、次に鋭い小さな十字架を複数上条達に投げる。それも雪旗と共に上条は避けていく。
次にビアージオは十字架を伸ばし、飛んでビアージオの元に来る上条を飛ばそうとしたが、それを雪旗が横から十字架をぶっ飛ばす。
「ぐっ！」
そして上条は一気にビアージオを一気に殴りぬけた。どうやら持っていた十字架の全てを壊したようだ。アニェーゼ達を助ける事になんとか、成功したようだ。
そして戦艦が壊れていく。雪旗は竜王の息吹を使い、戦艦に大穴を開ける。穴の先に外が見える。雪旗は上条を背負い、一気にそちらに向けて、走り出す。当然、先程魔術を使ったので、体全身がボロボロになっている。だがそんな事すら構わず、彼は一気に出る事ができたようだ。そして水に浮かびながら、彼は崩壊していく戦艦を見ていた。

ゆるい一日

その後、まあいろいろあったが。とりあえずは全部片付いたようだ。アニェーゼ達はイギリス清教に入ったようで。そして上条達は一応、助かっていたので、そのまま旅行を続行ができた。そうして五泊七日の旅を満喫していた。上条達だ。だがしかし上条は知らなかった。その後待ち受ける、恐怖を。

ちなみに旅行の間は雪旗はアイテム女性陣全員にパシリを受けていた。

そんなこんないろんな出来事があった。旅行も終わり、学校へと行く。ちなみに単位的な部分は気にしない。どうとでもなるし、と雪旗は思っていたが、上条的にはどうなんだろうか。そしていつの間にか、Yシャツから学生服に変わっていたりしてる。もうそんな時期か、と雪旗は遠い目だ。ちなみに雪旗は黒い無地のTシャツに学生服を着て、前のボタンを全部開けてる。ちなみに教室で静かにしていたら、上条、土御門、青髪の三人が吹寄に何かしでかそうとして、頭突きを喰らっていたな、と平和を感じていた。

学校も終わり、適当に過ごしてる。今日は一人、誰がなんと言おうと一人。寂しくは無い。絶対に。

(どうして、今日に限って誰も何も言ってこなかったんだろ？　まあいいか……それにしても暇だなぁ。地下街にでも行くかぁ……)

そんな事を思っていたら、上条達に出くわす、しかも、何やら愛玩奴隷だのなんだのというふざけた事が聞こえた気がした。それを女子中学生に言ってる気がした。

「……おい、上条」

と頭に一発重たいのを喰らわした。

「いっづーっ!!?　何しやがんだ雪旗!?」

「いやいや、何やらふざけた事を抜かしてるなぁ……と」

「あれは、御坂がやれって」

「いや、私は言ってないわよ!!?」

と美琴は絶賛否定中だ。そのままもう一度、重たいヤツを喰らわし

た。そして聞くとどうやら大覇聖祭の時に賭けをしていたらしく、その罰ゲームとして、付き合わされそうになってるようだ。
そのまま待ち合わせをした上条と御坂だった。
今日は昼前に学校が終わっていた為、昼飯まだだったりする。また上条達はソーメンを沢山貰ったようで、いろいろと困ってるようだが、一切手伝うつもりは無かった雪旗。ソーメンをいっぱい貰っても、雪旗も雪旗で困る。今日は面倒なのでそこら辺で買ってきた弁当で済ませてる雪旗。
「……ったく、隣がうるせぇ……」
と上条とインデックスの騒ぎ具合（ほとんどインデックス）に呆れている雪旗は今日も静かに過ごしていた。そして昼飯を食べ終わると、そのまま地下街に行く為に外へ出る。時間が大分経っているが、とりあえず、最初の目的通りに地下街へ行こうと思った。特に用事がある訳じゃないが、暇だ。暇なのだとてつもなく、今日に限って誰一人相手をしてくれない。前世を軽く思い出す。
（はあ、死にたくなってきた……死ねないんだけど……後、だんだん空模様が怪しくなってきたな……？）
そんな事を思いながら、空を仰ぎ見ていた。ちなみに上条は今現在、修羅場中なのを雪旗は知らない。そんなこんなで彼は一人でとぼとぼと歩いていると、倒れてる純白シスターとこれまた白い肌に白髪。そして赤い瞳というアルビノを思わせる、幻想的な格好をしている一人の男が居た。そんな幻想的な格好をしているが、目つきは鋭い。
（……インデックスと一方通行とは……これまた奇妙な組み合わせだな……）
そのまま、そんな状況を見てると、どうやら某有名ハンバーガー店に入っていく。それをコソコソとつけていく雪旗の笑みは黒かったのだ。
そして中に入ってビックリ仰天。勢い良く注文するインデックス。
「……やべえ、遠慮を知らない人だ……」
そんな感じで見守っていたら、一方通行（アクセラレータ）に睨まれる。どうやら凝視

していたのを気付かれたようだ。しかもいかにも機嫌が悪いという感じでこちらに杖を突きながら、迫ってくる。
（えぇ!?!! なんかこっち来るんですけど!?）
ビビリながら、彼はとりあえず周囲をキョロキョロするが、周りに誰もいないし、席も窓際の為、特に取りに来るようなモノの無い。徐々に自身の体温が低くなるのを感じる。そしてついに辿り着く一方通行（アクセラレータ）。
「おい、オマエ……何見てンだァ？」
一方通行（アクセラレータ）と会話するのも久々だ。あの時は敵同士だったが、今回は違う。まあやりようによっては敵になるが、そのまま微笑みながら雪旗は言う。
「あの、そちらの連れ……俺の知り合いなんすよ……ていうか、俺の事、覚えて無いか？　まあ黒髪ツンツンの方は覚えてるかもしれないけど……」
「はァ……？」
怪訝そうな顔をこちらに向ける一方通行（アクセラレータ）。そしてしばらく考え、気付く。
「あァ、オマエ、あの時の三下かァ……」
「あぁ？　テメェ俺が本気出してなかったから勝っただけで、調子に乗ってるんじゃねぇぞ？　これからテメェより強いヤツわんさか出てくるんだから、体を鍛えとけや、モヤシ野郎……？」
なぜここで反抗してしまったのか、言葉が最後まで出た瞬間に気付く雪旗。だが、向こうはそんな事待ったなしだ。首に手を掛け、チョーカーに電源を入れる。完全に殺る気だ。
「調子乗ってンじゃねェぞ三下がァァァァ!!!」
店が壊れるっつの!!　と内心叫びつつも、とりあえず雪旗は本気で止めに入る。彼の弱点はチョーカーだが、それ以上に鉄壁の防御の反射がある。だが、魔術に対しては、完全に初見の為、上手く反射する事ができないだろう。一瞬で竜王の息吹を飛び出そうとするが、ここで一つ、思う。もしもここで暴れたら、どうなるか。答えは簡単だ。尋常じゃない被害が出るだろうし、下手したら、インデックスが傷つ

くかもしれない。それだけは避ける為、襲い掛かってくる一方通行に対して、そのまま受ける。そのまま窓ごと、破壊され、外へと飛び出す雪旗と一方通行。一瞬でギャラリーが集まってくるが、知った事ではない、外に出た瞬間が勝負だ。雪旗はそのまま反射を貫く竜王の息吹（ドラゴンブレス）を使う。さすがに本気ではない、できる限り威力を抑えながら一気に放つ。それでも威力は絶大だ。反射を破り、そしてそのまま一方通行にもダメージを与える。死ぬ程ではないが、それなりにダメージが加わっただろう。

「はぁ、はぁ……やりすぎだっつの……」

「オ、オマエ……何をしやがった？」

一方通行にしてみれば、反射を破るだけの攻撃を受けた事自体信じられなかった。あの時、あのツンツン頭の少年にも破られたが、まさか他にもそれをできるヤツが居るとは一方通行も思わなかっただろう。

「……ったく、教える訳ねぇだろ。それより、さっきは悪かったよ。ほら、仲直りの握手だ」

「……チッ」

握手は拒絶、だが、どうやらさすがに暴れる事はもう無いようだ。

「……はあ、お前さ、あんまり反射に頼りすぎるの良くないと思うぜ？

他にもやりようはいくらでもあるんだからよ」

「……」

そのまま雪旗の助言も無視して、杖を取り出し、チョーカーの電源を切り、また歩き出す。彼自身、別の用件があって今は忙しいのだろう。

「あ、そういや、地下街行こうと思ってたんだっけ、三人で行くか？」

「はァ？」

「うん！　行くかも！」

こうして奇妙な組み合わせで行く事になった。

「オイ、待て。俺はまだ一緒に行くなンて――」

そんな事を言ったが、引っ張られ結局三人で行くことになった。一方通行は忌々しそうに雪旗の方を見てくるが、雪旗は特に気にした素

振りすら見せない。
（時間ってやつはたっぷりあるからなぁ……）
　そんなこんなで地下街まで辿り着いた。久々の地下街だが、あの時は地下街で事件があったが、今回は地下街では事件は無い。そういえば、御坂妹がここで上条と会ってた気がする。
（確か、最後に助けたのが、１００３１号だから……そうか、一人助かってたっけ）
　そうして、地下街を歩いていると、案の定と言うべきか、雪旗は上条と出くわす。
「よぉ、上条と……ちっちゃい御坂？」
　そこには小さな御坂美琴に似た女の子が居た。もちろん雪旗は知っている。一方通行のヒロインである打ち止めだ。考えてみれば、初めての対面である。
「ええっと……あなたは確か、あの人にボコボコにされてた人!!」
　ズビシッ！　と人差し指で指され、しかもかなり不名誉な覚えられ方をしてる。一応、助けに入ったのに、特に功績は残せていないので、こういう不名誉な覚えられ方をしたのだろう。少し悲しくなっている雪旗だったが、とりあえず上条にインデックスが来る事を伝えた。
「そっか。わかった。サンキュ」
「おう」
　こうして各々、帰ることになった。雪旗はもう少しだけ地下街に居る事にした。そうこうしてる内に辺りは暗くなっていた。しかも雨が降っているという状況だ。
（チッ、傘ぐれぇ、持ってくらよかったぜ）
　その時、一本の電話が鳴った。
「はい、もしもし？」
「超、助けてください……」
「は？」
「麦野を超助けてください!!!」
　絹旗の悲痛な叫び。一体何があったか、焦燥感に駆られながらも、雪旗は冷静に今、どういう状況でどこに居るのかを聞きだした。

襲撃者

アイテムはマンションに住んでいる。そこは昔アジトとして使っていた場所なのだが、今ではそこに普通に住んでいる。特に引っ越す必要もないのだろう。全員、一応高レベルの能力者なので、お金の心配などは一切無いし、特に助け合いというものをしてるイメージは無い。

そして彼女達はいつも行ってたファミレスに居るのだ。

「はぁ、暇ね……雪旗も呼んでくりゃ、良かったわ」

「超どうしてですか？」

「ドリンクバー係」

「あぁ、今呼びます？」

「いや、いいわ」

「サバ缶はやっぱり最高って訳よ！」

「……」

そんな感じで緩い四人組である。結構長時間入り浸っているのである。今日は学校自体も早く終わり、特にすることもなくなっている彼女達は結局、こうして緩く過ごしているのだ。

そんなこんなで彼女達は別々に行動する事自体はそんなに多くない。フレンダは友人が多いらしく、結構別行動を取っているが。そんなこんなで、彼女達は今日も集まっていた。

「さてと、どうする？」

「超何がですか？」

足をパタパタさせながら、麦野の問いを聞く絹旗。

「いや、予定だよ。暇すぎて腐りそうなんだけど、何か楽しいことないの？」

「麦野ってそういうキャラでしたっけ？」

「何よ、キャラって」

「いえ、では超映画を見に行きましょう」

「「却下」」

全員が声を揃えて言う。

「なんですか!!」
「アンタの趣味に付き合うつもりは無い！」
そんなこんなでゆるい空気に見舞われていた四人だった。その後、ファミレスを後にして、適当に歩き回っていた。交通機関を利用したりはあまりしない四人組なので、特に遠出らしい遠出もしないのだ。四人で歩いている最中に何度かナンパまがいなことをされたが、彼らは運が悪かったとしか言い様がない。
そうしてる内に人通りが少ない場所へ来ていしまっていた。このまま行っても意味が無いので、引き返そうと思った四人だった。
「ていうか、麦野は超何をしたかったんですか？」
「いや、なんだろう。暇だからって慣れないことはするもんじゃないわね」
「……」
少し呆れ気味の絹旗だった。
瞬間だった。何かが降ってくる。
「?!!」
全員が一斉に散りばる。絹旗は一瞬の判断で滝壺を抱え込みつつ、散る。
「……なんだ？」
麦野が言うと、そこから現れた人影には見覚えがあった。
「……学園都市第二位……垣根帝督……!?」
「あぁ、第二位だ。よく知ってるな？　さすが第四位だ」
『未元物質』を扱える彼に、まともな攻撃はまず通用しない。そして『スクール』のリーダーである為、他の連中も居るかと、絹旗は辺りを見回すが。
「他の連中はいねぇよ。今回は俺だけだ。お前らの始末を頼まれちまってな。お前ら……生きて帰れねぇぜ？」
ひとまず、フレンダと滝壺は逃がし、麦野と絹旗のみで交戦する。翼を扱い、衝撃波を生み出す。その衝撃を受け流しつつ、麦野は原子崩しを放った。ただの光線だが、これを受ければ、ただでは済まないだろう。だが垣根はそんな原子崩しを受け流すどころか、消し去って

しまった。
「っっ!?」
「俺の『未元物質』に常識は通用しねぇ」
二対一だと言うのに、戦況は圧倒的に麦野達が不利。超能力者と大能力者が組んでるというのに、超能力者一人にこの始末。どうやらよっぽど相手が悪いようだ。近距離戦では最強に近い絹旗だが、翼が邪魔で全然近寄れない上に麦野の攻撃は未元物質で消される。八方塞がりだ。どうすることもできない麦野はそれでも諦めなかった。至近で放てば、と麦野は一気に近づこうとする。絹旗は近づきながら、窒素装甲を使うが、だが、能力そのものを消され、そのまま衝撃波で吹っ飛びそうになるのを麦野がキャッチ。だが垣根が翼を使って、麦野を叩きつけた。
「ガハァッッ!!?」
「麦野!!」
どうすることもできずに、麦野を連れて、走り出す絹旗。動けない麦野を抱えながら、絹旗は必死に逃げる。車などがあれば、もっと早く逃げられるが、彼女は運転ができない。どこかに居る雪旗に助けを求めるために彼女は走り続けた。自分と麦野が死んだら、次に狙われるのはフレンダと滝壺だ。交流が深かった彼女達を殺されたくない絹旗は必死に逃げる。無様に逃げ続ける。垣根は頭を掻きつつ、追いかける。
「まったく俺は悪者か?」
そんなことを言いながら、必死に逃げる絹旗を追いかける。垣根には余裕があった。満身創痍の二人相手に遅れを取らないし、そもそも二人が万全の状態でも敵わないのだ。この状況で負けるはずがないという慢心を生んでいた。そして建物が多く立ち並ぶ場所へ逃げられ、少しばかり面倒だと思った垣根。
「チッ、まぁいいや……」
そして空高く飛び上がり、場所を確認する、一瞬で見つけ、そちらに一気に向かい、絹旗と麦野の前に立ちはだかった。絹旗は麦野を抱えている。

「さてと、さっさと終わらせてやるよ」
翼を使って、至近で打撃を喰らわそうとした、至近距離でさっさとやっちまおうという気持ちがあったのだろう。抱えられている麦野は動けないし、絹旗も近距離戦を得意としているが、特に気にする必要もなかった。さっさと終わらせたいという気持ちの方が強かったし、それにこの二人以外にも殺らなきゃならない連中が居るので、さっさと終わらせにかかった。その慢心が生んだのだ隙を二人は見逃さなかった。
「麦野!!」
と抱えられていた麦野が抱えられたまま、原子崩しを発射した。
「なっ……!?!!」
至近距離からの原子崩し、さすがにあの一瞬で避けることはできないと思った。閃光が何度も瞬いた。そうして何度か発射するとガス欠状態のように、彼女は全身に疲労感が襲ってきていた。
「はぁ、はぁ、はあ……」
そこには人影はなかった。蒸発したか。それとも避けられたか。前者であってほしいと二人は願った。だが、現実は非情だった。空高く、若干焦げたスーツを身にまとう垣根が居た。
「……さすがにさっきのは危なかったぜ。次は慢心はしねぇ。さっさと終わらせるぜ」
翼を扇いで、衝撃波を生み出す。情け容赦の一切ない一撃だった。とっさに絹旗が窒素装甲でガードするが、吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられる。
「……っ!」
麦野はすぐさま、絹旗を起こして言う。
「絹旗!　最近携帯電話買ってたよな?」
「え、はい……」
「それで雪旗を呼べ、私はアイツをなんとか食い止めるから……」
「ちょ、超麦野らしくない一言です」
「仕方ないわよ。もうどうする事もできないからね……逃げながら、電話した方がいいわ!!　早く!」

「は、はい!!」
そのまま電話を掛けながら、絹旗は逃げ出す。少し後ろを見ると、なんとか麦野もギリギリのところで耐えている。そして絹旗は雪旗に電話するのだった。

雪旗硬地ＶＳ垣根帝督

電話で聞きつけ、すぐさまその場所へ行く。幸い、地下街からそう遠くない場所だったので、すぐに辿り着く事ができた。第七学区での交戦だ。

だが時間帯が時間帯だけに人通りが少なく、特に気にする人達も居なかった。絹旗を見つけ、そのまま麦野の元まで行った。

「……!!」

倒れている麦野にトドメを刺そうとしてる垣根に竜王の息吹を放った。

身体から大量の血が流れ出るが、気にしない。垣根も一瞬のことで多少、遅れを取ったが、翼で一気に空へと駆け上がる。

黙ったままだ。黙ったまま、雪旗は麦野に近づき、抱える。

そのまま絹旗の所へ行こうとするが、途中で垣根が翼で衝撃波を巻き起こすが、能力でなんとか留まる。そして絹旗の所へと着く。

「麦野を病院へ連れてってくれ」

「ちょ、超一人で戦うつもりですか?!」

「……あぁ」

「無茶ですよ!!　私も!」

「いいから行けって、心配するな。それに麦野を早く病院に連れて行って欲しいしな」

といつもの調子で言う雪旗。それに対して、納得いってない様子の絹旗だったが。

「麦野を病院に連れて行ったら、すぐにきます」

「おう、頼むわ」

そう言って、麦野を抱えて、絹旗は病院まで走っていく。そして雪旗は垣根の方を見て言う。

「……おい、垣根帝督っつったか」

「あぁ?　つか、テメェ何してくれんだ?　俺の獲物をよ?　つかさっきのなんだ?」

「知るか。さっさと降りて来いよ」

「バカか？　こっから狙い撃ちするに決まってんだろ！」
そう言いながら、翼で衝撃波を巻き起こす。
それに飛ばされないように能力を使い、そして衝撃波を撃ち終わったら、一気にジャンプして垣根の所まで飛ぶ。
「!?」
「どうだ？　驚いただろ……俺の力だ――よッ!!!」
垣根の顔面目掛け、思い切り地面へと叩きつけるように殴りこんだ。
垣根は重たい衝撃を受けながら、地面へと急降下。
思い切り地面へと叩きつけられ、血反吐をぶち撒ける。
そして頭上を見上げ、相手の出方を伺おうとしたら、もう既に傍まで来ており、顔面に踵が叩きこまれていた。
そのまま再び、地面へと叩きつけられる。
「どうだよ？　気分は最高か？」
「あぁ、最低だよ!!」
翼を使った打撃だ。六枚の翼が逃げ場無く迫ってくるのを見て、雪旗は小さく呟いた。
「――程度を知れよ。雑魚が」
六枚の翼を受けきり、そのまま翼ごと垣根の体を持ち上げる。これほどのパワーを発揮したのは初めてだ。
それほど、今の自分は際限なく能力を使っているという事になる。そしてそのまま一気に地面へと叩きつける。
翼がある以上地面以外に飛ばしたところで大したダメージは与えられないだろうから地面へと何度も叩きつけていた。
「チッ！　この俺が!!　テメェごときに!!!」
「所詮、その程度って事だよ」
そのまま翼を持って、遠くへと投げ捨てる。
「ハァ……まだ……当然無事だよな？　ボッコボコにしてやるから覚悟しろよ」
「ハッ！　調子に乗ってられるのもここまでだよ!!」
垣根の能力。未元物質は強力だ。

相手がどれだけ強くても、原理自体は物理法則に従っているので、たとえば炎を使った攻撃をしたとしても、未元物質によって遮られてしまうだろう。
だがその点、雪旗は自身の身体能力を上げる能力の為、無効化されない上に、魔術を扱う戦法だ。
いくら未元物質を使えるとしても、原理が不明なモノをどうにかする事はできないだろう。
だから戦法を変える垣根。一旦垣根は全速力で逃げ出す。
「あ、待ちやがれ!!」
雪旗は能力を使い、駆け寄ろうとするが、それでも飛んでる相手には届くことができない。
そのまま逃がしてしまい、まず場所が割れている麦野と絹旗の所へ急ぐことにした。

病院に到着し、まず麦野がいる部屋へ行くことにした。麦野が寝ている部屋に絹旗も居た。
すぐ来ると言っていたが、なんだかんだで心配だったのだろう。雪旗がそのまま病室に入ってく。
「ッ!? まさか倒したんですか?」
「いや、逃がした。もしかしたらここに来る危険性もあるから一応来たんだけど、杞憂だったか?」
「いえ、第二位が狙っているのが私達である以上、こちらに来る危険性が超あります、が雪旗を逃がしたという事は第二位を追い詰めはしたということですよね、ということはここに来るまでに超敵が増える危険性があるか、もしかしたら滝壺さんとフレンダが超狙われるかもしれません」
「そうか……敵増えるかぁ、面倒なことになってきたなぁ……」
そんな事を言っても仕方ないのは雪旗が一番良くわかってるし、それに追い詰めかけたのに、一瞬の油断で取り逃がしたのも自分の所為だ。
その所為で自分の身近の人物に危険が迫っている。

雪旗は少しずつ焦ってきていたが、それでも一応二人が無事という事がわかり多少は落ち着きを取り戻していた。
「それじゃ、まずは滝壺さんに連絡を取りましょう。滝壺さんの力を使えば、第二位の場所も特定できるはずです」
「うっ……！」
「どうしましたか？」
「い、いや……多分、あっちから襲ってくる可能性が高いと思うぞ？ヤツは無駄にプライド高そうな感じだから、逃げたままってのは一番嫌なはずだ。
だから滝壺の能力を使うまでもない」
雪旗は滝壺が能力を使う事が何を意味するかわかっていた。
あれは自分を破壊しつつ能力を行使している。
そんな危険な方法をわざわざ選ぶ必要は無いしわざわざあんな状態にする必要は無い。
「……そうですか、ですが一応念の為に……」
「大丈夫！　心配するな。俺は大丈夫だから！　な!?」
「は、はい……」
絹旗は圧倒されながら、なんとか納得してくれた。これでこれ以上使う事はないだろう、彼女の意思でも無い限り。
「じゃあ、絹旗はできる限り麦野の近くに居てくれ、寝込み襲われたら、ヤバいしな」
「ちょ、それはさすがに危険すぎますよ！　いくら雪旗でも相手は学園都市第二位ですよ!?!!」
「大丈夫ー大丈夫ー。死んだら死んだでそれまでだ。まあ最低でも共倒れ程度にはしとくからよ」
雪旗はそんな軽口を叩きながら、病室から出て行く。
（垣根帝督……そこまで嫌いなヤツじゃなかったんだけどな……俺の仲間に手を出したらどうなるか、思い知らせてやる）
雪旗は今までにない程、ブチ切れていた。

雪旗硬地ＶＳ垣根帝督　続

雪旗の当面の目的は垣根の撃破だ。もしも、こんな目に遭っていなければ、今頃、上条が一方通行のどちらかに参戦してやろうとでも思っていたのだが、今回はそちらは見送ろう。どう考えても間に合うはずがない。

夜、雨が降っている。電気系統の能力を使われると非常に面倒な状況だ。もしも、仲間にそういった連中が居たら、非常に厄介だが、それでも負ける程ではないし、それに向こうも本当にそういった連中を連れてこれるか微妙だ。垣根の仲間でイメージが最も強いのはあの心理定規だ。若干ギャルっぽいが、それならフレンダも負けてない気がする。

「……さてと、どうしてやりましょうかね？」

とりあえずどうしたら良いか、考える。病院から離れる事は最優先だ。おそらく依頼の事よりも俺に執着してくるだろう。性格的に一番が好きそうなヤツだしな。それを理由に一方通行に喧嘩を売ったぐらいだし、依頼を邪魔するヤツには容赦しないヤツだったはずだ。

病院から離れながら、と思ったが、どうやら向こうさんの方が早かったようだ。

「……よぉ、待ってたぜ？」

「あら、この子が？　じゃあ、まずは距離単位は二〇で」

（これが、心理定規か……厄介なヤツを連れてきやがって――ッ！　どうする？　くそ……コイツを殴る事ができねぇのが腹立つ！）

「ハッ、手も足もでねぇか？　弱いものイジメは好きじゃねえんだけどよぉ!!」

ズガンッ！　と強烈な衝撃が襲いくる。一方的な攻撃だ。何度も何度も、繰り返される。

「調子に乗ってるんじゃねぇよ！　テメェ程度のヤツがよぉ!!!!」

意識が徐々に朦朧としてくる。このままでは自分がやられる。自分が少しでも意識を失ってしまえば、コイツは俺の興味が消え去って、すぐにあの二人を消しに行くだろう。それはダメだ。雪旗は気合

だけで、体に鞭打ち、そして立ち上がる。
「……悪いな、テメェを殺すのに、躊躇は無くなったよ――ッ!!」
と攻撃をしようとした、瞬間。目の前に心理定規が現れる。ピタッと拳が止まったと思ったら、垣根が少し宙へと浮かび、翼でこちらの体にダメージを与える。吹っ飛ばされ、近くの街路樹にぶつかり、その場で止まる。体の方はいくら限界が来ようとも、どうとでもなるが、精神面はどうともならない。ここでやられたら、『アイテム』がやられる。これを考えるだけでも恐ろしい上に腹立たしいのだ。向こうに命令を下したのは上だとしても、コイツらにムカつくところもある。立ち上がり、とりあえず服の埃を払う。
「……ふぅー」
少しずつ、クールさを取り戻していく。心理定規と垣根帝督。この二人のコンボは非常に厄介だ。厄介な上に面倒臭い。だがやる事はやるしかない。まずやる事とすれば、二人を引き剥がす事だが、そんな事が可能とも思えない。
「あぁ、雨って嫌ねぇー。ねぇ、さっさと終わらせてよ、私帰りたいんだけど」
「はいはい……ったく我が儘な女だ」
「何よ、協力してあげないわよ?」
「ボロボロなんだ。お前の手なんて、もう必要ねぇんじゃねぇか?
まぁ一応、居とけよ」
少しずつ、近づいてくる。立ち上がった雪旗の表情は見えない。ただ立っているだけだ。もう戦意喪失か? と垣根は思っただろう。だがそれは間違いだ。雪旗は好機を手に入れた。
垣根がたった一人でこちらに来る。あの女の能力は今の状況では厄介ではあるが、彼女自体に脅威は無い。彼女があそこに立ち止まってる以上、すぐにこっちに来る事はできないだろう。
「どうしたぁ? 戦意喪失とか、つまんねぇぞ?」
六本の翼で一撃を喰らわそうとした――その瞬間だった。翼を掴んで、凄まじい力で翼を引き千切った。六本すべてを、だ。
「なっ!? テメェ!!」

「――舐めるな。端っから、俺とお前とじゃ勝負になってなかったんだよ」

閃光が迸る。ボロボロの体に鞭打つ一撃だ。放ったと同時に血が噴水のように噴出し、倒れこみそうになるのを我慢して、最後まで放ち、垣根にトドメを刺した。だが、威力は弱めており、死んでないだろう。最後の最後まで甘かった雪旗だった。

「ハァ――ハァ――……ぐっ……こりゃ、マジで死ぬ……」

頭から、口から、内臓から、様々な場所から血が出てる。修復に大分時間が掛かりそうだ。

「ちょ……嘘でしょ……」

「はぁ――。さっさと病院連れてけ……死んでねぇから……よ」

明らかに自分の方が重症なのに、相手の心配をする彼を、どう表現したら良いのだろうか、先程まで、ずっと殺し合いしていた相手を心配するなど、どういう事なのだろうか。

「……ハッ、あんた変人だね」

そう言って、血だらけの垣根を連れて、『心理定規』は姿を消した。降り続いていた雨もだんだんと弱まっていき、どうやらもう止んだようだ。

「……ふぅ、雨、上がったな」

そう呟き、雪旗はひとまず、病院へと戻った。

「……あ、雪旗――って超ボロボロじゃないですかッ!?」

「んー。大丈夫、大丈夫。俺ってば、結構、運が良いみたいだぜ？　撃退完了ってな」

フッと体の力が抜けた雪旗が絹旗にもたれ掛かる。

「ちょっ!?!!」

「あー、悪い悪い……ちょ、殴るのは勘弁な、今やられたら、冗談抜きでヤバいから……やめてくれよ」

「さ、さすがにそんな超酷い事しませんよ……とりあえず、超連れて行きます」

もう意識も朦朧としていたため、気絶してしまった。

戦いの後の休息

「……」

目を覚ました雪旗――なのだが、体がまったく動かない。それどころか瞼すら開けることのできない状態である。これは完全に能力の副作用のようなモノだと思った。限界値を超えた動きをした代償というヤツだろう。二度と使えなくなる程ではないと思うが、しばらくの間、使用できないという事にはなるだろう。

実際、考えてみても、最近は面倒事が多すぎた気がする。いや、徐々にこれが当たり前になってきていて結構、恐怖を感じ始めている。

「おーおー。随分と気持ちよさそうに寝てるじゃねぇか？」

と声を掛けてきたのは、誰であろう、ヤツである。垣根帝督。通称メルヘンやら冷蔵庫やら、といろいろつけられてる。バレーボール――じゃないや、第二位である。

「コイツ……死んでんのか？」

「い、きてる……よ」

「うお!?」

とガタッと音がする。イスが倒れたのだろう。瞼すら開けれず、視認ができない為、いろいろと不便である。いい加減、目ぐらい開けたいと雪旗は切に願う。

「なんだ、生きてんのか」

「あ……ぁ」

（声を上げるのもキツイ。何気に全身から激痛走ってるし……）

とこれ以上の会話を求めていない雪旗だが、そんな事は露知らず、当然喋り続ける常識の通用しない男。

「ったく、甘ったれた野郎だぜ、俺はお前を殺そうとしたのに、お前は俺どころか、あの女だって手に掛けなかった。まったくもって理解できないヤツだよ、だが気に入ったぜ？　お前の事をよ」

知らん。と雪旗は心の中で呟いた。はっきり言って、前の状況的に考えて、こっちがそっちを気に入る可能性が一ミリもないという事を理解できないのだろうか、理解できないのだろう。

「……どうした？　表情が若干苦いが」
「お、まえ……俺がお前を……気に入ると思う……か？　お前は未遂ではあるが、一応……俺の仲間を殺そうとしたヤツだ……ぞ？」
「はっ、そりゃそうだ。お前に気に入られようなんてのは思ってねぇよ。ただ俺が一方的に気に入ったってだけさ」
「そ……りゃ、うぜぇ……な」
「そうかい。んじゃま、俺はそろそろお暇させていただくわ、じゃあな」
「二度と来るな……」
　ガラガラと扉が閉まった。それから数分経ち。若干、機嫌の悪い四人組が入ってきた。『アイテム』である。どうやら垣根と会ったようだな。と推測する雪旗。
「おい、雪旗。起きてるか？」
「あぁ、起きてらっしゃいますよ……なんですかい？」
　少しずつ、まともに喋れるようになってきた雪旗。薄目だが、目も開けているので、機嫌を把握できた。そして四人は一斉にこっちに飛び込んできた。洒落にならない事態である。
「ギャァァァァァァァ!!!」
　全身から軋む音が聞こえた。勿論ベットの軋む音ではない。体の方だ。死ぬ、死ぬ、死ぬ。本当に死ぬかと思った瞬間であった。今回もし死んでいたら、二回目になっていたかもしれないぐらい怖かった。
「……悪かった!!」
　と麦野が謝罪する。一体何に対する謝罪か理解できなかった雪旗はそれをやめさせ、どういう訳か、説明してもらった。
「私達が……本当は私達の問題だったのに、お前を……巻き込んで……」
「全面的に超私達が悪いですから……」
「今回はさすがに悪かったって訳よ」
「ごめんなさい」
　と全員の謝罪が送られた。それには雪旗もさすがに機嫌がよろし

くない。
「おいおい、どう考えたって俺が悪いだろうが？　お前らを暗部から抜けさせたのも俺だし、今回の問題に首を突っ込んだのも、こうして怪我したのも俺の責任だ。お前らが謝る事じゃねぇし」
　そこで区切り。
「しかも！　俺が聞きたいのは謝罪じゃねぇんだよ！」
　そこで四人は首を傾げる。
「こういう時は謝罪じゃなくて、一言。お礼があれば良いんだよ。困ってる人が居たら助けて、助けられた方は感謝してお礼する。これ常識だぜ？」
「そ、そうか……その、ありがとう。雪旗」
「超ありがとうございます」
「ありがとうって訳よ」
「ありがとう」
　こうして聞いてみると、何気に誰が誰の言葉だが、わかるから不思議だ。と何気に自分の口調をまた気にしだした雪旗はこの大事な場面でボケをかまそうかとも思ったが――。
「おう、どういたしまして……」
　と大事な場面では一応、礼儀なので、ふざけないでいる雪旗だった。四人は一応、お見舞いとして、なんか滅茶苦茶高級そうなフルーツの盛り合わせとか、いろいろとプレゼントしてもらった。
（おお、さすがだ。というか今思ったけど、アイツら金持ちすぎるだろ。いや俺もだけど……）
　心の中で独り言を呟きまくっていた。
　四人は後日も来るそうで、俺は二日間、入院する事になった。思った以上に体の方はボロボロだったようだ。ベットに体重を預け、少しだけ、考え事をする。
（次はえっと左方のテッラだっけか？　そんで、後方のアックア。前方のヴェントは終わってんだもんなぁ、わー、懐かしい面子だ）
　そんな完全、読者目線になっている雪旗。当然だが、彼らと戦う事になるのは、わかっているだろう。彼自身、そのつもりで、ここまで

きたのだ。
次の敵は今まで以上に強大だと言う事を肌で感じていた。

日常から一転

「今日か……」
　そう呟くのは、雪旗だ。今日は左方のテッラとの戦いがある。雪旗が行く事になるのか、よくわからなくはある。しかし一つ大事な事を思い出した。
（俺、小麦粉男とは戦いたくねぇな。こっちでたくさん死人出るし、あんまり人死にに関わりたくもねぇが、どうすっか……向こうもそろそろピリピリしてる頃だしなぁ……はぁ、どうする？　十中八九、フレンダはもう死なないよな？　死なない……よな？）
　そんな風にちょっとばっかし、おっかなびっくりな状況な訳で、ここでいきなりフレンダ退場とかになったら、おそらく雪旗はいろいろとぶち壊れる。それぐらいあの四人に大しては絶大な信頼を寄せているのだ。上条以外でのある意味での心の支えみたいなモノだ。
　ふむ、他に頼れるというか、新たに、仲良くなった（？）と言ったら、誠に不服ではあるのだが、一方的に垣根に気に入られたりとかあったが、特に気にしない。
　そんなこんなで、雪旗は四人で弁当を食べていた。傍から見れば、なんだ、このハーレム野郎はッ!!?　と思われているような、思われていないような――いや、おそらく思われていないだろう。
「おい、雪旗。何か買ってきて。できれば、サバ缶」
「私はシャケ弁当」
「私は……何か飲み物……」
（コイツら……）
　無論、無茶振りに対応する雪旗ではない、最近はそこそこ慣れ、軽く受け流す事もできる。
「というか、麦野は弁当食ってんだろうが……」
「あぁ？　シャケ弁は別腹って知らないのかぁ？」
「あ、ちなみにサケ缶も別腹って訳よっ！」
「……」
「あのなぁ、女の子には一体いくつの腹持ってるんだよ……」

半ば呆れながら、雪旗は静かに思った。おそらく女の子には男にはわからないお腹をいくつか所有しているのだろう……と。

しばらく経ち、雪旗は常に身を構えていた。いきなり土御門がおばあちゃんを銃撃するんだから、割と命に関わるクラスの。いや、しっかりと急所は外していたのだろうが、素人目から見て、それはわからない訳で、いや本当にこればかりはわからない。

銃撃戦なんて一度もやっていない雪旗にとったら、だ。どちらかと言うと、魔術とか超能力とか不可思議系とばっか戦ってきた、銃とかよくよく考えたら、こっちの方が自然なんだよな。やっぱ、世界観不思議すぎんな。なんて事を考えていた雪旗。

時間も過ぎ去り、いつの間にか学校が終わって、適当にブラブラしていた時の事だ。ちなみに全員集合である。今日は珍しくも雪旗がそう集合を掛けたのだ。もちろん、不服の声は聞こえて来たが、彼女達なりに珍しい事態でもあったので、そこまで強い不服は来なかったのが、良かった。

（そう考えると、つくづく俺って振り回されやすいヤツなのかぁ……？）

そんなどうでも良い事を考えてしまう辺りがおそらく振り回されやすい原因でもあるだろう。なんやかんやで本当に振り回されやすい男である。

そうこうして、歩いて着いたのは、オープンカフェ。そしてそこに入るのは初春飾利と打ち止め。珍しい組み合わせである、と同時にとても危険な組み合わせでもある。

軽く雪旗はため息を漏らす。そこに近づく事も考えたのだが、今の状況で話しかけるのはただの怪しい人ではないのか？　と軽く自分の行動を考える。どっちも――いや打ち止めの方は軽く知り合い程度ではある。

初対面の発言は忘れて無いけど。そのまま考えていると、打ち止めがどこかへと行ってしまう。マズい。雪旗はそう思い、一気に駆けると、その前に垣根が来てしまった。

そして垣根と軽く会話をする初春。だが初春の方は素っ気無い。

そして再び、オープンカフェで食べていたパフェに口を付けようとすると、垣根が初春を殴る――はずだった。
「……何のつもりだ？　雪旗」
「俺の台詞……なんだがな？　こんな子どもに何しようとしてんだ？」
今回は四人。雪旗以外にも、『アイテム』の四人がすべて揃っている為、状況的に圧倒的に垣根が不利だ。そもそも雪旗一人でも対処が難しいのだから、だが基本的に傍観する『アイテム』。余計な介入は滅多にしない。
信用されているのか、死んでも良いと思われているのか、判断に困っている雪旗ではあるが。
「……はぁ。言っておくが……俺は邪魔するヤツには容赦はしねぇ」
と翼を四つはためかせる。またバトルか？　と思いきや、雪旗は思わぬアクシデントに見舞われてしまう。
「そ、そこのホストっぽい人！　とまって下さい。風紀委員です！　能力発動を今すぐに止めてください。拘束します！」
と腕章を見せて、垣根の前に立ちはだかる。雪旗がとっさに叫んだ。
「やめ――ッ！」
「うるせぇ」
凄まじい速度で放たれた翼の打撃。雪旗はとっさに体が動き、初春の前に立って、モロに翼の攻撃を受けてしまう。
「が――ッッ?!!」
凄まじい威力と共に、しかもモロに横腹が喰らったことにより、錐揉みしながら勢い良く飛んでいく。イスやらテーブルを破壊しながら雪旗は意識を失ってしまう。
薄れゆく意識の中、とりあえず『アイテム』のみんなへ、雪旗が叫ぶ。
「せ、めて……その女の子だけは――!!」
なんというか、女の子を守る主人公か、それとも噛ませか。少しだけ判断に困る退場の仕方だった。

目が覚めると、俺はテーブルにもたれ掛かっていた。軽く拗ねる雪旗。
（なんだよ。誰か、少しは心配してくれても良いだろ……）
そんな事を思いながら、俺は辺りを見回すと、そこは凄惨な状況だった。ビルやら何やらが酷く破壊され、まるで高能力者同士で戦いがあったみたいな状況だった。
（高能力同士の戦い――――!!）
雪旗は思い出す。ここはまさにカッコイイ場面の一つと言っても過言ではない所だったじゃないか。一方通行ｖｓ垣根。だがあれは同時に危険も伴う。周囲の――だ。
「……クソッ！　気絶してる場合じゃねえ!!」
雪旗は走り出す。無論、能力を使ってだ。近くを見てみると、どうやら初春や辺りの一般人も怪我はしてないようだった。ひとまず安心する雪旗。そして徐々に酷くなっていく凄惨な状況の中、本当に怪我人０な事に驚く。
器用なバトル方だ。ここまで激しい戦いをしておきながら、被害は街のみなのだから。
さすが『一流の悪党』なんて名乗るだけはあるのだろうか。正直イタイが……。
「ハァ、ハァ……ハァ、ハァ……」
軽く息荒い雪旗。もう横腹を押さえつつ、やはり飛べるヤツの機動力は違うな、と痛感する。ベクトル操作も大概チートだ。基本的なモノは軽く反射してしまうのだから。
そして辿り着いたのはスクランブル交差点。そういう場所だ。そこの真ん中に血塗れで倒れている垣根とそこに拳銃で今、まさに止めを刺そうとしている一方通行。
（マズイッ!!）
雪旗はとっさに拳銃をどうにかしようと思った。あれはマズイ。あれでは死ぬ。死んでしまう。止めを刺そうとしているだ。一方通行が自分自身で――。
ここで雪旗が止めには入ろうが、おそらく口だけでは何の意味も無

いだろう。だからこそ、雪旗は一人でに足が動いて、その場に向かおうとした時、声が響く。

「待つじゃんよ、一方通行！」

黄泉川愛穂。警備員であり、教師であり、一方通行の家族である彼女が、今、一方通行を包み込もうとしていた。雪旗はそこから動いていた足を静かに止めた。なぜだろう。この後、起こる事はわかっている――わかっていて尚、動く事ができない。

できるはずが無い。ここは重要な場面だ。きっと一方通行にとって、何かを感じる場所なはずなんだ。このスクランブル交差点を少し見回り、多少だが、なぜだか、傷を負っている『アイテム』を見つける。おそらく俺が気絶した後、対象を変えたのか――というか、あの仕事はまだ有効だったのか、だったら本気で危険な目に遭わせていたかもしれない。と雪旗は少しだけ罪悪感を覚える。

そしてそんな事を考えてる間に黄泉川が一方通行の持っていた拳銃を優しく包み込んだ。

その瞬間。だった、本当に最悪なタイミングだった。

グサァッ！　と黄泉川の横腹辺りに白い翼が刃物と化したかのような形で黄泉川を貫いていた。黄泉川の意識はそこで失われたのだ。

そこからは想像通りだろう。一方通行がキレた。激情に駆られ、黒い噴出した翼が生え、そして一方的に蹂躙が始まっていたのだ。

黒い翼ｖｓ竜王の息吹

蹂躙。

それはすべてを飲み込む程の総量だった。それは垣根帝督という人間を殺すにははっきり言って、十分だった。いやむしろ十分すぎたのだ。だからこそだろうか。

雪旗の体は勝手に動いていた。『竜王の息吹』。雪旗は『黒い翼』を『竜王の息吹』で受け止めていたのだ。垣根はその場で気絶していた。

雪旗は凄まじい力の黒い翼を竜王の息吹でなんとか対処しきれている。黒い翼は凄まじい。あれは進化をすると『白い翼』になり、ユーラシア大陸全土をぶっ壊す程の力を有している。

今はまだそこまでいっていない。というかそこまでだったら、この学園都市なんて一撃なんじゃないだろうか？　そんな無駄な事を考えつつも、雪旗の手は一切緩めていなかった。

雪旗は本当にとっさに垣根を守っていた。垣根は未遂とはいえ、『アイテム』を殺しかけたヤツだ。そんなヤツを助けるなんてどうかしてると思う。

だが雪旗はその先の事を考えていた。そう、つまりここで貸しを作っておけば、垣根は『アイテム』に手を出せなくなるのだ。結果としては上々だ。垣根がバカでかい冷蔵庫みたいな機械に放り込まれて、ただただ『未元物質』を作るだけの機械にならなくても済むし、垣根は『アイテム』に手を出せなくなるし、一方通行が復活した『白垣根』にいろいろされなくなる。

もう万々歳じゃん。たったこれだけの事で――今、考えたんだけどね。と雪旗は付け加える。これさえなければ、完璧だったのだが、やはり雪旗も後先考えないタイプの人間だった。

それに一方的に不利益を被るのが、なんと完全に雪旗だけという、別に雪旗は一方通行に何か攻撃を仕掛けようとしている訳ではない上に守っている相手は垣根と来ている。それに一方通行にも一応黒い翼による後遺症が残るだろうが、それでも雪旗がおそらく、この後の重症に比べれば、絶対に安いモノだろう。

いやもしかしたら結構酷いヤツなのかもしれないけど、雪旗はいろいろと考えを巡らせたのだが、わからない事はわからないので、雪旗はとりあえず必死に受け止めようとしている。

あと少しだ。あと少しで打ち止めがやってくる。雪旗はそれまでの時間稼ぎで良い。これまで時間稼ぎをやってきた事がない訳ではない雪旗だ。一方通行戦だと必ず、時間稼ぎになっている気がするが、仕方ない。相手が相手なのだから。そう割り切って、雪旗は自身の状況を一度、確認する。

酷いものだった。頭から血が流れでて、腕から血が噴出していて、足からも流れている。これだけの出血量で死なないのが逆に不思議だった。おそらく雪旗自身、何かが少しでも欠けていたら、そのまま死ぬような状態なのだろう。死ぬのは怖くない。これは本心から言える。だが、他人を死なせるのは、自分が死ぬよりも嫌だった。

耐えられなかった。だからこそ、自分はこのような状態になっても尚立ち上がる事が、立ち続ける事ができるのだろう。

「コヒュー……コヒュー……」

静かに雪旗は息を整えながら、雪旗はある提案を思いついた。それは『肉体強化』で体を頑丈にするということだ。魔術は能力者が使うとこうなって、体の節々が徐々に破壊されていく。

だったらその体自体を強化させれば、どうなるのだろう。これを少しでも和らげる事ができるだろか？　試してみて損は無い。失敗してもそこまで損は無い。逆に成功すれば、雪旗はその後の魔術を使うのにも、絶対に役立つようなヤツだった。

そしてそれは成功された。よくよく考えれば、土御門だって、能力と併用して使っていたし、失敗する確率の方が低かったのだ。それにしても、これは非常に良い結果だった。

そして雪旗は二つの力を使い、そろそろ体力的に限界に近づいてきていた。いくら不死身だろうが、体力が無限な訳ではない、もうそろそろ、黒い翼でぶっ飛ばされる事も考えに入れないと――と考えた瞬間だった。

「やっと見つけたんだよ。ってミサカはミサカはゆっくり言ってみる」

やっと、本当にこっちから言っても、やっとの事現れてくれた。

――最後の希望（ラストオーダー）だ。

二言三言、打ち止めと会話した一方通行は徐々に黒い翼が無くなっていく。どうやら打ち止めが冷静にしてくれたようだ。雪旗もやっとの事、安心できる、雪旗はその場に倒れた。

雪旗はまたまた病院だったりする。はっきり言って、垣根の時よりも酷い格好だ。全身包帯とか本当にあるんだな。と雪旗は本当に漫画みたな状態になってしまった。

よくよく考えたら、魔術の過剰使用で死んだりするのだ。それを考えれば、雪旗が生きている事自体、普通に考えたら、不自然なのだろう。こんな事をしていたら、『アレイスター』に目をつけられたりしないだろうか。安易に口に出してはいけない名前、トップ１０に入るな。

そんな風に雪旗がウーン、ウーン唸っていると、ガラガラと扉が開く。そこにはなんというか、今までに見た事ない顔の『アイテム』がいた。なんて言い表したら良いか。とりあえず怒ってるというのはすぐにわかる顔だった。

雪旗は顔を真っ青にしながら、軽く笑顔で。

「……よっす！　俺、雪旗。全員……大丈夫!?」

バヂンッ！　と雪旗の頬に鋭い痛みが走った。そして全員の顔が泣き顔になっていた。あの麦野と滝壺ですらだ。雪旗は凄まじい罪悪感に襲われると同時に、必死に言葉を探す。はっきり言って、雪旗は女の涙に弱いなんて話じゃない。もうあたふたして、どうしようもなくなってしまう。というか一方通行の黒い翼と戦ってるときよりも狼狽している雪旗。

「え、あ……あぅ……あぁっと……その……」

狼狽して何もする事ができない雪旗はとりあえず、一旦深呼吸。そして渾身の土下座は包帯に包まれていてできないが、とりあえずこれならば、できる。

「すみませんでしたァァァァ!!!」

とりあえず、しばらくして、全員が泣き止んでくれた。ちなみに今の雪旗は心臓がバクバクしている。怯えだ。泣き止んだ後っていうのは必ずと言って良いほど、何か雪旗が痛い目を見ている。おそらく今回もあるのだろう、何か痛い目が。ビンタなんて非ではない何かが。だがその前に、雪旗も雪旗で気になっていた事があった。

「なぁ、その……悪いんだけどさ……なんで、俺が来た時にお前ら、ボロボロだったんだ？　垣根にやられたのか？」

雪旗がもしも垣根がやっていたとしたら、次こそ本気で潰すプランも用意しなくてはならなくなる、無論、奴隷的な意味で。

「あ、あれはなぁ……」

麦野が若干、歯切れを悪くする。そして四人は一斉一箇所に集まって、コソコソ話だ。

「(ど、どうします。超どうします。麦野！　雪旗が倒されたから、本気でキレたって超本人の目の前で言うですか!?)」

「(しょ、正直に話すのは絶対、嫌って訳よ！　全然、私のキャラじゃないって訳よ！)」
「(し、仕方ないわ。どうにかして、誤魔化すのよ！)」
「(賛成……)」
「……？」
　無論、そんな事情を知らない雪旗は疑問符を浮かべるばかりだ。
「あ、あれよ……その、第一位と第二位の戦いがあまりにも酷くて、私達が止めには入ろうとしたら、あぁ、なったって感じだよ。クソがッ！　言いたくなかったんだけどよぉ……！」
　と麦野は本気（の演技）でブチ切れているようだった。
「そ、そうだったのか……なんつーか、情けなく気絶して、悪かったな」
「……いいや、確か、中学一年生ぐらいの女の子を助ける為に頑張ったみたいじゃないか……」
「あぁ、まったく雪旗はいつも超雪旗としか言いようがありませんね」
「な、なんだ。その言い方。まるで俺が中学一年生に好かれたいが為に頑張ってたみたいじゃねぇか」
「まぁ、あながち間違ってないんじゃないかと私は思うんだけどねぇ……」
「そ、そんな訳ねぇだろ……？」
　一応、涙の件もあるので、強く言い出せないでいる雪旗。
「……ふーん」
　結局、アイテムは軽く、お見舞いの品を雪旗にあげて、帰っていった。
「アイツらは本当に……」
　そこには、高級フルーツがあった。やはり金の使い方はどこぞの常盤台のお嬢様と変わらないようだ。上条みたいな事は言わないが、雪旗的にも、お手製って言うのに憧れていたりしていたり、していなかったり。

完全敗北

「ふぅ……」

全快した雪旗は学校へと来ていた、しっかりと。休んでも良かったのだが、それだと逆に迷惑が掛かる気がするので、雪旗はしっかりと来ているのだった。

そして、今は昼休み。とある事情で異様に長引いた四時間目の所為で購買と食堂でいつも飯を食べている連中はこぞって、出遅れていたのだ。

「脱走だ！　脱走してコンビニに行くんだ!!」

誰が叫んだのか、その一言が原因で彼らを一気に動かす事になったのだ、そしてその中で蚊帳の外状態である人物。雪旗硬地は自分の持ってきたおいしそうな弁当を食べていた。

上条や青髪ピアスや土御門、そして姫神と吹寄までそっち派なのだから、大掛かりになるのはすぐにわかった事だろう。

軽く、バカバカしいと思っていた雪旗は冷めた目で冷めた弁当を食べていた。ちなみに朝早起きで弁当を作るのが日課の雪旗は当然のように持ってきていたのだ。そもそも四時間目が長引いたのだって、上条の『へー、じゃあ織田信長が織田幕府を作っていたら、日本はどうなっていたんですか？』とか言う関係ない一言が原因だったりするし、まぁ、責任を感じているらしく上条は上条で家庭科室で上条定食を作ろうとしていたらしいし、実際できてしまうのが、上条だ。まぁ、そんな事が許される訳が無いのだが。

そして、吹寄が作戦を考え、いよいよコンビニに行く事になったのだ。

（ああいうのに限って、吹寄ってかなりの力を発揮するよな……）

「あぁ？　なんだ？　こいつら、なんでこんなに張り切ってるんだ？」

とただいま食堂から帰ってきた麦野と滝壺とフレンダだ。コイツら今日だけ四時間目をサボりやがって、この難を逃れている。しかもそのまま食堂へ行くという事をしている。

ある意味ではラッキーだったのかもしれない。つまり、この場で誰

一人できなかった事をしている訳で。
（なんというか、まあ元々真面目って感じじゃねぇしな。コイツら……）
そんな事を考えながら、弁当はすべて食べ終える頃にはもう既に作戦を終えていたようだ。そして全員がなぜか雪旗を囲む。
「……何を考えていやがる……」
「お前の……能力が必要なんだ。陽動の為に……どうか、俺達に力を貸してくれないか？」
上条が頼み込む。どんだけ切羽詰まってるんだよ……。と軽く思った雪旗だ。しかも周り全員が真顔なのが、より一層雪旗の逃げ場を無くさせる。雪旗はため息を一つ、そして弁当をカバンの中にしまって。
「さっさと行くぞ。時間との勝負だからな！」
雪旗はさっそく陽動に行く事にした。上条、青髪ピアス、土御門、雪旗、吹寄がまず、運動靴へと履き代え、校舎裏へと急ぐ。金属フェイスを超えて、一気にコンビニまで一直線と思いきや、今、まさにファミレスから食事してきたと言わんばかりに災誤（さいご）先生が来た。
しまった！　雪旗達に緊張が走ったが、雪旗が一番初めに動いた。
「早く行け!!」
雪旗の一言により、全員が一気に走り出す。雪旗は逆にゴリラへと一気に飛んでいく――が、当然なのだが、相手は先生だ。ぶっ飛ばす事なんてできるはずがない。だから――。
「せんせーい!!!」
雪旗が一気に走り出す。当然、後ろの連中の時間稼ぎを少しでもする為だ。雪旗は真剣な表情でずっと時間を稼いでいた。雪旗を絞め落とそうとするような感じだが、それは避けれる。そして雪旗はなんとか、時間稼ぎに集中できた。
当然、一回でも捕まればアウトだ。その時点でおそらくこのゴリラはすぐさま、上条達を追うだろう。一応、この後の展開を知ってる身としては、このままの状況で、やれれば良いな、なんて関係の無い事を考えていた一瞬だった。雪旗が何かに引っ張られた。何に？　決

まっている。災誤先生の手によってだ。
グイッと雪旗は一瞬で意識を刈り取られた。意識が朦朧とする中、雪旗は思った。
（つ、つえぇ……）
結局、災誤はぶっ飛ばされた――五和に。
その後、上条達も無事、弁当を手に入れて、全員が食べる事ができたようだ。雪旗は教室に戻っていた。気絶した後、誰も居ないのを確認して、仕方ないので、戻ったのだ。
（はあ、疲れた……）
そんな事を思っていた。そしてこれは後から知った事なのだが、災誤先生はやはり途中で帰ったようだ。
そんなこんなで、言える事が一つだけある。災誤先生は強いのだった。早退したけど。
時間も過ぎ去り、帰宅時間だ。そして災誤先生を倒した五和に上条は衝撃の事実を伝えられた。『神の右席』である後方のアックアに命を狙われているのだ。
だが、実際、上条にはその実感というのはイマイチ湧かないかもしれない。なぜなら相手が強大すぎるからだ。そりゃ、第三次世界大戦まで巻き込むような連中に命を狙われるのだ。一介の高校生には実感なんて湧かないのも仕方ない事だろう。
（まぁ、アイツが一介の高校生であるかは別としてな……）
そんな事を思いながら、雪旗は若干の乾いた笑みを浮かべていた。そんなこんなで上条の寮の部屋に五和が行くのだ。おそらく『天草式十字教』の連中は五和を応援してるのじゃないだろうか。五和は上条に少なからず好意を持っているだろう。それは雪旗でもわかる事だ。というか見て一発でわかる程、なのにどうしてわからないのだろう。と雪旗は純粋に疑問を浮かべる。
いやまぁ、一応、高校生らしい心情を持っているはずだ、上条でも。
放課後になり、自室に篭りっぱなしの雪旗。ベットに横になりながら、思案していた。一人でテレビを見ながら。
（確か、新しくできた第二十二区のレジャーお風呂があったはずだ。

そこが戦いの場か……正直、アイツに勝てる気がしない。単純な身体能力ではまず圧倒されるだろう。俺も一応、身体能力向上系だが、あっちには絶対に勝てる気がしない。そもそも音速で動けるような連中と対等に戦えるような身体能力を俺は持ってないし。まあそれを補って余りある、魔術があるからな。俺には）

そんな事を考え、ひとまずまとまった。自分がやる事は一つ。さっさと終わらせる事だ。なんというか、この世界に来てから、いろいろと変化させてしまっている。こういうのって、どうなんだろうか。結構、後々から危険になってしまわないだろうか、と雪旗はかなり心配していたが、してしまった以上、もう元には戻せないので、雪旗は突っ走る事に決めている。あの三人と一匹の行く場所も変わらないだろうし、問題は無いだろう。

と考えを一通りまとめて、やっと一段落ついた雪旗は眠る事にした……。

バッと目が覚め、時間を確認する。八時二〇分。サァーと血の気が引いていく思いをした。雪旗はすぐさま部屋から出る。上条の部屋は既に無人。すぐさま能力を開放し、一気に二十二区へと急いだ。時間も時間な為、交通は既に止められている。ならば走っていくしかない。時間的に間に合わない危険性があるが、間に合わないのならば、間に合わないで問題ない。そういう緊張感とはかけ離れたモノを感じていた、だってそうだ。自分がこの世界に来ても来なくても、上条が死ぬなんて事はなかった。だったら大丈夫、大丈夫だ。

それが雪旗を安心させる。そう、この場に自分が行かなくても、大丈夫なんだ。大丈夫なはずなんだ。

携帯で時間を確認する。八時五十五分。もうそんなに経つ、急がなくては。そんな中、一つの影が。

「ん？　アイツ……」

雪旗が走っていると、唐突に後ろから声をかけられた。雪旗が振り向くとそこには垣根帝督が立っていた。怪我が全快しているようでいつものホストっぽい格好をしている。

「何してんだ？」

「悪い、今急いでるんだ……あとでにしてくれ」
「はぁ？　急いでるって……？」
　その疑問には答えず、雪旗はもう既に走り出していた。能力を使っている為、かなりのスピードだ。レベル４であるからこそのスピードだろう。大能力者であり、身体能力を強化させる、これがなかったら危ない場面もいくつもあった、なんとも頼もしい能力の一つだ。
　そんなこんなで雪旗のスピードは常人の非ではない、そうして、やっとの事、二十二学区に辿り着く。時間を調べてみると、九時四十分。なんとか間に合ったようだ。
「……ゼェ、ゼェ、ゼェ……」
　息がすっかり切れており、もう走る気力すら無い。こんな事なら、垣根に頼んで、翼でここまで運んで貰えば良かったと思った雪旗だった、確かにあの時は少し焦りすぎていた。
（はぁ、大丈夫だろうが……）
　そんな事を考えながら、この辺りをウロウロしていると、近くに人が乱雑に倒れてるのを発見した。そしてその中心に立っていた男に見覚えがあった。茶色い髪色。ごつい顔つき。ゴルフウェアを彷彿とさせる服装。そして屈強な体つき。
　後方のアックアだ。
「……むっ？　誰であるか」
「お前が後方のアックアか？」
「そうであるが、貴様には用は無い。私が用があるのは上条当麻、ただ一人である」
「そうかい、だがこっちには用があるんだよ。悪いけど、ここでアンタには退場させてもらうぜ!!」
　雪旗からの先制攻撃。それをアックアは悠々と避ける。
「その程度であるか？　笑わせるな」
　ゴッ!!　と雪旗の顔面をしっかりと捉え、凄まじい勢いのパンチが飛んできた。雪旗は避ける事すらできずに、一気にぶっ飛ばされ、跳ねながら、地面へと叩きつけられた。
「ガッ……!!?　ゲホッ！　ガハッ……!!!?」

背中を強く打った事で咳き込んでしまう。なんとか立ち上がる事ができたが、それでも相手の底が見えなかった。
（み、見えなかった……嘘だろ……？）
見えなかった。今までの攻撃で相手のパンチが見えないなんて経験がない雪旗にとって、それは普通以上に恐ろしいものだった。自分の持っている能力は『肉体強化』。つまり自分の身体野力を上げる能力なのだが、それすらも通じないという感じをさせた。
「つまらぬ、本当に私を倒しに来たのか？　その程度で？」
「調子に――乗るんじゃねぇ!!!」
凄まじい威力で蹴りを放つ。普通に人間ならば、喰らえば間違い無く骨を折るどころか、そのまま内蔵を破壊する事だってできる威力の蹴りだ。だが、それをアックアは腕でガードし、そのまま足を掴み、雪旗の体を持ち上げ、雪旗の体を一気に飛ばす。
十メートル以上飛ばされ、再び、地面へと叩きつけられるかと思いきや、スタッと綺麗に着地する。さすがにそれに驚いたのか、一瞬、関心を示したような感じを出したアックア。その隙を当然のように突く雪旗は飛び蹴りを食らわそうとする。だがそれすらも、読まれていたかのように避けられ、背中に重たい衝撃が来る。
「ぐゥゥゥあああああああ!!?」
痛みが走り、思わず叫んでしまう雪旗。ほとんど満身創痍の雪旗は今にも倒れこみそうなのをグッと堪えて、立っている。ほとんど気力で立ってると言ってもおかしくない状況だ。
「相手にならんな」
（スーハー……冷静になれ、俺。あれ……使うか？　でもあれを使って、俺は勝てるのか？　やべぇ、ちょっとずつ冷静になると相手の強大さがわかってきた。クッソ……どうする？　マジでキツいぞ……）
血の気が抜け、冷静になると、やはり恐怖というのがくるモノで雪旗の体を芯から少しずつ確かに震えさせている。いくら死なないとは言え、それでも恐怖というのは絶対にくるモノでガタガタと軽く体が震える。
（落ち着け、落ち着くんだ……）

雪旗は静かに目を見開き、そして雪旗は地面を強く踏み、前へ突進するように突き進む。アックアは別に特に何もしない、ただ待ち構えるだけだ。強者の風格、それでいて自分を嘗めているというのがすぐにわかる仕草だった。そんな挑発染みた行動だが、雪旗は怒りに飲まれない。どちらかと言うと、より冷静になり、そしてその隙を突こうという気になれた。

「ぶっ飛ばす！」

「かかってくるのである」

凄まじい激突が繰り広げられている。聖人の力がある上にアックアは傭兵上がり、戦闘技術でも自分の上をいってる。つまり身体能力のごり押しもできなければ、戦闘技術でも自分より勝っている敵なのだ。雪旗にとってはやりづらい以上に自分をあっさりと超えている存在という認識の方が強いだろう。というよりも、まず前提として勝つ事がほぼ不可能な敵だ。

だが、それはあくまで『能力』だけでは――――である。雪旗にはこの能力以上に今までずっと使ってきた『兵器』がある。

『竜王の息吹』。これならば、おそらくこの勝負は一瞬でけりがつくのではないのだろうか。いや相手も一応は戦闘のプロ。何かを察知してどうにかできるかもしれない。おそろしい力を発揮するアックア。雪旗では明らかに分が悪かった。

「……ゼェ、ゼェ……」

激しい激突を繰り広げ、雪旗はもう体全身が震えていた、膝が笑い、小突かれただけでももしかしたら倒れるかもしれない。そんな状態でも雪旗は立って、戦っていた。目は虚ろで格好もボロボロ。それでもなお雪旗は立って戦っていた。

「い、一体なぜそこまでするのであるか!?」

「……と、もだち……が殺されそうに……なっているんだ……見捨てれる……かよ……」

「友達……」

感慨深そうにそう呟くアックア。そしてアックアは何かを決心する。

「あと一日待つ……それまでに決めておくのである。自分か……上条当麻か」

アックアがそう言うと、どこかへと消えてしまった。その姿をやはり目では追えなかった。

後方のアックア

ボロボロの雪旗は一人で第二十二学区に倒れこんでいた。そして雪旗が体を動かすのも億劫な時に、ソイツは来た。
「よぉ、雪旗。お前っていっつもボロボロだな？」
「垣根か……まあな。いろいろ事情があんだよ」
「あの化物の事か？」
「なんだよ……見てたのか？」
「あぁ、まぁな。事情はよく飲み込めなかったが、とりあえず誰かが死ぬような世界にお前も入ってたんだな？　お前みたいな甘いやつでも」
「じゃなきゃ、お前や麦野達みてぇな連中には関わらねぇよ」
「それもそうか」
学生しかいないこの街ですら、殺しが存在してしまう。そんな『闇』の部分とも言える存在を雪旗はいくつも目の当たりにしてきた。その度に雪旗はなんとかしようと努力してきたのだ。
救う。なんて大層な事はしていない。それでも何かが変わってくれたのならば、雪旗はそれで良いのではないかと思っている。一番ダメなのは何も考えない事だ。やはり自分の考えをしっかりと持つべきなのだろう。そう思う雪旗。少しずつ、体力も回復してき、雪旗は立ち上がる。
「……ふぅ、次は万全の状態で本気でぶっ飛ばしてやるか……」
「あぁ？　まだやんのかよ？　諦めろってアイツ、マジで強いぞ？　よくわからんが、何を使ってるのすら、俺にはわからなかった。まあ俺の『未元物質』の前ではどんな常識も通用しねぇから無駄だろうけどな」
「知るか……あぁ、疲れた。体重たい……眠い……」
なぜか、本当に体が気だるくなっている雪旗。おそらく気を張ってた分、体力がかなり削られたのだろう。
回復が追い付かなくなるぐらいに。雪旗は自分の部屋まで垣根に送ってもらった。

垣根はしぶしぶ雪旗を運ぶ。こんなタクシー代わりみたいな役割をはじめは嫌がったが、もしかしたら自分は殺されていたかもしれない状況の中、助けて貰っている垣根にとってはここはこう動かざる得ないのだ。

「……悪いな。なんか、恩を利用したみたいでよ。いやそのつもりで前は助けたんだけどさ……」

「フン、気にするな。どうせ、この状況だったらどっちみちこうなってたさ」

そう言って、そこまでキレてない垣根。良かった。と雪旗は安堵した。さすがに今の状態から戦ったら、こちらに分が悪すぎる。正直言って、今なら、誰が相手だろうと、負ける自信しかない。と雪旗は思う。

（いや、それは自信とは言わないか……）

雪旗はそのまま連れて貰って、寮へと戻る事ができた。雪旗は帰ってきて早々、ベッドへと体を預けた。そして、すぐさまその意識は夢の世界へと誘われたのだ。

目を覚ますと、まだ日の光すら差し込んでいなかった。時刻は一時二十分。全然寝てねぇじゃねぇか。でも、確か……天草式は、結構早い時間に来ていた気がするな……。くっそ、頭が冴えない……。すぐさま、学ランに着替える、替えの学ランを着て、心機一転させる。次は殺すつもりでやる。

「……よし、行くか」

深夜一時。

深夜というのは、若干変なテンションになるものだが、今の彼にはそんなものは存在しない。あるのは、確かな恐怖と絶望感――ではない、むしろ、絶対に勝つという、確信に他ならない。

雪旗はアックアの第二戦目の場所を思い出しながら、走っている。

（場所は確か、第二十二学区の第三階層だっけ？）

すぐ傍の第二十二学区へ着くのは、早い。今の時刻は一時四十分。もう少し急がないと。

しばらく走っていると、やっと第二十二学区に辿り着く。

ここは地下施設が発展している。言ってみれば、地上よりも地下が広いという感じである。ちなみに、アックアはそこの三階層に居る。
辺りを雪旗は見回す。そこには壊れた機械が少なからずあり、おそらくアックアが壊しながら、進んだ結果なのだろう。
雪旗はちょっとだけ、深呼吸をしながら、アックアと戦うまであと少しだ。雪旗は心なしか、膝が笑っているように感じた。少なからず、恐怖心も抱いているのに、雪旗も気付く。
(情けないな……死なないだろ……ッ!)
死なない。その言葉だけで、この恐怖心を和らげるなんて不可能だ。それは雪旗にだってわかってる。自分が恐れてる理由は、死ぬからではないのだ。今まで、雪旗はいろんな戦いをしてきた。
その中で、未来を変えたなんて思わせる程の戦いを幾度もしてきた。
今まで、死傷者は出なかったが、もし今回、この戦いで、死人が出たら? 上条が死ぬのは無いにしても、もしかしたら五和が今回死んでしまうかもしれない、建宮が死んでしまうかもしれない、もしかしたら、他の天草式の誰かが死ぬかもしれない。
そんな恐怖が今も彼の心を蝕む。
(平気だ。大丈夫だ……俺だけで片付ければ、誰も傷つかない。俺はどうせ死なないんだ。だったら別にいくら傷ついても構わないだろ)
そんな自分の尊厳すら、どうでも良いと考えている。本気で考えている辺り、どこかおかしくなっているのかもしれない。三階層に着くと、既に後方のアックアが待ち構えていた。
ゴクリと唾を飲み込む雪旗は膝の震えが相手を見定めた瞬間、自然と治まった。
「……来たのであるか、まだ時間はあるのだが……?」
「急がなきゃ、やってられなくてね?」
「……決断は早い方が良い。どうするのであるか?」
「一つに決まってんだろ? 俺が友達を売る理由はねぇ――!」
「交渉決裂という訳であるか」
その言葉と同時だった。雪旗の体が吹っ飛ぶ。だが、ただ飛ばされ

ただけではなく、雪旗が体を後ろへと飛んで、ダメージを吸収していた。不思議だった。雪旗の体はまるで、羽のように軽い。レベルは確かに、相手の方が上だ。いくら身体能力を上げようと、最高まで上げたとしても、アックアには勝てない。だが――。

「……少しは腕を上げたのであるか？」

「いいや、たった数時間で上げれるような、裏技はさすがに、学園都市でもねぇよ。強いて言うなら、スッキリした後だからかな？」

「……ほう、面白い」

アックアの影から突如、金属棍棒（メイス）が現れた。雪旗はゴクッとつい息を呑み込む。向こうの攻撃の範囲と威力が格段に上がっただけだ、大丈夫だ。と雪旗は自分に言い聞かす。

「掛かってくるのである」

「……言われずとも!!」

雪旗は跳躍する。素早く近づいてく、雪旗にアックアは金属棍棒（メイス）を振るう――だけだ。とてつもない威力の攻撃が雪旗の体に叩きつけられるかと思いきや、雪旗はグイッと空中で体の向きを変えて、攻撃を避ける。

アックアの一瞬の驚きの表情を見て、少し愉悦に浸る雪旗。そのまま顔面に思い切り蹴りを喰らわしてその反動を利用して、一回転して、着地する。

「ふぅ……」

「むっ……やるのである……」

「お前の使い慣れてるその武器で、どう俺を倒すんだよ？」

「……一つである」

ブンッ！　と振り回す。そう、それだけだ。ただ振り回すだけで、相手が吹っ飛ぶのだ。だがそれは相手が普通の人間ならの話だ。こちらは学園都市の能力者、言ってみれば普通ではない。

「終わらせてやるよ」

走り出す雪旗。一気に飛び、本気で殴る。アックアはそれをメイスで向い撃つつもりのようだ。殴ると同時にブンッという音が聞こえる程の衝撃。

雪旗はとっさに身を引いて、その攻撃を避ける。来るとわかっていれば、何の事は無い。
そして、渾身の右拳がアックアの顔面を確かに捉えた。だが、その程度だった。アックアのメイスが雪旗の横腹を叩きつけた。何かが潰れた音がした。
雪旗の口から血が飛び出て、飛ばされる。
（ぐっ!!? マズイ……!?）
雪旗が魔術を使う場合、自らを傷つけ、放たなければならない。その前にダメージはあまり受けたくないのだ。今、この場で魔術を使わずにできるのならば、良いのだが、さすがにそれは不可能だとわかっている。
「ゴホッ！ グハ――ッ！ ガハ――ッッ!!?」
咳き込みながら、雪旗は立ち上がる。向こうへそれほど、ダメージを与えてないというのに、こちらはほとんど死にかけという状況だ。ここまで力の差を感じるのは、雪旗自身、滅多にない事だ。それほど、相手が悪い。
（マズイ……これだけで、意識が朦朧としてきやがった……一人じゃ厳しいのか？ 一人じゃ無理……なのか？）
アックアがズンズンとこちらに向ってくる。一切、躊躇を見せない。おそらくもう決心しているのだろう。雪旗を殺すという決心を。雪旗はいくら攻撃されようと死なないように体が作られている。だから、いくらアックアが殺そうとしても、無駄だ。だが、それをバレるのは――。
（困る……！）
雪旗は弱々しく右拳を握り締め、そして向う。雪旗の胸中はさながら絶望的な状況に立ち向う脇役の気分だ、と卑下する。
（脇役が勝っちゃいけないって言う法則はねぇよな……!!）
雪旗は拳を握り締めたまま。走り出す。アックアは再び、メイスを振り回そうとする。だが、終わりだ。
雪旗は体を低姿勢にさせながら、近づく、いつでも金属棍棒を避ける為だ。アックアが凄まじく、振り下ろす。雪旗はそれを右腕で受け

止める、雪旗の腕から、潰れた音が聞こえる。
どうやら右腕は使い物にならなくなったようだ。青くなった右腕を一瞬見て、苦い表情になった後、アックアを見定め。

一言発した。

「――『竜王の息吹』ッッッッ!!!!」

ギョッとした表情で雪旗を見るアックア、だがもう遅い。雪旗の最強最大の攻撃を受けて、今まで立ち上がったヤツなんて居ないんだ。
雪旗は放ち終わった後、今までにないぐらいの疲労感に襲われる。倦怠感、疲労感、様々なモノが雪旗に渦巻いている。
そんな良くないモノばかり渦巻いているが、一つだけスッキリとしたモノも雪旗の中に確かにあった。
それは――達成感。
「……終わった……」
バタッ！　と倒れこむ。血まみれの雪旗とそこで倒れているのは、アックアだ。血まみれで倒れているアックア。あの距離で受けたのだ。絶対に立てるはずがない、と彼は確信してる。
（というか、そうじゃないと俺が終わりだ）
ググッと力を入れて、立ち上がろうとするが、フラッと下半身から力が抜けるような感覚に襲われる。出血多量、横腹損傷、右腕損傷。傍から見ると、これ、死なない方が不思議じゃない？　みたいな感じになっている。
しかも、先程の『竜王の息吹』で最悪な場所がやられたのだ。雪旗は静かに目を閉じた。
目が覚めると、日が窓に差し込んでいた。雪旗は腕を動かそうとしたが、どうやらコードやら何やらが体にくっ付けられていて、動かしにくいのだ。雪旗は少しだけ、汗を掻いているので、拭きたいなんて考えている。
（えっと……どういう状況なんだ？）

思い出そうとするが、どうにも、アックアを倒した辺りから記憶が無い。おそらく意識がなかったのだろう。そんな事を考えていると、コンコンッと病室の扉からノック。雪旗がどうぞ。と言うと、そこに居たのは、天草式のメンバーと神裂火織だった。
「お？　お前ら久々だな。どうした？」
「一つ、良いですか？」
ズイッと距離を縮めてくる神裂に一瞬ビクッと体が震える雪旗。
「な、なんだ？」
「あなた、どうしてあんな所で、ボロボロになっていたのですか？　というか、その傍で後方のアックアも倒れていたのですが、どういう事ですか？」
遅れて、上条とインデックスに土御門も来たようだ。
（何、何!?　ちょっと大所帯すぎるよ！　病院は静かに!!）
心の中で叫ぶが、そんなものは届かず。ちょっとだけ、目を伏せながら、小声で。
「俺が倒しました」
「あ、あなたは!!　あなたは、一人でそんな無茶をしたのですか!!」
「……はい」
なんで、倒したのに怒られてるの……。なんて心の中で呟く雪旗。でもいつもの事なので、そこまで反抗心も湧いてこないのだ。これは向こうが自分を心配してくれているからしてくれる事だと言うのも、知っているから。
「というか、アックアはどうしたんだ？」
「アックアは私達が取り押さえました」
そうか……。と思い、ちょっとだけホッとする。どうやら役には立ったようだ。
「俺は役立ったみたいだな……」
「というか、どうやって一人で倒したのか、気になるのですが……」
呆れたように言う神裂は下がっていく。そして前に来るのは、上条とインデックスだ。
「よぉ、お疲れさん。いやぁ、今日は俺、何も役だってないというか、

なんというか、水臭いじゃないか、なんで俺にも教えてくれなかったんだよ？　全然知らなかったんですが」
「え？　いや、正直、お前の真似のつもりだけどな。いっつも一人で困難に立ち向って、それで女の子に惚れられるって言う。まあ、今回、俺にヒロインは居なかったけど」
「???　俺にいつそんな女の子が？　俺はいつだって、万年モテない男ですよ……」
トホホと肩を下ろしながら言う。雪旗はまず、インデックスの方をチラリと見て、五和の方をチラリと見て、神裂をチラリと見る。
（ふむ、ここに居るだけで、三人か……学園都市には、えっと……御坂に、御坂妹に、確か姫神もだっけ？　うん……爆発して！）
そんな事を笑顔で思いながら、しばらく待っていると、なぜか土御門に唆された神裂が堕天使エロメイドのコスチュームを着たりといろいろ病室で騒いでいて、ちょっと節度を守って欲しかった雪旗であった――。
いつもの連中が来ない事にちょっとだけ寂しさを感じながら、雪旗はみんなが去っていった後、窓を眺めていた。
その直後、ガラガラとノックも無しに、不躾に扉を開いていたので、雪旗が文句でも言ってやろうとそちらを見ると、そこには雪旗が青ざめる光景が広がっていたり、といろいろあったりしたのだ。

イギリス直行

学生の本分は、本来……勉強である。当然、雪旗硬地だってそれは忘れてはいない。だがしかし、そんな本分を忘れさせるようなイベント事は必要だとも思う。それが『一端覧祭』である。

『大覇星祭』が体育祭と言えば、こちらは文化祭なのだ。いくつかのグループが出来上がり、話し合いを再開している。

「っつか、高校の一端覧祭って中学の時とは何か違うんかいな。予算とかいっぱいもらえるといろいろやれる幅も広がったりするんやけど」

「にゃー、ぶっちゃけ学校見学会やオープンキャンパスも兼ねたりしてるから、そういうのに積極的なトコじゃないと予算はいっぱい出ないにゃー。ウチの高校はそういう欲が全然ない平凡高校だから思いっきり地味そうだぜい」

「金の話とか結構生々しいな。おい……」

正直、雪旗にとっては、中学時代というのが存在しないため、少し楽しみでもある一端覧祭。実際、雪旗が通っていた中学も別にそこまで文化祭に力を入れてるような場所ではなかった。特に楽しいイベントなど特になく、結局友達とサボったりしてるような、そんな感じだった気がする。

（ま、実際一端覧祭ってそこまで記憶に無いんだよな……。なんかその時に起きてたのって確か、トールとか出てきてたか？　そういや、アイツの能力って超チートだったよな、絶対に取りたい所だな……）

結局、関係無い方向へと思考を向けている。そんな事に思考を集中していながら、別の方向にもキチンと思考を向けている雪旗。それは紙相撲だ。今、上条当麻と雪旗硬地は戦っているのだ。紙相撲で――。

するとそこにデコ広い巨乳実行委員長吹寄制理は腕組をしながら、フンと鼻を鳴らして。

「世界最大の文化祭一端覧祭が近いという事は、ようやく私の季節が来たという訳ね、貴様達も時間を無駄にしてないで、少しは有意義な使い方をしてみれば？　特にそこの紙を折って、紙相撲をしてる、上条当麻と雪旗硬地!!」

指摘された二人は綺麗に揃って、ビクッと肩を震わす。

「え、いや……ほら、やっぱりさ、俺達ってこういうキャラじゃん？　だからやっぱり今まで通り、こうしてこういう時間は何かで暇を潰すみたいな？」

「余計な事は言わなくて良いッ！」

結局こうしてブチ切れられるのが、日常って言えば、日常なのだろう。

今日も特に何かするなんて事はせずに、授業も学校も終わって、ブラブラしていたら、急遽、携帯電話から電話が入る。雪旗は携帯の画面を見ると、土御門という文字が出ている。これだけで結構、嫌な予感が過ぎる――というか、多分これしか無いだろう。

「はい？」

雪旗は出ると、土御門が短く言う。

『今からイギリスに行け』

はぁ、とため息を吐く雪旗は、わかっていながら、応答する。

「ちなみに拒否権って言う、基本的な人権は？」

『もちろん、無いぜよ？　飛行機はこっちで用意しといたから、第二十三区に着いたら、国際空港の第三受付にあるクロークサービスで三二九三番のロッカーの荷物を受け取れにゃー。パスポートとか必要な物は全部、そこに入ってるから、学園都市のＩＤがそのままクロークの番号札代わりになってるから、受付に雪旗硬地って名乗れば、荷物は出てくるぜい。ちなみに上やんも同じ状況だにゃー」

「わかっとるよ、勘弁ってのは、お前は知らないからな……」

そう言って、携帯を切った瞬間に、背後から何者かの気配を感じ取る雪旗。即座に攻撃態勢に入ろうとしたが、それよりも先に動きを封じられ、雪旗は何かの薬品を嗅がされて、そのまま眠ってしまった。

目が覚めると、そこは空港のロビーだった。なんというか、隣にはまだ眠っている上条当麻とインデックス。ついでに三毛猫のスフィンクスまで居る。

「おい、大丈夫か」

雪旗がそう呼びかけながら、上条をゆさゆさと揺らすと上条はとぼけた声を出しながら、目を覚ます。そして、辺りを軽く見回して、呟く。

「今回はいろいろとダイナミックすぎねーか」

そんな事を呟いたら、上条は手元にメモがある事に気付く。それを見ると、まあ言ってみれば、どう頑張ってもこの状況から逃げれないよと書かれていたのだ。ちなみに雪旗もまったく同じ状況のようだ。

「さて、楽しい旅に行きますか」

「そーだな……」

インデックスを起こして、上条は肩を降ろしながら、荷物を取りに

行く。

「上条当麻さんと雪旗硬地さんですね。三二九三番の荷物をお預かりしております。こちらでよろしいでしょうか」

受付のお姉さんがそんな事を尋ねてきたが、知るかよと心の中で悪態をつきながら、適当に頷いてデカいスーツケースを受け取ると、パカッと明けて、中身を確認する。

中にあるのは、紙幣とパスポート、フライチケット、いかにも指令所っぽい紙束、後は激安チェーン店で買ったんだろう着替えが数日分。

雪旗と上条はフライチケットを手に取り、そこに表記されてる内容を読んで、上条は呻き、雪旗はハァとため息を吐く。

「どうやら、本気……みたいだな」

「あぁ、本当にロンドンの空港の名前が書いてある……」

ちなみにインデックスは事情を一切知らないので、ちんぷんかんぷん状態である。雪旗は先程眠らされた所為か、頭がフラフラして、よく理解できない。

「なんか、イギリスでデカい魔術的なトラブルが起きたみてぇだな、それでインデックスが必要って感じかぁ」

「そうだな。なんか、よくわからんけど」

おぼつかないような口調で、むにゃむにゃと言う上条に続けて、さらに言う雪旗。

「で、現状のインデックスの保護者役が上条だから、行かなきゃ、いけないってなー。俺はそのさらに付き添いみたいな感じか……」

「とうまに保護されてるってのは、心外な評価なんだよ！」

「そういうのは毎日ご飯を作ってもらってる子の発言じゃありません。はぁ、行くしかねぇのか、ぶっちゃけ面倒臭いなぁ」
「俺はそのさらに面倒臭いのですが……」
わざわざインデックスを召喚するという事は、それだけ大きな事と言う訳だ。それだけを考えると、憂鬱という事にしかならない。
「それで、私達が乗るひこーきってどこにあるの？」
「ん？　土御門のヤツが特別に手配してるって……」
「もしかして、アレか？」

最大時速七〇〇〇キロオーバー。日本と西欧をおよそ弐時間で突っ切る怪物飛行機。
その瞬間、二人は真っ青な顔になる。

「なあ、インデックス、雪旗。あれは諦めて、キャンセル待ちでもいいから、次の飛行機に乗ろう。もっと普通の人体に影響がない飛行機に」
「私はとにかく、ご飯が後ろに飛ばなければ、なんでもいいかも」
そんな事情を知らない雪旗は何がなんだかわからないという感じだった。

スカイバス３６５。上条、インデックス、雪旗が三毛猫を見捨てて、乗り込んだ極めてゆったりとした大型旅客機だった。座席部分は二階建てで、座席面積も大きい。一番安くてこれだ。これは十分ゆったりできる。まさに最高というヤツだ。
ただ一つの問題を無視すれば。

「まさか、ロンドン行きが一つも無いとはな」

まさか一杯になってるとは、思って無かった。結局、イギリス行きだが、スコットランドのエジンバラ行きの飛行機に乗って、そこから

乗り換えをするという事になった。

（ただ、お財布ケータイってクレジットカードだからな、後で請求書見て、悲鳴あげなきゃいいけど……）

そんな心配をしている上条。そんな心配を露知らず、インデックスは飛行機に夢中で、雪旗はさっそく眠っていた。ちなみにインデックスは安全ピンだらけのあの修道服じゃ無理だったので、ワンピースに着替えている。

「と、とうま！　なんかボタンがいっぱいついてるよ！」

「確かにボタンはいっぱいあるけど、ゲームじゃねえぞ、それ……ッ!?　お前、それは有料チャンネルだっ!!」

即座にインデックスを止めに入っていた。

「うるせぇ……」

そして、その茶番に対して、小さく文句を垂れる雪旗だった。

テロリスト

それからいろいろあった。
一言で言えば、インデックスが飛行機に夢中で、ガチャガチャしてるというべきなのだが、それを止める上条という図だった。雪旗は半目を開けて、それを見ていた。さすがの雪旗もこんな状況でグースカ眠れる程、呑気にはなれないようだ。

そしてインデックスが空腹を訴えると、上条が、あと九時間程、機内食がない事を言えば、インデックスが暴走し掛けたりと、大変だった。

「フリードリンクコーナーか」

雪旗はおもむろに立ち上がった上条が向かった場所を見ると、そこにはそう書かれていた。
「何それ？」
「んー？　ようは、自由に飲み物が飲めるコーナーって訳だな」
「えぇ!?　全部!?」

「んー。多分」

「凄いかも!!」

興奮気味のインデックスに、気圧されている雪旗だが、おそらくそれで間違いないと思う雪旗。それから、なにやら落ち込んでる様子を見せてる上条が、三つ程、紙コップにジュースを入れてきている。
「お、ジュースじゃん」

雪旗はそう言って、上条から紙コップを貰い、チビチビ飲んでいた。インデックスはその雪旗とは真逆で凄まじい速度でゴクゴクと飲ん

でいて、さらにおかわりを要求していた。

九時間後。

今、フランスの空港で一時停止している飛行機。どうやらトンネル爆破が影響しているようだ。英語でアナウンスが発せられた時に、雪旗はそれを聞いて、どうやら物資運搬サービスに協力していると、言うのがわかった。隣の上条はうん？　と唸っていた。その後、日本語も発せられていた。

それからしばらくインデックスの暴れ具合を見ていた雪旗。やはり空腹というのは人間を変えてしまうのだろう。特にそういうのにかなり敏感なインデックスの事だ、それは普通の人間の非ではないだろう、雪旗は、南無と手を合わせて、目を閉じていた。

それから物資も運び終わり、やっと飛び出す。ちなみにあと二十分という言葉にさらにブチ切れるインデックス。

時間の経過と共に、インデックスは瞳が徐々に獰猛になっていく、何度からフライトアテンダントの登場もあったが、なんとかなったので、良かったと思う。しかも機内食の前倒しまでしてもらったのだ。

「……うーん。随分と遅いな。俺、ちょっと見て来るかな」

上条がそう言うと、インデックスも即座に反応したが、ここは雪旗とお留守番という事になった。

「ビーフオアフィッシュ……ビーフオアフィッシュ……ビーフオアフィッシュッ!!」

「ビーフオアフィッシュって、肉か魚どっちかって意味だと思うんだが、インデックスは両方食うつもりか……？」

そんな呪詛のように何度も呟かれたビーフオアフィッシュを耳に入れながら、雪旗は上条の帰りを待っていた。

それにしても――と雪旗は少しだけ考え込む。

（随分と時間が取られるな。あのフライトアテンダントさん……怒られてなきゃいいけど……あぁ、だから上条は見に行ったのか？　なるほど）

そんな事を考えながら、適当に暇を潰していた。

上条も戻ってきて、随分と時間が経ったが、いまだにビーフオアフィッシュ……機内食が来る気配が見られない。

隣ではブルジョワなヤツがクラッカーをボリボリ食ってたりと、インデックスの空腹を刺激する事ばかりだ。

数分経ってから、雪旗がふと思い出したかのように。

「あのさ、このポンドってさ、これもイギリス行きなわけなんだし、使えないか？」

それを聞いた上条とインデックスが雷にでも打たれたかのような反応をしていた。そして途端に歯をガチガチと鳴らすのはインデックス。命の危険を感じた上条はとっさに叫ぶ。

「お、俺を噛み殺したら、クラッカーもないんだぞっ!?」

なんとか生命を繋ぎ止めると、雪旗が立ち上がり。

「俺がクラッカー持ってきてやるから、好きにしてろよインデックス」

「雪旗さぁぁぁんっ!!!?」

そんな死の宣告をした雪旗は足早にクラッカーの場所へと向かって行く。

クラッカー十個　３ポンド。随分なボッタクリだと思いつつも、お金を投入。日本円で大体４００円ぐらいか？　それで十個はふざけてる。

そんなに貰う事はできないな……そんな事を思いつつ、さっさとインデックスに持っていこうと思った瞬間だった。一枚の扉が半開きになって

いるのが、見えた。

そこは一言で言えば、関係者以外立ち入り禁止区間と言うべきか、おそらく掃除用具やら何やらが入っているような場所だろう。その扉が半開きになっていたのだ。

無視しようにも、それに気付いてしまったらなんだか気持ち悪いので、雪旗はその扉をしっかりと閉めようとした瞬間だった。チラッと見えた

奥の方に、電子レンジが見えた、その電子レンジに明らかに赤黒い何かがべったりとこびり付いていた。それが何かははっきりとはわからなかったが、まあ場所が場所だ。何かのソースが零れた可能性もあるし――なんて思った瞬間だった。

「見てしまいましたね」

後ろから声がした。女性のものだ。そして、とっさに組み伏せられそうになったのを抵抗してしまい、逆に押し倒す形になってしまった。

「あ、あぁ……すみません。とっさにやられたもんで、つい……」

能力なしでもこれだけ戦えるようになったのは素直に褒められるところなのかもしれないが、それを使う相手を間違えたらおしまいだと思う。傍から見れば完全な犯罪者だ。

すぐに退いて、退散しようとした瞬間腕を捕まれる。

「逃がしませんよ。あの血痕を見られたからには……！」

「け……っこん？　血痕ッ!?」

意味がわからないまま、血痕という言葉だけが酷く重たく頭に響く。これはどうやら厄介事に巻き込まれたと考えていいのかもしれない。その後、彼女が機長にその事を伝え、どうやら彼は本格的に拘束されるようだ。

「はぁ……厄介事だなぁ……」

テロリスト……多分そういう事なのだろう。おそらくこの機内にはテロリストもしくはそれに準ずるモノが潜伏しているのだろう。それが血痕の正体だ。おそらく凄まじく危ない状況だという事はわかっている。そういえば、と雪旗はこの機内で起こる騒動を思い出す。随分と前の記憶のため、すっかり忘れていた。

そのままおそらくこのフライトアテンダントさんの増援がやってくる。ゴツイ格好をした男もいるわけだが。おそらくその人が結構重要なポストに居る人っぽい。

「さて、どうするかコイツを、どうやら組み伏せるのには失敗したみてぇだが、そこそこ慣れてるヤツみてぇだな……まあいい。あれやこれやと騒がれちゃ迷惑だ。コイツをそこに隔離しとけ」

「で、ですが、そこまでの事をする事が私達に許されているのでしょうか……？」

男とは反対に女性の方は酷く困惑している。それもそうだ。客一人だけこうして隔離すると言っているのだから、だが男の方は憮然とした態度で。

「大きな問題になっても、俺のせいにすればいい。そこの機内食の加熱スペースに放り込んでおけ」

そう言われ、フライトアテンダントさんは申し訳なさそうな顔をしながら、雪旗をここに隔離した。隔離される前、フライトアテンダントにテロリストが入り込んでいるという情報を聞かされた。おそらく一切の情報もなく隔離するのを申し訳なく思ったのだろう。

ドアがロックされる鈍い音が響く。

(さて、どうするかな。ここを出るのは簡単だが……場所の正確な位置まで覚えてないぞ。あ、そういや……確かテロリストは俺達の取った席のとこに何か細工を仕掛けようとしてたような……?)

思い出せない事に歯痒さを募らせながら、仕方なしにここに留まる雪旗は近くにあった段差に腰を掛ける。

おそらくここで隔離されていても、誰かしらが危険に及ぶことはないだろう。最悪、上条当麻という男が居る。そう思いながら、しばらく時間が経つ。

機内では、おそらく今もテロリストの騒動で大慌てのはずだ、一つ思い出したことがある雪旗は、飛行機が降下する瞬間を待っていた。ブザーは鳴らないはずだが、降下はするはずだ。

(確か、幻覚を見せる魔術を使っていたはずだ)

しばらく待って、やっと急降下し始めた。その瞬間、勢い良く振りかぶってドアを前方に吹っ飛ばす。すぐさま走り出し、マイクを持っている男を探し出す雪旗。結構な広さのため、探すのが困難かと思い

きやそうでもなく、フランス語で、不時着をやめろという声が聞こえた。どうやら相当焦っているらしく、周りが見えてないテロリスト。

「おい」

雪旗はそう呟くと、男は勢い良く振り返り、それと同時に懐に忍ばせておいた動物の骨を削って作ったナイフを取り出して、こちらに迫ってくる。

「クソッ!!　なんだテメエは!!」

「それはこっちの台詞だよ」

相手からしてみれば、雪旗はただの高校生。こちらはナイフを持っているし、即座に殺す事は簡単だと思っていた。相手はこちらの存在に気づいているのは、見るからに明らか、すぐに消さなくてはと考えたテロリスト。

だが相手が悪かった。ナイフを構え、雪旗に迫ってくるが、それを悠々と避け、そのまま殴りつけた。

その後、テロリストを縛り付けた後、フライトアテンダントにテロリストを渡し、席に戻ろうと思ったが、再び思い出す。

（あぁ、そういや……）

すぐさま、フライトアテンダントに話をつけて、貨物室に直行する。中にはテロリストの仲間が拳銃を持って待ち構えているが、雪旗ならば、拳銃程度どうという事はない。当ったところですぐに修復されるだろう。そもそも深い傷にすらならないだろう。だが一応、原作を考えて。

「すみません、コーヒーか、なんでもいいんで、熱湯になった飲み物用

意してもらえますか？　バケツ一杯分お願いします」

特に何も言わず、フライトアテンダントさんは用意してくれて、雪旗はそれを持ちながら勢い良く貨物室に入ると、ギョッとした顔をした男の片手には拳銃が握られていた。

即座に男は拳銃をこちらに向けるが、雪旗はその拳銃と男に、熱湯を思い切りぶっ掛ける。

「がっ……!!?」

かなりの熱さに思わず拳銃を手放してしまうテロリスト相手に、雪旗はすぐに接近し。

「オラッ!!」

ぶん殴って、テロリストを気絶させた。バッグなどの中に他の重火器がいろいろと入っていたが、それを使う余裕もなかったテロリスト。

（本当に熱膨張してんのかな……）

そんな事を考えながら、着陸を待つ雪旗だった。